

なき御ほどを。わが心をやりてさしげうつくし  
 しみ給ふも。ことほりにめでたし。あるとき  
 は。わりなきわざしかけ奉り給へるを。御ひも  
 ひきどきて。御木ちやうのうきろにてあぶら  
 せ給ふ。あはれこの宮の御志とにぬるは。嬉  
 しきわざかな。このぬれたるあぶるこそ。おも  
 ふやうなるこしちすれと。よろこばせ給ふ。中  
 つかさの宮わたりの御とを。御心にいれて。  
 そなたの心よせある人とおぼして。かたらは  
 せ給ふも。まことに心のうちはおもひるたると  
 おほかり。行幸ちかくなりぬとて。どのうち  
 をいよつくりみかきせ給ふ。世におもし  
 ろき菊のねをたづねつほりてまいる。いろ  
 くうつろひたるも。黄なるが見どころある  
 も。さまざまにうへたてたるも。あさぎりのた  
 えまに見わたしたるは。げにおいもまぞきぬ  
 べきこしちするに。なぞやまして。おもふとの

すこしもなのめなる身ならまし加ば。すきず  
 きしくももてなしわかやきて。常なき世をも  
 すぐしてまし。めでたきと。おもしろきとを。  
 みきくにつけても。たにおもひかけたりし心  
 のひくかたのみつよくて。ものうくおもはず  
 に。なげかしきことのみさるぞいとくるしき。  
 いかで今は猶ものわすれ志なん。思ひかひも  
 なし。つみもふかよりなど。あけたてはうちな  
 がめて。水鳥どもの。思ふことなげにあそびあ  
 へるをみる。  
 水鳥を水の上やよそにみん我も浮たる世を過しつゝ  
 かれもさこそ心をやりてあそぶとみゆれど。  
 身はいとくるしかんなりと。思ひよそへらる。  
 小少將の君のふみをこせたる返ごどかくに。  
 時雨のさどかきくらせば。つかひもいそぐ。又  
 空のけしきもうちさはぎてなんとて。こしお  
 れたるとやかきませたりけん。くらうなりに

たるにたちかへり。いたうかすめたるこせん  
 しに。

雲間なくがむる空もかきくらしいかに忍ふる時雨なる覽  
 かきつらむともおぼえず。

理りの時雨の空は雲まあれどがむる袖ぞ乾くまもなき  
 その日あたらしくつくられたる舟ども。さし  
 よせさせて御覽ず。れう頭げざしゆのいける  
 かたちおもひやらせて。あざやかにうるはし。  
 行幸はたつの時と。まだあかつきより人々け  
 さうし心づかひす。上達部の御座は。にしのた  
 いなれば。こなたはれいのやうにさはがしう  
 もあらず。内侍のかんのどの、御かたに。中々  
 人々のさうぞくなども。いみじうとのへ給  
 ふときこゆ。曉に小將の君まいり給へり。もろ  
 どもにかしらけづりなぞす。れいのさいふど  
 も。日たけなんと。たゆき心どもはたゆたひ  
 て。あふぎのいとなをくしきを。また人にい

ひたる。もてこなんとまぢるたるに。つゝみの  
 音を聞つけて。いそぎまいるさまあしき。御こ  
 しむかへ奉るふながく。いとおもしろし。よす  
 るを見れば。かよちやうのさる身のほどなが  
 ら。はしよりのほりて。いとくるしげにうつぶ  
 しふせる。なにのどく。なるたかきまじらひ  
 も。身のほどかぎりあるに。いとやすげなし  
 しとみる。御帳のにしおもてに。おましをしつ  
 らひて。みなみの庇をひんがしのまに。御い  
 しをたてたる。それより一間へだて。ひんが  
 しにあれたるきはに。北みなみのつまにみす  
 をかけへだて。女房のわたる南のはしらも  
 とより。すだれをすこし引あげて。内侍二人い  
 づ。その日のかみあげ。うるはしきすがた。か  
 らゑをおかしげにかきたるやうなり。左衛門  
 のないし。御はかしとる。青いろのむもんのか  
 らきぬ。すそごのも。ひれ。くんたいは。ふせむ



れうをは<sup>綴</sup>じ<sup>極</sup>たんにそめたり。うはぎはきくの五へ。かいねりはくれなる。すがたつきもてなし。いさゝかはつれてみゆるかたはらめ。はなやかにきよげなり。辨の内侍。しるしの御はこ。くれなるにえびぞめのをりものうちぎ。裳からきぬは。さきのおなじと。いとさゝやかにあかしげなる人の。つゝましげにすこしつゝみたるぞ。心ぐるしうみえける。あふぎよりはじめて。このみましたりとみゆ。ひれはあふちたん。ゆめのやうにも今宵のたつほど。よそほひ。むかしあまくだりけんをとめこのすがたも。かくやありけんとまでおぼゆ。近衛つかさ。いとつき／＼しきすがたして。御こしのこどもをこなふ。いときら／＼し。頭中將。御はかしなと／＼りて内侍につたふ。みすの中を見わたせば。色ゆるされたる人々は。れいの青いろあかいのからきぬに。ぢずりの裳うは

ぎは。をしわたしてすはうのをり物なり。たむまの中將ぞえびぞめをきて侍し。うちものどもは。こき薄き紅葉をこきませたるやうにて。中なるきぬども。れいのくちなしのこきうすき紫苑色。うらあをき菊を。もしは三重など心となり。綾ゆるされぬは。れいのおとなくしきはむもんのおをいろ。もしはすはうなど。みな五へにて。かさねどもはみなあやなり。おほ海のすりもの。水の色はなやかにあさ／＼として。こしどもは。かたもんをぞおほくはしたる。うちぎはきくの三へ五へにて。をり物はせず。わかき人は。菊の五へのからぎぬを心にしたり。うへはしろく。あをきがうへをばすはう。ひとへはあをきもあり。うへうすすはう。つき／＼こきすはう。中に白きませたるも。すべてしごまあかしきのみぞ。かど／＼しくみゆる。いひしらずめづらしくおどろ／＼しき

あふぎどもみゆ。うちとけたるありこそ。まほならぬかたちもうちまじりてみえわかかれれ。心をつくしてつくろひけさうし。をどらむとしたり。女系のおかしきにいとようにて。どしのほどのおとなびいとわかきけむ。かみのすこしをとろへたるけしき。またさかりのこちたきが。わがまへばかり見渡さる。さてはあふぎよりかみのひたいつきぞあやしく。人のかたちをしなく／＼しくも。くだりてももてなすところなんめる。かゝる中にすぐれたるとみゆるこそ。かぎりなきならめ。かねてより。うへの女房。宮にかけてさふらふ五人は。まいりつどひてさふらふ。ないし一人。命婦二人。御まかなひの人ひとり。おものみいるとて。ちくぜん左京のおもとの。かみあげて。内侍のいでいるすみの。はしらもとよりいづ。これはよろしき天女なり。左京は。青い

ろに柳のむもんのから衣。ちくぜんは。菊の五へのから衣。裳は。れいのすり裳なり。御まかなひ橘三位。あをいろのから衣は。からあやの黄なるきくのうちぎぞ。うはぎなんめる。ひととあけたり。はしらがくれにて。まほにもみえず。殿。わか宮いだし奉り給て。おまへにて奉り給。うへ。いだからうつし奉らせ給ふ程。いさゝかなかせ給ふ御こゑ。いとわかし。弁宰相のきみ。御はかしとりてまいり給へり。もやの中とよりにしに。どのうへおはするかたにぞ。わか宮はおはしまさせ給ふ。うへ。とにいでさせ給てぞ。宰相の君は。こなたにかへりて。いとけそうにはしたなき心地しつると。げにおもてうちあかみてゐ給へるかほ。こまかにあかしげなり。衣の色も人よりけにきはやし給へり。くれゆくまゝに。がくどもいとおもしろし。上達部おまへにさふらひ給ふ。万ざい



らく。太平樂。賀でんなどいふまひども。ちや  
 うけいしをまかで。音聲にあそびて。山のさき  
 のみちをまふほど。とをくなりゆくまゝに。ふ  
 えの音も。つゝみのをども。松風も。こぶかく  
 吹あはせて。いとおもしろし。いとよくはらは  
 れたるやり水の。こゝちゆきたるけしきして。  
 池のみづなみたさはぎ。そゝろさむきに。  
 うへの御あこめたふたつ奉り給へりけり。  
 左京の命婦の。をのがさむかめるまゝに。いと  
 をしがりきこえさするを。人とはまのびてわ  
 らふ。ちくせんの命婦は。こ院のおはしまし  
 時。この殿の行幸はいとたびくありしとな  
 り。そのありかのありなど。おもひいでいふ  
 を。ゆゝしきこともありぬべかめれば。わづら  
 はしとて。とにあへまらはず。木丁へだてゝあ  
 るなめり。あはれいかなりけんなどだにいふ  
 人あらば。うちこぼしつべかめり。御前の御あ

そびはむまりて。いとおもしろきに。わか宮の  
 み聲。うつくしう聞え給ふ。右のおとの萬歳樂  
 みこそに。あひてなんきこゆると。もてはやし  
 きこそ給ふ。左衛門のかみなど。万ざいらく  
 千秋樂と。もろこそにずして。あるむのおほい  
 どの。あはれさきくの行幸を。などてめいのぼ  
 くありとおもひ給へけん。かゝりけることも侍  
 りける物をと。そひなきし給。さらなるとなれ  
 ど。御みづからもおぼしめるこそ。いとめでた  
 けれ。殿はあなたにいでさせ給ふうへはい  
 らせ給て。右のおとのを御前にめして。筆とり  
 てかき玉ふ。宮づかさ殿の家司のさるべきか  
 ざり加階す。頭辨のしてあないは奏せさせ給め  
 り。あたらしき宮の御よろこびに。うちの上達  
 部。引つれて拜したてまつり給ふ。藤原ながら  
 かどわかれたるは。列にもたち給はざりけり。  
 次に別當になりたる右衛門督大宮の大夫よ。

宮のすけかゝいしたる侍従宰相のつぎくの  
 人舞踏す。宮の御かたにいらせ給て程もなき  
 に。夜いたうふけぬ。御こしよすとのゝじれ  
 ば。出させ給ぬ。又のあしたに。内の御つかひ。  
 朝霧もはれぬにまいれり。うちやすみすぐし  
 て。みずなりにけり。けふぞはじめてそひ奉ら  
 せ給。殊さらに行幸の後とて。又の日。宮の家  
 司。別當。おもと人など。まきのさだまりけり。  
 かねてもきかで。ねたきことおほかり。日比の  
 御まつらひ。れいならず。やつれたりしをあら  
 たまりて。御前のありさまいとあらまほし。と  
 し比心もどなく見奉り給ける御ことの。うちあ  
 ひてあけたてば。どのうへも参り給つ。もて  
 かしづき聞え給ふ。にほひいとこゝろとなり。  
 くれて月いとおもしろきに。宮のすけ。女房に  
 あひて。どりわきたるよろこびもけいせさせ  
 んどにやあらむ。妻戸のわたりも。御ゆどのゝ

けはひにぬれ。人のをどもせざりければ。この  
 わたどのゝひがしのつまなる。宮のないしの  
 つぼねにたちよりて。こゝにやとあないし給。  
 宰相は中のまによりて。まださゝぬかうしの  
 かみをしあけて。おはすやなどあれど。いでぬ  
 に。大夫のこゝにやとの給にさへ。きゝ忍ばん  
 もことゝしきやうなれば。はかなきいらへ  
 なぞす。いとおもふとなげなる御けしきども  
 なり。我御いらへはせず。大夫を心にもてな  
 しきこゆ。ことほりながらわろし。かゝる所に。  
 上臈のけぢめいたうはわくものかど。あはめ  
 給。けふのたうとさなど。聲おかしうたふ。よ  
 ふくるまゝに。月いとあかし。かうしのもどと  
 りさげよとせめ給へど。いとくだりてかむだ  
 ちめのみ給はんも。所といひながらかたはら  
 いたし。わかやかなる人こそ。ものゝほどまら  
 ぬやうにあさへたるも。つみゆるさるれ。なに



かあざれがましとあもへば。はなたず。御いかは。霜月のついたちの日。れいの人々の。またてゝのぼりつどひたる御前の有さま。繪にかきたる物あはせの所にぞ。いとようにて侍し。御丁の東のおましのきはに。みきちやうを。おくのみさうじよりひさしのはしらまで。ひまもあらせずたてきりて。南おもてにおまへの物はまいりすへたり。にしによりておほみやのおもの。れいのちんのおしき。なにくれのだいなりけんかし。そなたのことはみず。御まかなひ宰相の君。さぬき。とりつく女房も。さいしもどゆひなどしたり。わか宮の御まかなひは。大納言のきみ。ひんがしによりてまいりすへたり。ちいさき御だい。御さらども。御箸のだい。すはまなども。ひいなあそびのぐとみゆ。それよりひんがしのまのひさしのみすしこしあけて。弁の内侍。中つかさの命婦。小中將の

君など。さへいかぎりぞとりつきつゝまいる。おくにゐて。くはしうは見侍らず。こよひ小輔のめのと色ゆるさる。こゝしきさまうちしたり。宮いだし奉れり。御丁のうちにて。どのうへ。いだしうつし奉り給て。あざりいでさせ給へり。ほかげの御さまけはひ。とにめでたし。あかいろのからの御ぞ。おずりの御裳。うるはしくさうぞき給へるも。かたむけなくもあはれにみゆ。大みやは。えびぞめの五への御ぞ。すはうの御こうちぎたてまつれり。殿。もちるはまいり給ふ。上達部の座は。れいの東のたいのにしおもてなり。いまふた所の大<sup>照光公幸</sup>臣もまいり給へり。はしうへにまいりて。またゑひみだれてのゝぢり給ふ。おりひつ物こものどもなど。殿の御かたより。まうちぎみだちとりつゝきてまいる。かうらんにつけてすへわたしたり。たちあかしの光の心もとなければ。四

位少將などをよびよせて。志そくさへせて人々はみる。うちのだいはん所にもてまいるべき。あすよりは御ものいみとて。こよひみないそぎてとりはらひつゝ。宮の大夫みすのものとに参りて。上達部おまへにめさんどけいし給。きこしめしつとあれば。殿よりはじめ奉りて。みなまいり給。はしのひんがしのつまどのまへまでゐたまへり。女房ふたへみへづゝゐわたされたり。みすどもを。そのまにあたりて居給へる人々。よりつゝ巻あげ給ふ。大納言の君。宰相のきみ。こ少將の君。宮の内侍とる玉へり。右のおと。よりて御木丁のほころびききたちみだれ給ふ。またすぎたりとつきじろふもまらず。あふぎをどり。たはふれこどのはしたなきもおほかり。大夫。かはらけどりてそなたにいで給へり。みの山うたひて。御あそびさまばかりなれど。いとあもしろし。そのつぎのま

のひんがしのはしらもとに。右大將<sup>實資</sup>よりて。衣のつま袖ぐち。かぞへ給へるけしき。人よりとなり。ゑひのまぎれをあなづりきこえ。又たれかどはなごおもひ侍て。はかなきともいふに。いみじくざれ。いまめく人よりも。けにこそおはすべかめれまか。さかづきのすんのくるを。大將はおち給へど。れいのことならひの千とせ万代にてすぎぬ。右衛門督。あなかしこ。このわたりに若むらさきやさふらふと。うかいひ給ふ。源氏にかゝるべき人見え給はぬに。かうへは。まいていかでものし給はんと聞たり。三位のすけ。かはらけとれなどあるに。侍従の宰相たちて。内のおと。おはすれば。まもよりいでたるをみて。おとゝゑひなきしたまふ。權中納言。すみのまのはしらもとによりて。兵部のおもとひこしるひ。きゝにくきたはふれこゑも。殿のたまはす。おそろしかるべ



き夜の御みひなめりと見て。ことはつるまゝに。宰相のきみにいひあはせて。かくれなどするに。東おもてに。どのきんだち宰相中將など入て。さはがしければ。ふたりみちやうのうしろにかくれたるを。とりはらはせ給て。ふたりながらとらへすへさせ給へり。わかひとつづつつかうまつれ。さらはゆるさむとの給はす。いとほしくおそろしければ。きこゆ。

いかにいかいか數へやるべき八千歳の餘り久き君がみよをばあはれつかうまつれるかなど。二たひばかりずせさせ給て。いとうのたまはせたる。

蘆たづの齡しあれば君かよの千歳の數もかぞへこりてんさばかりえひ給へる御こちにも。おぼしけるとのさまなれば。いとあはれにとはりなり。げにかくもてはやし聞え給にこそは。よろづのかざりもまさらせ給ふめれ。千代もあへましく。御行すえのかずならぬこちにだに。お

もひつつけらる。宮のおまへきこしめすや。つかうまつれりと。我ほめし給て。宮の御てにて。まろわろからず。まろがむすめにて。宮わろくおはしまさず。はもまたさいはい有とおもひて。わらひ給ふめり。よいおとこはもたりかしておもひたんめりと。たかふれきこえ給も。こよなき御えひのまぎれなりとみゆ。さるともなければ。さはがしき心ちはまながら。めでたくのみきるさせ給。どのうへ。きにくしとおぼすにや。わたらせ給ひぬるけしきなれば。をくりせずとて。はうらみ給はん物ぞとて。いそぎて御丁のうちをどをらせ給。宮なめしとおぼすらん。おやのあればこそ。子もかしこけれと。うちつぶやき給ふを。人わらひきこゆ。いらせ給ふべきともちかうなりぬれど。人はうちつきつつ心のどかならぬに。おまへには。御さうしつくりいとなませ給

とて。あけたてば。まづむかひさふらひて。色とのかみえりとのへて。物語のほんどもそへつつ。どころくにふみかきくばる。かつは。どちあつめたむるをやくにて。あかしくらす。なにのこもちかつめたきに。かゝるわざはせさせ給ふと。きこえ給ふものから。よきうすやうども。ふですみなど。もてまいり給ひつつ。御すりをさへもてまいりたまへれば。どらせ給へるを。おしみのまりて。ものくまにむかひさふらひて。かゝるわざまいづとさいなむなれど。かくべきすみふでなど給はせたり。つぼねに。物がたりの本どもどりにやりて。かくしをきたるを。御前にあるほどに。やをらおはしまいて。あさらせ給て。みなないしのかんの殿に奉り給てけり。よろしうかきかへたりしは。みなひきうしなひて。心もどなき名をぞとり侍りけんかし。わか宮は。御

物がたりなどせさせ給ふうちに。心もどなくおぼしめすとはりなりかし。御前の池に。水鳥どものひいにおほくなりゆくをみつつ。いらせ給はぬさきに。雪ふらなん。このおまへの有さま。いかにおかしからんとおもふに。あからさまにまかでたるほど。二日ばかりありても。雪はふる物か。見どころもなき故郷の木立をみるにも。ものむづかしう思ひみだれて。年比つれくにながめあかしくらしつつ。はなどりのいろをもねをも。春秋に往かふ空のけしき。月のかけ。霜雪をみて。その時きにけりどばかりおもひわきつつ。いかにやいかにとばかり。行末の心ぼそさはやるかたなき物かば。はかなきものがたりなどにつけて。うちかたらふ人。おなじ心なるは。あはれにかきかはし。すこしけどをきたよりどもを。たづねてもいひけるを。たいこれをさまくにあへしらひ。



そいろごとにつれくをばなぐさめつ。世  
にあるべき人かずとはおもはずながら。さし  
あたりて。はづかしいみじと思えるかたばか  
りのがれたりしを。さものこせるとなくおも  
ひしる身のうさかな。こゝろみに物がたりを  
とりてみれども。見しやうにもおぼえず。あさ  
ましくおはれなりし人の。かたらひしあたり  
も。我をいかにおもなく心あさきもの思お  
とすらんとをしはかるに。それさへいとはづ  
かしくて。えをとづれやらす。心にくからんと  
おもひたる人は。おほそらにては。多やちらす  
らんなど。うたがはるべかめれば。いかでか  
は。我心のうちあるさまをも。ふかうをしはか  
らんと。とはりにて。いとあいなければ。中た  
ゆとなければ。をのづからあまたイコ、ニテかきたゆるも。あ  
またすみさだまらずなりたりとも。思ひや  
りつ。をとなびくる人も。かたうなどしつ。

すべてはかなきとにふれても。あらぬ世にき  
たる心ちぞ。こゝにてしもうちまさり物あは  
れなりけり。たいえさらずうちかたらひ。すこ  
しもこゝろとめておもふ。こまやかに物をい  
ひかよふ。さしあたりて。をのづからむつびか  
たらふ人ばかり。すこしなつかしくおもふぞ  
ものはかなきや。大納言の君の。よるくは。  
御まへにいとちかうふしたまひつ。物がた  
りし給しけはひの戀しきも。猶よにまたがひ  
ぬる心か。  
浮寝せし水の上のみ戀しくて鴨のうは毛にさえをさらぬ  
かへし。  
打はらふ友なき比のねざめにはつがひし鷺ぞよはに戀しき  
かきざまなどさへいとおかしきを。まほにも  
おはする人かなとみる。雪を御覽して。折しも  
まかでたるとをなん。いみじくにくませ給ふ  
ど。人々もの給へり。どのうへの御せうそこ

には。まろがとめしたびなれば。ことさらに  
いそぎまかす。とくまいらんとなりしもそ  
らごとにて。程ふるなめりと。のたまはせられ  
ば。たはぶれにても。さきこえさせ給はせしこ  
となれば。かたじけなくてまいりぬ。いらせ給  
ふは十七日なり。いぬのときなど聞つれど。や  
うやう夜ふけぬ。みなかみあげつゝるたる人  
卅よ人。そのほかにみえわかず。もやのひん  
がしおもてひがしのひさしに。うちの女房も  
十よ人。みなみのひさしのつまどへだてゝる  
たり。御こしには。宮のせんじのるいとげの御  
車に。どのうへ少輔のめのと。わか宮いだ  
き奉りてのる。大納言宰相の君。こがねづくり  
に。つぎのくるまに。こ少將。宮の内侍。つぎに  
むまの中將とのりたるを。わろき人とのりた  
りとおもひたりしこそ。あなとくしと。いと  
いかゝる有さまむづかしう思ひ侍しか。どの

もりの侍従の君。弁の内侍。つぎに左衛門の内  
侍。どの、せんじ。しきぶとまではしだいしり  
て。次は。れいの心々にてのりけり。月のくま  
なきに。いみじのわざやと思ひつ。あしをそ  
らなり。むまの中將の君を。さきにたてたれば。  
ゆくゑもしらずたどくしきさまこそ。我う  
しろをみる人は。づかしくもおもひしらるれ。  
ほそどの、三のくちに入てふしたれば。こ少  
將のきみもおはして。なをかゝる有さまのう  
きとをかたらひつ。すぐみたる衣どもをし  
やり。あつごえたるきかさねて。ひどりに火  
をかき入て。身もひえにけるもの、はした  
なさをいふに。侍従の宰相。左の宰相中將。き  
んのぶの中將など。つぎくによりきつとど  
ぶらふもいと中々なり。こよひは。なきものど  
おもはれて。やみなばやと思ふを。人にとひ聞  
給へるなるべし。いとあしたにまいり侍らん。



こよひはたへがたく。身もすくみて侍など。ことなしひつゝ。こなたのぢんのかたよりいづ。をのがじいへちといそぐも。なにはかりのさと人ぞはと。おもひをくらす。わが身によせては侍らず。大かたの世のありさま。こ少將のきみのいとあでにおかしげにて。世をうしどおもひひみてるたまへるを見侍るなり。ちぎみよりことはじまりて。人のほどよりは。さいはひのこよなくをくれたまへるなんめりかし。よべの御をくり物。けさぞこまかに御覽ずる。御くしのはこのうちのぐども。いひつくしみやらんかたもなし。手匣一よろひ。かたつかたには。白きしきしつくりたる御さうしども。古今。後撰集。拾遺抄。そのふともものは。五てうにつくりつゝ。侍従の中納言と。延幹と。をのくさうしひとつに。四くわんをあてつゝかゝせ給へり。へうしはら。ひもおなじから

のくみ。かけごのうへにいれたり。したには。よしのぶもとすけやうの。いにしへ今のうたよみどものいへくの集かきたり。えんかむとちかずみのきみどかきたるは。さるものにて。これはたゞ。けぢかうもてつかはせ給べき。みしらぬものどもにまなさせたまへる。いまめかしうさまとなり。五節は廿日に參る。侍従宰相に。まひ姫のさうぞくなどつかはす。右宰相中將の。五節にかぶら申されたるつかはすついでに。はこいよひにたきものいれて。心葉梅の枝をして。よりも。いどみましたるきこえあれば。東のおまへのむかひなるたてじとみに。ひまもなくうちわたしつゝ。ともしたる火の光。ひるよりもはしたなげなるに。あゆみいるさまども。あさましう。つれなのわざやとのみ思へど。人の

うへどのみおぼえず。たゞかう。殿上人のひたおもてにさしむかひ。志そくさゝぬばかりぞかし。へいまんひきをいやるとすれど。おほかたのけしきは。おなじことぞ見るらんとおもひいづるも。先むねふたがる。なりとをの朝臣のかしづき。錦のからきぬ。やみのよにもものにまぎれず。めづらしうみゆ。きぬかちにもじろぎも。たをやかならずぞ見ゆる。殿上人心とにかしづく。こなたにうへもわたらせ給て。御らむず。殿も忍びて。やりどより北におはしませば。心にまかせたらざるさし。ながきよのはたけども。ひとしくととのひ。いとみやびかに心にくきけはひ。人にをどらずとさだめらる。右宰相中將の。有べきかぎりはみなしたり。ひすましのふどりどりのひたるさまぞ。さとびたりと。人ほゝゑむなりし。はてに藤宰相のおもひなしに。いまめかしく心となり。か

しづき十人あり。又ひさしのみすおろして。こぼれいでたる衣のつまども。したりかほにおもへるさまどもよりは。見どころまさりて。ほかにみえわたさる。どらの日のあした。殿上人にや。わか人だちの。めづらしとおもへるけしきなり。さるはすれる衣もみえずかし。その夜さり。春宮のすけめして薫物賜ふ。大きななるはこ一つに。たかう入させたまへり。おはりへは。どのうへぞつかはしける。そのよは。お前の心みとか。うへにわたらせ給て御覽ず。わか宮おはしませば。うちまきしのゝじる。常にことなるこゝちす。物うければまばしやすらひ。ありさまにしたがひて。まいらむとおもひてゐるに。こひやうゑ。こ兵部なども。すびつにゐて。いとせばければ。はかくしう物もみえ侍らずなどいふほどに。殿おはしまして。



なごて。かうですぐしてはゐたる。いざもろともにと。せめたてさせ給て。心にもあらずまうのぼりたり。舞姫どものいかにくるしからんと見ゆるに。おはりのかみのぞ。心ちあしがりてゐぬる。夢のやうに見ゆる物かな。ことばて、ありさせ給ぬ。この比のきんだちは。たゞ五節所のおかしきとをかたる。すだれのはしもかうさへ。心こにかはりてゐるたる。かしらつきもてなしけはひなごさへ。さらにかよはず。さまざまになんあると。きくにくくかたる。かゝらぬ年だに。御らむの日のわらはのこゝちどもは。をろかならざる物を。ましていかならむなど。心もとなくゆかしきに。あゆみならびつゝいできたるは。あいななくむねつふれて。いとをしくこそあれ。さるは。どりわきてふかう心よすべきあたりもなしかし。我もくくと。さばかり人のおもひて。さしいでたるとなれば

にや。めうつりつゝ。をどりまさりけざやかにもみえわかず。いまめかしき人のめにこそ。ふともものけぢめも見とるべかめれ。たゞかくこもりなきひる中に。扇もはかくしくもたせず。そこらの公達の立まじりたるに。さてもありぬべきみのほど。心もちひとひながら。人にをどらじとあらそふ心ちも。いかにおくすらんと。あいななくかたはらいたきぞ。かたくなしきや。たばのかみのわらはの。あをいしらつるばみのかざみ。おかしと思ひたるに。藤宰相のわらはは。赤色をきせて。しもづかへのからぎぬに。青色をしかへしきたる。ねたげなり。わらはのかたちも。ひとりはいとまほにはみえず。宰相の中將は。わらはいとそびやかに。かみどもおかし。みなこきあこめに。うはぎは心となり。かざみは五へなる中に。おはりはたゞえびぞめをきせたり。中くゆへゆへし

く心あるさまして。物の色あひ。つやなど。いとすぐれたる。あふぎとるとて。六位のくら人どもよるに。心となげやるこそ。やさしきものから女にはあらぬかどみゆれ。われらをかればかやうにて出居よとあらば。又さてもさまよひありくばかりにぞかし。かうまでたちいでんとはおもひかけきや。されど。めにみずあさましきものは。人の心なり。されば今より後のおもなさは。たゞたれになれすぎ。ひたおもてにならむもやすしかしと。身のありさまの。夢のやうにおもひつゞけられて。有まじきことになさへ思ひかゝりて。ゆゝしくおぼゆれば。めどまるとも。れいのなかりけり。侍従宰相の五せちつぼね。宮のおまへのたゞ見わたすばかりなり。たてじとみのかみより。をどにきくすだれのはしもみゆ。人の物いふこそ。ほのきこゆ。かの女御の御かたに。左京むまといふ人な

む。いとなれてまじりたると。宰相中將むかしみしりてかたり給を。一夜かのかひつくろひにてゐたりし。ひんがしなりしなん。左京と源少將も見しりたりしを。ものゝすがありて。つたへ聞たる人々。おかしうもありけるかなどいひつゝ。いさまらずかほにはあらじ。むかし心にくだちてみならまけんうちわたりを。かゝるさまにてやは出たつべき。忍ぶとおもふらんを。あらはさんのこゝろにて。おまへにあふぎどもあまたさぶらふ中に。蓬萊つくりたるをしもえりたる。心ばへ有べし。みしりけんやは。はこのふたにひろげてひかげをまろめて。そらいたるくしども。まろきものいみじく。つまぐをゆひそへたり。すこししたすぎたまひにたるわたりにて。くしのそりぎまなんなをくしきと。君だちの給へば。いまやうのさまあしきまで。つまもあはせたるそら



しごまして。くろぼうをしまろかして。ふつゝかに走りさきゝりて。まろきかみ一かさねにたてぶみにまたり。たいふのおもとしてかきつけさす。

後拾遺

おほかりし豊の宮人さしわきてしるき日蔭を哀れごぞみしおまへには。おなむくはおかしきさまにまなして。扇などもあまたこそとの給はすれど。おどろくしからむも。とのさまにあはざるべし。わざとつかはすにては。忍びやかにけしきばませ給べきにも侍らず。これは。かゝるわたくしとにこそ聞えさせて。かほまるかるまじきつぼねの人して。これ中納言の御使。御とのより左京の君に奉らんと。たかやかにさしをきつ。引とめられたらんこそ。見ぐるしけれとおもふに。はしりきたり。女のごゑにて。いづこより入きつるとふなりつるは。女御どのゝとうたがひなく思ふなるべし。なにはか

りのみゝとむむるとも。なかりつるひごろなれど。五せちすぎぬとおもふ内わたりのけはひ。うちつけにさうくしき。をみの日の夜の調うがくは。げにおかしかりけり。わかやかな殿上人など。いかになごりつれくならん。たか松の明子こきんだちさへ。こたみいらせ給し夜よりは。女房ゆるされてまもなくをりありき給へば。いとほしたなげなりや。さたすぎぬるを。かうにてぞかくろふる。五せちこひしなども。ことにおもひたらず。やすらひ。こ兵衛などや。その裳のすそかざみにまつはれてぞ。こ鳥のやうにさへづり。されおはさうずめる。臨時の祭の使は。どの權中將教通の君なり。その日は御物いみなれば。殿御とのゐせさせ給へり。上達部も。まひの人の公達もこもりて。夜ひとよ。ほそ殿わたり。いとものさはがしきけはひまたり。つとめて。うちのおほいどのゝ

御隨身。このどのゝみずいゑんにさしとらせていにける。ありしはこのふたに。しろがねのさうしばこをすへたり。かゝみをまいて。ぢんのくじ。白がねのかうがいなど。使のきみのびんかゝせ給べきけしきをまたり。はこのふたに。あしてにうちいでたるは。日かげの返事なめり。文字二つ落てあやうし。との心たがひても有かなと見えしは。かのおとどの。宮よりと心え給て。かうことくしくまなし給へるなりけりとぞきし侍りし。はかなかりまたはぶれわざを。いとをしうことくしうこそ。殿のうへも。まうのぼりて物御らんず。使のきみの藤かざして。いとものくしくおとなびたまへるを。くらの命婦は。舞人にはめも見やらず。打まもりくぞなきける。御物いみなれば。御社より。丑の時にぞかへりまいれば。御かぐらなどもさまばかりなり。かねときが。こ

ぞまではいとつきくしげなりしを。こよなくをどろへたるふるまひぞ。みしるまじき人の上なれど。あはれにおもひよそへらるゝとおほく侍る。まはすの廿九日にまいる。はむめて参りまも。こよひのとぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなど思ひ出れば。こよなく立なれにけるも。うとましの身のほどやとおぼゆ。夜いたうふけにけり。御物いみにおはしましければ。おまへにもまいらず。心ぼそくて打ふしたるに。まへなる人この。うちわたりは。猶いとけはひことなりけり。さどにては。今はねなましものを。さもいさときくつのもまげさかななど。色めかしくいひあたるをきいて。  
玉葉  
年暮て我世更行風の音に心のうちの冷しき哉  
とぞ獨むたれし。つごもりのよ。ついなは。いとくはてぬれば。はぐるめつけなど。はかな



きつくろひどもすとて。うちどけるたるに。弁の内侍きて。物がたりして臥給へり。たくみのくら人は。なげしの志もにゐて。あてきがぬふものゝかさね。ひねりをしへなど。つくくくとしるたるに。おまへのかたにいみじくのじり。内侍をこせど。いみにもおきず。人のなきさはぐをどのきこゆるに。いとゆるしく。物も覺えず。ひがとおもへどさにはあらず。たくみのきみ。いざくどさきにをしたて。ともかうも宮志もにおはします。先まいりて見奉らんと。内侍をあらゝかにつきおどろかして。三人ふるふく。あしもそらにてまいりたれば。はだかなる人ぞふたりゐたる。ゆげひ。こ兵部なりけり。かくなりけりとみるに。いよくむくつけし。みづし所の人も。みないで。宮のさぶらひも。たきぐちも。なやらひはてけるまゝに。みなまかでけり。てをたききのゝおれ

ど。いらへする人もなし。おもひのやどりのどじをよびいでたるに。殿上に。兵部丞とくら人よべくど。はちも忘れてくちづからいひたれば。たづねけれど。まかでにけり。つらきとかぎりなし。式部丞すけなりぞ参りて。どころくのさしあぶらども。たいひとりさしいれられてありく。人々もおほえずむかひゐたるもあり。うへより御つかひなどあり。いみじうおそろしうこそ侍しか。おさめどのにある御ぞどりいでさせて。この人々にたまふ。ついたらちのさうぞくはとらざりければ。さりげもなくてあれど。はだかすがたはわすられずおそろしきものから。おかしうともいはず。こといみもしあへず。正月一日。かん日なりければ。わか宮の御いたゞきもちるのことゝまりぬ。三日ぞまうのぼらせ給ふ。としの御まかなひは。大納言の君さうぞく。ついたらちの日は。くれな

ゐ。えびぞめ。からきぬは赤色。地ずりの裳。二日。かうばいのをりもの。かいねりはこきあを色のから衣。いろずりの裳。三日は唐綾の櫻がさね。から衣はすはうのをりもの。かいねりは。こきをきるひは。くれなるはなかに。紅をきる日は。こきをなかになど。れいのとたり。もえぎすはう。山吹のこきうすき。こうばいうす色など。常の色々をひとたびにむつばかりどうはきとぞ。いとさまよきほどに侍。さい志やうのきみの御はかしとりて。どのいだしき奉らせ給へるに。ついきてまうのぼり給ふ。くれなるのみへいつくどませつ。おなじ色のうちたる七へにひとへをぬひ。かさねくませつ。うへにおなじ色のかたもんの五へうちき。えびぞめのうきもむの。かたきのもんををりたる。ぬひさまさへかどくしみへがさねの裳。赤色のから衣ひとへのもんを

いりてしさまも。いとからめいたり。いとあかしげに。かみなどもつねよりつくろひまして。やうだいもてなし。らうくしくおかし。たけだちよきほどに。ふくらかなる人のかほ。いとこまかにほひおかしげなり。大納言の君は。いとさゝやかにちいさしといふべきかたなる人の。志ろうつくしげに。つぶくどこえたるが。うはべはいとそびやかに。かみたけに三すんばかりあまりたる。すそつきかんざしなどぞ。すべてにるものなく。こまやかにうつくしきかほも。いとらうくしく。もてなしなど。らうたげになよびか也。せんじのきみは。さゝやけ人の。いとほそやかにそびへて。かみのすぢこまやかにきよらにて。おひさがりのすゑより一尺ばかりあまり給へり。いと心はづかしげに。きはもなくあでなるさまし給へり。物よりさしあゆみていでおはしたるも。わ



づらはしう心づかひせらるゝこゝちす。あでなる人はかうこそあらめど。心ざま。ものうちのためへるもおぼゆ。この次に。人のかたちをかたりきこえさせば。物いひさがなくや侍るべき。たいいまあやさしあたりたる人とはわづらはし。いかにぞやなど。すこしもかたほなるはいひ侍らむ。宰相の君は。北野三位兼正よふくらかに。いとやうだいこまめかしう。かどくしきかたち志たる人の。うちるたるよりも。みもてゆくに。こよなくうちまさり。らうくしくて。くちつきに。はづかしげさもにほひやかなるともそひたり。もてなしなど。いとびしくはなやかにぞみえ玉へる。心ざまもいとめやすく。心うつくしき物から。又いとほづかしき所そひたり。こ少將の君は。そこはかどなくあでになまめかしう。二月ばかりの志だり柳のさま志たり。やうだいいとうつ

くしげに。もてなし心にくく。心はへなども。わが心とはおもひとるかたもなきやうに。ものつゝみをし。いとよをはぢらひ。あまり見ぐるしきまでこめい給へり。はらぎたなき人。あしざまにもてなし。いひつぐる人あらば。やがてそれにおもひいりて。身をもうしなひつべく。あへかにわりなきところつゝい給へるぞ。あまりうしろめたげなる。宮の内侍ぞ。又いときよげなる人。たけたちいとよきほどなるが。るたるさますがたつき。いとものくしく。いまめいたるやうだいにて。こまかにとりたてし。おかしげともみえぬ物から。いとものきよげにうるくしく。なかたかきかほして。色のあはひ白きなど。人にすぐれたり。かしらつき。かんだし。ひたひつきなど。あな物きよげと見え。はなやかにあいきやうづきたる。たいありにもてなし。心ざまなどもめやすく。露ばか

り何方さまにも。うしろめたいかたなく。すべてさこそあらめど。人のためしに志つべき人がらなり。えん殿がりよしめくかたはなし。式部のおもとは。をどうとなり。いとふくらげさすぎて。こえたる人の。色いと志ろくにほひて。かほぞいとこまかによしはめる。かみもいみむくうるはしくて。ながくはあらざるべし。つくるひたるわざして。宮にはまいる。ふどりたるやうだいの。いとおかしげにも侍しかな。まみひたひつきなど。まことにきよげなり。うちゑみたる。あいきやうもおほかり。わかうどの中に。かたちよしと思へるは。小たいふ。源式部。小たいふはさしやかなる人のやうだいの。いと今めかしきさまして。かみうるはしく。もどはいどこちたくて。たけに一尺よあまりたりけるを。おちほそりて侍り。かほもかどくしう。あなおかしの人やとぞみえて侍。かたち

はなをすべき所なし。源式部は。たけよきほどにそびやかなるほどにて。かほこまやかに見るまゝに。いとおかしく。らうたげなるけはひ。ものきよくかはらかに。人のむすめとおぼゆるさま志たり。こ兵衛丞なども。いと清げに侍り。それらは。殿上人のみのこすすくなかり。たれもとりはづしては。かくれなければ。人くまをもよういするに。かくれてぞ侍るかし。宮木の侍従こそ。いとこまかにおかしげなりし人。いとちいさくほそく。猶いわらはにてあらせまほしきさまを。心とおひつきやつしてやみ侍にし。かみのうちぎにすこしあまりて。すゑをいとはなやかにそぎて参侍しぞ。はてのたびなりける。かほもいとよかりき。五節の弁惟中といふ人侍り。平中納言のむすめにして。かしづくと聞えしが。ゑにかいたるかほして。ひたひいたうはれたる人の。まじりいたうひぎ



く。かほもこゝはと見ゆる所なく。いと老ろ  
 う。手つき。かいなづき。いとあかしげに。かみ  
 は。みはじめ侍し春は。たけに一尺ばかりあま  
 りて。こちたくおほかりげなりしが。あさまし  
 うわけたるやうにおちて。すそもさすがにほ  
 そらず。ながさは。すこしあまりて侍めり。こ  
 まといふ人。かみいどながく侍りし。むかしは  
 よきわかうど。いまは琴柱に膠さすやうにて  
 こそ。さどゐして侍なれ。かういひひて。心  
 ばせぞかたう侍るか。それもとりく。い  
 どわろきもなし。又すぐれておかしう。心おも  
 く。かどゆへもよしも。うしろやすさも。みな  
 ぐするとはかたし。さまぐ。いづれをかどる  
 べきとおぼゆるぞ多く侍る。さもけしからず  
 も侍るともかな。齋院（聖子）に。中將の君といふ人  
 侍るなり。聞侍るたよりありて。人のもとにか  
 きかはしたる文を。みそかに人とりてみせ侍

し。いとこそえんに。われのみ世にはものゝ  
 ゆへしり心ふかきたぐひはあらじ。すべてよ  
 の人は。こゝろもきもなきやうに思て侍る  
 べかめる。見侍しに。すゝろに心やましう。お  
 ほやけばらどか。よからぬ人のいふやうに。お  
 にく。こそおもふ給へられしか。文かきにも  
 あれ。歌などのおかしからんは。わが院より外  
 に。誰かみしり給ふ人のあらん。よにおかしき  
 人のおひいでば。わが院こそ御らむじゝるべ  
 けれなどぞ侍る。げにことほりなれど。わが身  
 ざまのこゝろをさしめいはい。さい院よりいで  
 きたる歌の。すぐれてよしとみゆるも。とに侍  
 らず。たゞいとあかしう。よし／＼しうはおは  
 すべかめる所のやうなり。さぶらふ人をくら  
 べていどまんには。このみ給ふるわたりの人  
 に。かならずしもかれはまさらむを。つねに  
 いらたちてみる人もなし。おかしきゆふ月よ。

ゆへある有明。花のたより。郭公のたづね所に  
 まいらたれば。院は。いと御心のゆへおはし  
 て。所のさまは。いと世ばなれかむさびたり。  
 又まぎるゝともなし。うへにまうのぼらせ給  
 ふ。もしは。殿なむまいり給。御どのみなるな  
 ど。ものさはがしきありも。まじらずもてつ  
 け。をのづからまりこのむ所となりぬれば。  
 えんなることゝもをつくさん中に。なにのあ  
 ふなきいひすぐしをかはし侍らん。かういと  
 むもれ木を折いたる心ばせにて。かの院に  
 まじらひ侍らば。そこに。まらぬ男に出あ  
 ひ。ものいふども。人のあふなき名を。いひお  
 ほすべきならずなど。心ゆるかして。をのづか  
 ら。なまめきならひ侍りなんをや。まして。わ  
 かき人のかたちにつけて。としのよはひにつ  
 へましきとなきが。をのが心に入れてけさうだ  
 ち。ものをいはいはんと。このみたぢたらんは。

こよなう人にをどるも侍るまじ。されどうち  
 わたりにて。明くれ見ならしきしろひ給ふ  
 女御きさいおはせず。その御かた。かのほそ  
 殿と。いひならぶる御あたりもなくおとこ  
 も。女も。いどましきともなきにうちとけ。宮  
 のやうとして色めかしきをば。いとあは／＼  
 しとおぼしめいたれば。すこしよろしからん  
 と思ふ人は。おぼるげにていでる侍らず。こゝ  
 ろやすくものはぢせず。とあらんかゝらむの  
 なをもおしまぬ人。はたとなる心ばせのぶる  
 もなくやは。たゞさやうの人の。やすきまゝに  
 たちよりてうちかたらへば。中宮の人。うもれ  
 たり。もしはよういなしなども。いひ侍るな  
 るべし。上（上皇）らう中らうのほどぞ。あまりひき  
 いら。さう（上皇）ずめきてのみ侍るめる。さのみして。  
 宮の御ためものゝかざりにはあらず。見ぐる  
 しとも見侍り。これらをかかえりて侍るや



うなれど。人は皆とりくにて。こよなうをとりまさるとも侍らず。そのとくければ。かのとをくれなどぞ侍るめるかし。されどわかうだに。おもりかならんと。まめだち侍るめる。世にみぐるしうざれ侍らむも。いとかたはならん。たゞ大かたを。いとかくなさけなからずもがなどみ侍る。されば。宮の御心あかぬ所なく。らうくしく心にく。おはします物を。あまりものづみせさせ給へる御心に。なにもいひいでし。いひ出たらんも。うしろやすく。はぢなき人は。世にかたわものとおぼしならひたり。げに物のおりなど。なかくなることしいでたる。をくれたるにはをとりたるわざなりかし。とにふかきよういなき人の。所につけて。われはがほなるが。なまひがくしきとも。物のおりにいひいだしたりけるを。まだいとおさなきほどにはおはしまして。よにな

うかたわなりと。聞しめしおぼしみにければ。たゞとなるとがなくてすぐすを。たゞめやすきことにおぼしたる御けしきに。うちこめいたる人のむすめどもは。みないとうかひきこえさせたるほどに。かくならひにけるぞ心えて侍る。今はやうくおとなびさせ給まゝに。世のあべきさま。人の心のよきもあしきも。過たるも。をくれたるも。みな御らんにしりて。この宮わたりのとを。殿上人もなにもめなれて。とにおかしきことなしと。おもひいふべかめり。みなしるしめいたり。さりとて。心にくもあり。はてずとりはづせば。いとあはつけいともいでくる物から。なさけなくひきいれたる。かうしてもあらなんとおぼしの給はずれど。そのならひなをりがたく。又いまやうのきんだちといふもの。たふるゝかたにて。あるかぎりみなまめ人なり。齋院な

どやうの所にて。月をも見。花をもめづる。ひたぶるのえんなると。をのづからもどめ思ひてもいふらむ。朝夕たちまじり。ゆかしげなきわたりに。たゞことをも。きよせ。うちいひ。もしは。おかしきとをいひかけられて。いらへはぢなからずすべき人なむ。よにかたくなりたるぞ。人々はいひ侍るめる。みづから見え侍らぬとなれば。えまらずかし。かならず人のたちより。はかなきいらへをせんからに。にくいとをひきいでんぞあやしき。いどよう。さてもありぬべきとなり。これを。人の心有がたしといふに侍り。なかかならずしも。おもにくくひき入たらんがかしこからむ。又なごて。ひたしけてさまよひさしいづべきぞ。よきほどに。ありくの有さまにきたがひてもちひんとの。いとかたきなるべし。まづは。宮の大夫まいり給て。けいせさせ給べ

きとありけるありに。いとあへかにこめい給ふ。上らうだちは。たいめんし給ふとかたし。又あひても。なにとをかはかくしくの給ふべくも見えず。ことばのたるましきにもあらず。心のよぶまじきにも侍らねど。つゝましはづかしと思ふに。ひがごどもせらるゝを。あいなし。すべてきかれむ。ほのかなるけはひをも見えし。ほかの人は。さぞ侍らざる。かゝるまじらひなりぬれば。こよなきあで人も。みなよにまたがふなるを。たゞひめぎみながらのもてなしにぞ。みなものし給ふ。下らうのいであふを。大納言こゝろよからずとおもひ給たなれば。さるべき人々さどにまかで。つばねなるも。わりなきいとまにさはるありくは。たいめんする人なくて。まかで給時侍なり。其ほかのかんだちめ。宮の御かたにまいり。なれ物をもけいせさせ給ふ。をのく心のよ



世の人。をのづからとりどりにほのしりつゝ。その人ないありは。すさまじげにおもひて立いづる人との。とにふれつゝ。この宮わたりのと。うもれたりなどいふべかめるもとはりに侍る。齋院わたりの人も。これをおとしめ思ふなるべし。さりどて。わが方のみどころあり。ほかの人はいも見しらす。物をもきよといめむとおもひあなづらんぞ。又わりなき。すべて人をもとくかたはやすく。我ころをもちひんことはかたく。いわぎをさはおもはで。まづわれさかしに。人をなきになし。よをそしるほどに。心のきはのみこそ。見えあらはるめれ。いと御らんせさせまほしう侍し多かきかな。人のかくしをきたりけるを。ぬすみてみそかに見せて。とりかへし侍にしかば。ねたうこそ。いづみまきぶといふ人こそ。おもしろうかきかはしける。されど。いづみはけしからぬか

たこそあれ。うちとけてふみはしりがきたるに。そのかたのぞえある人。はかないと葉のにほひも見え侍めり。うたはいとおかしきと。もおぼえかたのとはり。まとの哥よみさまにこそ侍らざめれ。くちにまかせたるといもに。かならずおかしき一ふしの。めにとまるよみそへ侍り。それだに。人のよみたらん歌なむむことばりるたらんは。いでや。さまで心はえむ。口にいとうたのよまるゝなめりとぞ見えたるすぢに侍かし。はづかしげのうたよみやとは覺え侍らず。たんばのかみの北のかたをば。宮殿などのわたりには。まさひら衛門とぞいひ侍る。ことにやんごなきほどならぬと。まことにゆへしく。歌よみどて。よろづのとにつけてよみちらさねど。聞えたるかぎりは。はかなき折ふしのとも。それこそはづかしきくちつきに侍れ。やゝもせば。こしはなれぬば

かりおれかゝりたるうたをよみいで。えもいはぬよしばみごととしても。われかしこにおもひたる人。にくしも。いとをしくも。おぼえ侍るわざなり。清少納言こそ。またりがほにいみむ侍りける。人さばかりさかしだち。まなきちらして侍るほども。よく見れば。まだいとたへぬとおほかり。かく人にとならんとおもひこのめる人は。かならず見をとりし。行すゑうたてのみ侍れば。えんになりぬる人は。いとすごうすいろなるおりも。物のあはれにすゝみ。おかしきことも。見すぐさぬほどに。をのづから。さるまじくあだなるさまにも。なるに侍べし。そのあだになりぬる人のはて。いかでかはよく侍らん。かくかたぐにつけて。一ふしのおもひいでるべきことなくて。すぐし侍ぬる人の。とに行すゑのたのみもなきこそ。なぐさめおもふかたぐに侍らねど。心すごうも

てなす身ぞとだに思ひ侍らし。その心なをうせぬにや。物おもひまさる秋の夜も。はしに出るてながめば。いと月やいにしへをめでけんぞみえたる有さまを。もよほすやうに侍るべし。世の人のいむといひ侍どがをも。かならずわたり侍なんと。はゝかられて。すこしおくにひき入てぞ。さすがに心のうちには。つきせざおもひつゞけられ侍。風の涼しき夕ぐれ。きよからぬひとりごとをかきならしては。なげきくはると聞しる人やあらんと。ゆゑしくなどおぼえ侍ること。をこにもあはれにも侍けれ。さるは。あやしうくろみすゝけたるさうしに。さうのと和ごんしらべながら。心に入て。雨ふる日。ことぢたうせなぞもいひ侍らぬまゝに。ちりつもりて。よせたてたりしと。とはしらのほさまに。くびさし入つゝ。びはも左右にたて侍り。おほきなるづしひとよろ



ひに。ひまもなくつみて侍もの。ひとつには。ふ  
 る哥ものがたりの。えもいはすむしのすにな  
 りにたる。むづかしくはいければ。あけてみる  
 人も侍らず。かたつかたに。ふみどもわざとを  
 きかさねし。人も侍らずなりしもの。てふる  
 人もとになし。それらを。つれづれせめてあ  
 まりぬる時。ひとつふたつひき出で見侍るを。  
 女房あつまりて。おまへはかくおはすれど。御  
 さいはひはすくなきなり。なでう女がまんなな  
 ふみはよむ。むかしは經よむをだに。人はせい  
 しきと。しりうごちいふをきし侍るにも。物い  
 みける人の。ゆく末いのちながるる。よし  
 どもみえぬためしなりと。いはまほしく侍れ  
 ど。思ひくまなきやうなり。とはたさもあり。よ  
 ろづのと。人によりてことくなり。ほこりが  
 にきら／＼しく。心地よげにみゆる人有。よろ  
 づつれ／＼なる人の。まざる／＼ことなきま

に。古き反古ほんごひきさがし。をこなひがちに  
 くちひ／＼かし。ずくのをどたかきなど。いと  
 心づきなくみゆるわざなりと思給へて。心に  
 まかせつべきとをさへ。わがつかふ人のめに  
 は。かり心につしむ。まして。人の中にまむり  
 ては。いはまほしきとも侍れど。いでやとおも  
 ほえ。心うまじき人には。いひてやくなかるべ  
 し。物もときうちし。我はと思へる人の前にて  
 は。うるさければ。ものいふこともものうく  
 侍。ことにいとしも物のかた／＼えたる人は  
 かたし。たゞわが心のたてつるすぢをどらへ  
 て。人をばなきになすめり。それこゝろより  
 外の我もおかげをはつとみれど。えさらずさ  
 しむかひ。まじりたることだにあり。しか  
 ら。さへもどかれしと。はづかしきにはあら  
 ねど。むづかしくおもひて。ほけられたる人に。  
 いとどなりはてし侍れば。かうはをしはから

ざりき。いとえんにはづかしく。人に見えにく  
 げに。そはちるうそはしきさまして。物がたりこのみ。  
 よしめき歌がちに。人を人ともおもはず。ねた  
 げに見おとさんものどなん。みな人いひお  
 もひつゝ。に／＼みしをみるには。あやしきまで  
 おいらかに。と人かどなんおぼゆるとぞ。みな  
 いひ侍るに。はづかしく。人にかう。おひらけ  
 物と。見をとされにけると思ひ侍れど。た  
 いこれぞ。わか心とならひもてなし侍ありさ  
 ま。宮のおまへも。いとうちとけてはみえし  
 どなんおもひしかど。人よりけにむつまじう  
 なりにたるこそと。の給はするをり／＼侍り。  
 くせ／＼しくやさしだち。はぢられ奉る人に  
 も。そはめたてられて侍らましさまよう。す  
 べて人は。おいらかにすこし心をきて。のどや  
 かにをちぬるをもと／＼してこそ。ゆへもよ  
 しも。おかしくうしろやすけれ。もしは。いろ

めかしくあだ／＼しけれど。本性の人がらく  
 せなく。かたはらのため見えにくきさませず  
 だになりぬれば。にくうは侍るまじ。我はとく  
 すしく。くちもちけしきこと／＼しくなりぬ  
 る人は。たちゐにつけて。われよういせらるゝ  
 ほどに。その人にはめとまる。めをしとめ  
 つれば。かならずものをいふこと葉の中にも。  
 きてあるふるまひ。たちていくうしろ標でにも。  
 かならずくせは見つけらるゝわざ侍り。物  
 いひすこしうちあはずなりぬる人ど。人のう  
 へうちおとしめつる人とは。まして。みも  
 めも。たてらるゝわざにこそ侍べけれ。人のく  
 せなきかざりは。いかではかなきことのはを  
 もきこえむとつしみ。なげのなきけつくらま  
 ほしう侍り。人すゝみて。にくいとまいでつ  
 るは。わるきとをあやまちたらむも。いひわら  
 はんに。はかりなうおぼえ侍り。いと心よか



らん人は。我をにくむとも。われは猶人を思ひ  
うしろむべけれど。いとさしもえあらず。むひ  
ふかうおはする佛だに。三ぼうをそしる罪は。  
淺しどやはとき給ふなる。まいて。かばかりに  
にむりふかき世の人は。猶つらき人はつらか  
りぬべし。それをまさりていはんど。いみじき  
とのはをいひつけ。むかひるてけしきあしう  
まもりかはすとも。さはあらずもてかくし。う  
はべはなだらかなるどのけぢめぞ。心のほど  
はみえ侍るかし。さゑものないしといふ人は  
べり。あやしうすゝるに。よからず思ひける  
も。えしり侍らぬ。心うきまじりうとのおほ  
きこを侍し。うちうへの。源氏の物語人によ  
ませ給ひつゝ。聞しめしけるに。この人は。日本  
紀をこそよみ給へけれ。まにぎえ有べしと  
のたまはせけるを。ふどをしはかりに。いみし  
くなむざえあると。殿上人などにいひちらし

て。日本紀の御つぼねとぞつけたりける。い  
どおかしくぞ侍る。このふるさとの女のまへ  
にてだに。つゝみ侍るものを。さる所にて。ざ  
えさかしいで侍らむよ。この式部丞といふ人  
のわらはにて。ふみよみ侍しとき聞ならひつ  
ゝ。かの人はをそうよみ。とりわするゝ所をも。  
あやしきまでぞさどく侍しかば。ふみに心い  
れたるおやは。くちあしう。おのこゝにてもた  
らぬこそさいはひなかりけれとぞ。つねにな  
げかれ侍し。それを。男だにさえかりぬる人は。  
いかにぞや。はなやかならずのみ侍めるよと。  
やうゝ人のいふも聞どめてのち。いちとい  
ふもむをだにかきわたし侍す。いとてつゝに  
あさましく侍り。よみしふみなどいひけん物。  
めにもとゞめずなりて侍しに。いよゝかゝ  
ると聞侍りしかば。いかに人もつたへきゝて  
にくむらんと。はづかしきに。御屏風のかみに

かきたるをだに。よまぬかほをし侍しを。宮  
のおまへにて。文集の所々よませ給などして。  
さるさまのと。まろしめさせまほしげにおほ  
いたりしかば。いとまのびて。人のさぶらはぬ  
ものゝひまゝに。をどししの夏ごろより。樂  
府といふゝみ二くわんをぞ。まどけなくかう  
をしへたて聞えさせてはべるも。かくし侍り。  
宮も志のびさせ給しかど。殿もうちも。けまき  
をしらせ給て。御ふみどもをめでたうかゝせ  
給てぞ。殿は奉らせ給ふ。まにかうよませ給  
などすると。はたかのものいひの内侍は。えき  
かざるべし。まりたらばいかにそまじ侍らむ  
ものど。すべて世中ことわざまげく。うきも  
のに侍りけり。いかにいまは。こといみし侍ら  
し。人といふともかくいふとも。たゞあみだ  
佛にたゆみなくきやうをならひ侍らむ。世の  
いとほしきとは。すべて露ばかりこゝろもと

まらざるなりにて侍れば。ひじりにならん。げ  
たいすべうも侍らず。たいひたみちにそむき  
ても。雲にのぼらぬほどの。たゆたふべきやう  
なん侍べかなる。それにやすらひ侍なり。年  
もはたよきほどになりもてまかる。いたうこ  
れよりおいぼれて。はためづらにぞきやうよ  
まず。心もいとたゆさまさり侍らん物を。  
心ふかき人まねのやうにはべれど。今はたゞ。  
かゝるかたのとをぞおもひ給ふる。それつみ  
ふかき人は。またかならずしもかなひ侍らむ。  
さきの世まらるゝとのみおほく侍れば。よろ  
づにつけてぞかなしく侍る。御ふみにえかき  
つゝ侍らぬとを。よきもあしきも。世にある  
と。身のうへのうれへにても。のこらず聞えさ  
せをかまほしう侍ぞかし。けしからぬ人を思  
ひきこえさすとも。かゝるべきとやは侍。さ  
れど。つれづれにおはしますらん。またつれ



く心の心を御らんせよ。又おぼさむとの。いと  
かうやくなしごとおほからずとも。かゝせ給  
へ。みたまへんゆめにても。ちり侍らばいと  
いみじからん。またくもおほくぞ侍る。こ  
の比。ほんごどもみなやりやきうしなひ。ひい  
なゝどのやづくりに。この春し侍にしのち。人  
のふみも侍らず。かみにわざとかゝじとおも  
ひ侍ぞ。いとやつれたると。わろきかたには侍  
らず。と更に御らんじては。とう給はらん。え  
よみ侍らぬ所どころ。もじおとしぞ侍らん。そ  
れはなにかは。御らんじももらさせ給へかし。  
かく世の人とのうへをおもひて。はてにどぢ  
め侍れば。身を思ひすてぬ心の。さもふかう侍  
るべきかな。なにせんとにか侍らむ。十一日の  
あかつき。御堂へわたらせ給ふ。御車にはと  
のうへ。人とは舟に乗てさしわたりけり。そ  
れにはをくれて。ようさりまいる。教化をこな

ふどころ。山寺のさはうつして。大ざん悔  
す。まらいたうなど。おほうゑにかいて。けう  
じあそび給ふ。上達部おほくはまかで給て。  
すこしぞとまり給へる。後夜の御だうしけう  
化ども。説相みな心と。廿人ながら。宮のかく  
ておはしますよしを。こちかひきしな。ことば  
たえて。わらはるゝこともあまたあり。とはて  
殿上人舟にのりて。みなこぎつゝきてあ  
そぶ。みだうのひんがしのつま。北むきにを  
しあけたるとのまへ。池につくり。あろしたる  
はしのかうらんをさへて。宮の大夫はる給  
へり。殿あからさまにまいらせ給へるほど。  
宰相の君など物かたりして。おまへなれば。う  
ちどけぬようい。内も外もおかしきほどなり。  
月おぼろにさし出て。若やかなる君達。今様う  
たうたふも。ふねにのりおほせたるを。わか  
うおかしく聞ゆるに。大くら卿のおふなく

まむりて。さすがに聲うちそへんもつゝまし  
きにや。忍びやかにてゐたる。うしろでのおか  
しうみゆれば。みすのうちの人も。みそかにわ  
らふ。舟のうちには。おいをばかこつらむとい  
ひたるを。聞つけ給へるにや。大夫徐福文成詛  
誕おほしとうちずしたまふ。こゑもさまも。  
こよなういまめかしくみゆ。池のうき草どう  
たひて。ふえなど吹あはせたる。曉がたの風の  
けはひさへぞ心ことなる。はかないとも。所か  
ら折からなりけり。源氏の物語おまへにある  
を。どの、御らんじて。れいのすゐるとども  
いできたるついでに。むめのえだにまかれた  
るかみにかゝせ給へる。  
すき者と名にし立れば見人の折らて過るはあらトこそ思ふ  
たまはせられたらば。  
人にまたおられぬ者を誰か此すきものぞきは口ならしけん  
めざましうときこゆ。わた殿にわたる夜。とを

たゝく人ありときけど。おそろしさに音もせ  
であかしたるつとめて。  
新勅 よもすがらくおなよりけに泣きを横のまぐちに叩倍つる  
同 只ならトさばかり叩く水鶏故あけてはいかに悔しからまし  
宮歌七 ことし正月三日まで。宮だちの御いたゞきも  
ちるに。日にまうのぼらせ給ふ。御どもに。  
みな上臈もまいる。左衛門のかみいだい奉り  
給て。殿もちるはとりつぎて。うへに奉らせ  
給。ふたまの東のどにむかひて。上のいたゞか  
せたてまつらせ給ふなり。おりのぼらせ給ぎ  
しき。見ものなり。大宮はのぼらせ給はず。こ  
どしのついたち。御まかなひ宰相の君。れいの  
ものゝ色あひなど。こといとおかし。藏人は  
たくみひやうごつかうまつる。かみあげたる  
かたちなどこそ。御まかなひはいととにみえ  
給へ。わりなしや。くすりの女官にて。ふやの



はかせさかしだち。さひらぎるたり。たうやく齋藤いばれる。れいのともなり。二日。宮の大饗はどまりて。臨時客。ひんがしおもてどりはらひて。れいのごとしたり。上達部は。傅大納言。右大將。中宮大夫。四條大納言。權中納言。侍從實成の中納言。左衛門督ありく有國の宰相。大藏卿。左兵衛督。げん宰相。むかひつゝくる給へり。源中納言。左兵衛督。左右宰相中將は。なげしのしもに。殿上人の座のかみにつき給へり。わか宮いできいで奉り給て。れいのごとともいはせ奉り。うつくしみきこえさせ給ふ。うへにいと宮いでき奉らんと。殿のたまふを。いとねたきとし給て。あゝとさいなむを。うつくしがりきこえ給て。申たまへば。右大將など。けうじ聞え給ふ。うへにまいり給て。うへ殿上に出させ給て。御あそびありけり。どのれいのゑはせ給へり。わづらはしとおもひて。かくろ

へるたるに。など。御てゝの。御まへの御あそびにめしつるに。さふらはで。いそぎまかでにける。ひがみたりなど。むつからせ給へる。さるは。哥一つつかうまつれ。おやのかはりに。はつねの日なり。よめくどせめさせ給ふ。うちいでんに。いとかたわならん。こよなからぬ御ゑいなめれば。いと御いろあひきよげに。ほかげはなやかにあらまほしくて。年頃。宮のすさまじげにて。ひとゝころおはしますを。さうくしく見奉りしに。かくむづかしきまで。ひだりみぎに見たてまつるこそうれしけれど。おほどのごもりたる宮だちを。ひきあけつゝみ奉りたまふ。野べに小松のなかりせばど。うちずしたまふ。あたらしからんことよりも。おりふしの人の有さま。めでたくおぼえさせ給ふ。又の日夕つかた。いつしかどかすみたる空を。つくりつづけたる軒のひまなさに

て。たゞわた殿のうへのほどを。ほのかにみて。中づかさのめのと。よべの御くちずさみをめできこゆ。この命婦ぞ。ものゝ心えて。かどくしくは侍人なれ。あからさまにまかで。二の宮の御いかは。正月十五日。その曉まいるに。こ少將のきみ。あけはて。はしたなくなりたるにまいり給へり。れいのおなじ所にるたり。ふたりのつぼねをひとつにあはせて。かたみに。さとなるほどもすむ。ひとたびにまいりては。木丁ばかりをへだてにてあり。殿ぞわたらせ給。かたみにしらぬ人も。かたらはるゝなど聞にく。されど。たれもさるうとうとしきとなければ。心やすくてなん。目たけてまうのぼる。かの君は。さくらのをりものうちぎ。あかいろのから衣。れいのすり裳き給へり。紅梅に。もえぎ。柳のからきぬ。ものすりめなど。いまめかしければ。とりもかへつべくぞ。

わかやかなるうへ人ども十七人ぞ。宮の御かたにまいりたる。いと宮の御まかなひは。橘三位。とりつぐ人。はしには。こ大夫。式部。うちには。こ少將。御かど。きさい。みちやうの中に。二どころなからおはします。朝日の光あひて。まばゆきまではづかしげなる御まへなり。うへは。御なをし。こぐち奉り。宮は。れいのくれなるの御ぞ。こうばい。もえぎ。柳。山吹の御ぞ。うへには。えびぞめのをりものゝ御ぞ。柳のうへしろの御こうちぎ。もんも色も。めづらしくいまめかしき奉れり。あなたは。いとけそうなれば。このをくに。やをらすべりといまりてあたり。中づかさのめのと。宮いでき奉りて。御丁のはさまよりみなみさまにゐて奉る。こまかにそはそはしくなどはあらぬかたちの。たゞゆるらかに。ものくしきさまうちして。さるかたに人をしつべく。かどくしきけは



ひぞしたる。えびぞめのをりもの、こうちぎ。むもんの青いろにさくらのからきぬきたり。その日の人のさうぞく。いづれとなくつくしたるを。袖ぐちのあはひ。わろうかさねたる人しも。御まへのものとりいるとて。そこらの上達部。殿上人にさしいで。まほられつること。ぞ。のちに宰相の君などくちおしかり給めりし。さるはあしくも侍らざりき。たいあはひのさだめたるなり。こだいふは。くれなる一かさね。うへに。こうばいのこきうすき。いつくをかさねたり。からきぬさくら。源式部は。こきに。又紅梅のあやぞきて。はんべるめりし。をり物ならぬをわろしとにや。それあながちのこと。けさうなるにしもこそ。とりあやまちのほのみえたらん。そばめをもえらせ給へけれ。きぬのをとりまさりは。いふべきとならず。もちるまいらせ給ふともはて。御だいなど

まかでし。ひさしのみすあぐるきはに。うへの女房は。御帳のにしおもてのひのおましに。をしかさねたるやうにて。なみるたる。三位をはじめて。内侍のすけだちも。あまたまいれり。宮の人とは。わかうどは。なげしのまも。東のひさしの南のさうじはなちて。みすかけたるに。上らうはるたり。み丁のひんがしのはさま。たいすこしあるに。大納言の君。こ少將のきみ。み給へる所に。たづねゆきて見る。うへは。平敷の御座に御物まいりすへたり。おまへの物したるさま。いひつくさんかたなし。すのこに北むきに。にしをかみにて。上達部。左右うちのおほいどの。春宮大夫。中宮大夫。四條大納言。それよりまもは。えみはべらさりき。御あそびあり。殿上人は。このたいのたつみにあたりたるらうにさふらふ。地下はさだまれり。かげまさの朝臣。これかぜの朝臣。ゆきよし。と

もまさなどやうの人と。うへに。四條大納言はうしどり。頭辨びは。とは經孝朝臣。左の宰相中將さうのふえとぞ。さうてうのこゑにてあなたうと。つきに。むしろ田この殿なごうたふ。こくの物は。どりのはきうをあそぶ。どのぎにも。てうしなどをふく。歌にはうしうちたがへて。どがめらる。いせのうみにぞありし。右のおと。わごんいとおもしろしなど。きしはやし給。ざれたまふめりし。はてには。いみ

じきあやまちの。いとをしきをこそ。見る人の身さへ。ひえ侍しか。御をくりもの。ふえ二はこにいれてとぞみえ侍し。  
 邦高親王 御在判  
 右以伏見殿邦高親王御筆之本一書寫一捺畢。  
 右紫式部日記以屋代弘賢藏本書寫以流布印本及扶桑拾葉集捺正畢

羣書類從卷第三百廿一



羣書類從卷第三百廿二

檢校保己一集

日記部三

讚岐典侍日記上〔舊本行書牀〕

五月の空も曇らはしく。田子のもずそも干し  
わぶらむと。ことほりも見えざらぬだに物む  
づかしき頃しも。心長閑なる里居に、常よりも  
むかし今の事思ひつゞけられて。物哀れなれ  
ば。はしを見出してみれば。雲のたゞずまひ。  
空のけしき。思ひしり顔に。村雲がちなるを見  
るにも。雲井の空といひけん人も。ことほり  
と見えて。かきくらするゝ心地ぞする。軒のあ  
めやの車にことならず。山郭公も諸ともに音  
をうち語らひて。はかなく明る夏の夜なくす  
ぎもて。いそのかみふりにし昔の事を思ひいで

られて。泪とまらず思ひ出れば。我君につか  
うまつる事。春の花秋の紅葉を見ても。月の曇  
らぬ空をながめ。雪の朝御ともに侍らひて。も  
ろどもに八年の春秋つかうまつりし程。常は  
目出たき御事おほく。朝の御をこなひ。夕の御  
笛の音忘れがたさに。なぐさむやと。しいづる  
事ども書きつゞくれば。筆のたちども見え  
霧ふたがりて。硯の水に涙落そひて。水莖の跡  
も流れあふこゝちして。泪ぞいと増るやう  
に。書きなどせんに。まぎれなどやするとて書  
たる事なれば。姨捨山に慰めかねられてたへ  
難くぞ。六月廿日の事ぞかし。内は例さまにも

おぼしめさざりし御けしき。ともすればうち  
ふしがちにて。是を人はなやむといふなど。人  
々はめもみたてぬと仰られて。世を恨めしげ  
におぼしたりしものを。ことおもらせ給はざ  
りしあり。御祈をし。つるに有ける御事をも。  
ゆづり参らせらるゝと。我さたにも及ばぬ事  
さへぞ。覺ゆるかくて七月六日より。御心地大  
事に重らせ玉ひぬれば。誰も月比とても。例さ  
まにおぼしめしたりつる事は。難きやうなり  
つれども。これかやうに苦しげに見参らする  
事はなくて過させ給つる。かくおはしませば。  
いかならんずるにかと。むねつづれて思ひあ  
ひたり。その比しも。上臈たちさはりありてさ  
ぶらはれず。或は子うみ。或は母のいとま。今  
ひとりはどうよりもこもりゐて。此二三年ま  
いられず。御めのとたち。藤三位ぬるみ心ちわ  
づらひて参らず。辨三位は東宮の母もおはし

まさで。おひたゝせ給へば。心の儘にさふらは  
るべくもなきに。あはせて夫も此頃おこり心  
地に煩ひて。たゞ大貳三位われぐして三人ぞ  
さふらふ。されば。たゞあやしの人の煩ふだ  
に。人のいとまいりまたくあつかふ人多く  
ほしきに。是はましてほし。日のくるゝ儘に。  
堪へがたげに思しめしたれば。院にかくと案内  
申さする。驚かせ給ひて。近くて御ありさまき  
かんとて。俄に北の陣に御幸ありてと奏す。か  
く苦しうおぼしめしたれば。おほとなぶら例  
よりも近く参らせなごする程に。だゞ消にき  
え入せ給ひぬ。あないみじとなきあひて。内大  
臣關白殿まいりて。つと侍らはせ給ふ。大かた  
のゝじりあひたり。そうよ僧正らいき律師そ  
うけん律師など召にやりつゝ。頼基律師すな  
はち参りて。經よみ佛くどき参らせらるゝほど  
に。しばしばかりありて。打身じろぎせさせ給



ふに。今少しのしりあひぬ。經よまるゝをきかせ給ひて。今はやく益あらむ。たゞかりうつせよと仰られ出たれば。物つくものなごめして。ゐて参りうつさるゝ。おびたいしきはをしはかるべし。うつりて其事とはいはで。がはめきのしるさまいと恐ろし。すこし御粥など。参らすれば。めしなどすれば。嬉しさは何にかはにたる。大臣はあるかと問はせ給へば。大どのいらせ給ひて。さぶらふよし申給へば。御幸は成ぬるかと問はせ玉へば。しか成候ひぬと申させ給へば。参りて申せ。今は何事もやくさぶらはむ。たてさせ給ふ尊勝寺にて。九壇の護摩と懺法とさぶらふべきなり。又侍らはむずらん事は。何事もこよひ侍らふべきぞ。あすあきてさぶらへ（上殿）べき心地し侍らずと仰せらるれば。あま（上殿）り護摩こそおびたいしく侍らへと申給へば。こはいかにいふぞ。かばかりに成たる事をばと

仰らるれば。御直衣なをしの袖を顔にをしあて、立給ひぬ。それをきかむ御めのだちも。いかり覺えむ。大殿歸り参らせ給ひて。されば。去年をとしの御事にも。さるさたはさぶらひしかど。宮鳥羽の御年五歲のおさなくおはしますにやりて。けふまで侍らふにこそとなむはべると奏せらるゝにぞ。何事も唯今宵定めさぶらふべきぞと仰らるれば。さは此御事にこそ有けれど。今ぞ心うる。誰もいもねず守り参らせたれば。御けしきいと苦しげにて。御足をうちかけて仰らるゝやう。我ばかりの人の。けふあすしなむとするを。かくめも見たてぬやうあらんや。いかゞみるとはせ給ふ。聞く心地たいむせかへりて。御いらへもせられず。たへがたげに守りるるけはひのしるきにや。問ひやませ給ひて。大貳三位長押なけしの許に侍らひ給ふを見つけおはして。をのれはゆゝしくたゆみた

る物かな。我はけふあすしなんずるはしらぬかと仰せらるれば。いかでたゆみ侍らはむずるぞ。たゆみ侍らねど。力の及び侍らふ事に侍らばこそと申さるれば。何か今たゆみたるぞ。今心みんと仰せられて。いみじう苦しげにおはしたりければ。かた時御かたはらはなれ参らせず。たゞ我めのとなどのやうに。そひふし参らせて泣く。あないみじ。かくてはかなくならせ給なむゆゝしさこそありがたく。つかふまつりよかりつる御心のめでたさなど。思ひつゝけられて。めも心になふ物なりければ。露もねられず護り参らせて。程さへたへがたく暑き頃にて。御隙さう隙とふさせ給へるとにつめられて。よりそひ参らせて。ぬいらせ給へる御顔をまもらへ参らせて。泣より外の事ぞなき。いとかう何しになれ仕ふまつりけん。くやししく覺ゆ。参りし夜よりけふ迄の事。おもひつ

いくる心ち。たゞをしはかるべし。こはいかにしつる事ぞとかなし。驚かせ給へる御まみなど。日頃の經るまゝに。弱げに見えさせ給ふ。御どのごもりぬる御氣色なれど。我はたいまもり参らせて。驚かせ給ふらん。みな寝入てりと思ひめさば。物おそろしくぞおぼしめす。ありつる同じさまにて有けるとも。御覽せられむと思ひて見参らすれば。御目よはげにて。御らんと合せて。いかにかくは寝ぬぞと仰らるれば。御覽じまるなめりと思ふも。たへがたくおはれにて。三位の御もとより。さきくゝの御心地の折も。御かたはらに常にさぶらふ人の。見まいらするがよきに。よく見まいらせよ。折悪しき心地をやみて。まいらぬがわびしきなりと申せど。えぞつゝけやらぬ。せめて苦しく覺ゆるに。かくして心見ん。やすまりやすると仰られて。枕かみなるまるしの箱を。御むねの上



に置せ給ひたれば。まことにいかにたえさせ給ふらんとみゆるまで。御むねのゆるぐさまぞ。殊の外に見えさせ給ふ。御息もたえくなくさまにて聞ゆ。顔もみぐるしからむと思へど。かく驚かせ給へるおりにだに。物参らせ心みんとて。顔に手をまぎらはしながら。御枕がみに置きたる御粥やひるなどを。もしやとくめ参らすれば。少しめし。又おほどのごもりぬ。明方に成ぬるに。鐘の音聞ゆ。あけなんとするにやと思ふに。いと嬉しく。やうく鳥の聲など聞ゆ。朝清めの音などきくに。明果てぬと聞ゆれば。よし例の人だち驚きあはれなば。かはりてすこしねいらむと思ふに。御格子参り。おほとなふらまかでなすれば。休まんと思ひてひとへを引かづくを御覽じて。引のけさせ給へば。猶な寐そとおもはせ給なめりと思へばおきあがりぬ。おほい殿の三位。ひるは御ま

へをばたからむ。休ませ給へどあればありぬ。待つて。我もつよくこそ扱ひ参らせ給はめといふ。中々かくいふからに堪難き心地ぞする。日のふるまに。いと弱げにのみならせ給へば。此の度はさなめりで見まいらす悲しさ。たい思ひやるべし。長治二をとしの御心地のやうに。あつかひやめ参らせたらん。何心地しなるとぞ覺ゆる。又人の昇らせ給へどよびにきたれば。参りぬ。物参らせ心見んとて成けり。大貳三位。御うしろにいだき参らせて。もの参らせよとあれば。ちいさき御ばんに。たい露ばかりをきあがらせ給へるを。みまいらすれば。今日などはいみじうくるしげに。よにならせ給ひたるとみゆ。殿の後のかたより参らせ給ひけるも。例のやうになどして参らせ給ふこそしるけれ。此頃はたれもあり悪ければ。うちしめりならひておはしませば。いかでかはし

るからむ。おとしくと。いみじうくるしげにおほしめしながら。告させたまふ御心の有難さは。いかでか思ひしられざらん。かく苦しげなる御心地に。たゆまずつげさせ給ふ御心の。哀に思ひしられて涙うくを。あやしげに御覽じて。はかくしくもめさで。ふさせ給ひぬれば。又そひふし参らせぬ。かくおはしませば。殿も夜晝たゆまず参らせ給へば。いといはれにはしたなき心地すれば。三位殿も。おりにこそ従へ。かばかりに成にたる事に。なんでもう物はかりはするとあれば。いかいせんとして。すぐす。大殿近く参らせ給へば。御膝高くなして。かげに隠させ給へば。我も單を引きかづきて伏して聞けば。御うらにはとぞ申たる。かくぞ申たる御祈はそれくなん始りぬる。又十九日より。よき日なれば。御佛御修法のべさせ給ふと申させ給へば。それまでの御命やはあら

んずると仰らる。かなしきせきかねて覺ゆ。大殿たしせ給ひぬれば。引かづきたる單ひきかけて。うちあふき参らせなとする程に。宮の御方より宣旨仰書にて。三位などのさぶらはるゝありこそ。こまかに御有様もきき参らすれ。大方の御かへりのみ聞くなんおぼつかなき。昔の御ゆかりには。そこをなん同むう身におほしめす。今の御有様こまかに申させ給へどあり。誰がふみぞととはせ給へば。何の御方よりと申せば。ひるつかた昇らせ給へど仰事あれば。さ書きて参らせ給へば。ひるつかたに成程に。道具などどりのけて。みな人々うちやすめとてありぬ。されどもしめす事もやと思へば。御障子のもとに侍らふ。いかなる事どもをか申させ給ふらむ。いかでかはしらん。しばしばかり有て。御扇うちならしてめす。それどりと仰らるべき事ありければ。めして猶障子



立てよと仰らる。よくぞありてさぶらひけると思ふ。なを仰らる事有とみえたり。立のく。みさうじたて。御扇ならさせ給へと申させ給ひければ。御障子あく事むごになりぬ。夕つかた還らせ給ひぬれば。誰もく参りあひぬ。御けしきうちつけにや。かはりてぞみえさせ給ふ。けふしかすこし夜の明けたる心地しておぼゆれと仰せらる。きく心地の嬉しさ何にかはにたる。御まへに金かなまり水にひのおほらかに入たるを御らんじて。あれみれば心提ちのさはやかに覺ゆる。ひのおほきならんひ提さげに入て。人ども集めてくはせてみむと仰らるれば。女房たちみな立のきぬ。大殿ばかりぞさぶらはせ給ふ。大貳三位大殿の三位殿々して。夜のおとゝに入て。戸口に御几帳たて。ほころびよりみれば。大殿なげしのもとに侍らせ給ひて。みすぎはのもとにながくと。左無後

衛門督源中納言國信大臣殿源道の權中納言能俊宰相中將左大辨などめし入て。大臣殿氷とりて各にたぶ。我もせんと覺したる。もてはやさんとなめりて見えて。一つとり給ひぬ。みきちやうのうちなる人。かやうにて一とせのやうにやませ給へかし。いかばかり嬉しからんと思ふ。暮れ果てぬれば。人々おほとなぶらなど参らする程に。いみじう苦しげに覺しめされたれば。殿たち急ぎ参らせ給ふて。増譽僧正なめし噪ぐ。参り給へれば。御几帳たて。我等はすべりのきてきけば。加持参り給ふ。經よみなどするけにや。まづまらせ給ひて。おほどのこもらせ給ふ氣色なり。かくいふは十五日の事とぞ覺ゆる。かやうにて今宵も明けぬれど。なをよはげに見えさせ給ふ。けふもくれぬ。十七日の曉に。大貳三位あからさまにまかで。此胸のたへがたく覺ゆれば。湯すこし心見て立かへり

参らむとて。出給ひぬ。くるゝとひとしく参り給ひて。打ち見参らせて。あなのみじ。ひる見参らせざりつるほどに。はれさせ給ひにけりなど。いひ合はせらるゝを聞かせ給ふて。何事いふぞと仰らるれば。晝の程にはれさせおはしましにける事を。申さぶらふやと申さるれば。今は耳もはかくしく聞えずと仰られて。いとよはげに見えさせ給ふ。まばしばかりありて。此度はさるべきたびと覺ゆるぞと仰せらるれば。つしましけれど。などはおぼしめすぞと申せば。僧正の。さしもかしらより黒烟を立て祈れど。其しるしと覺で。心ちのやすまざ。まさる心地のすればと仰らるゝをきくは。何にかは似たる。明ぬれば。をほいどの参り給ひて。院の御使にて。事どもありげなる氣色なれば。心なき心地しぬべければ寐たり。何事にかこまやかに申させ給ふ。御位譲りの事

にやとぞ心えらるゝ。申はて。ふしたる所にさしよりて。御傍に参らせ給へといひかけて立給ひぬ。きのふより山のく住者どうさども召たれば。十二人の供從者まいりて。加持まいりのゝじるさまいとあびたいし。せめておぼしめしたるかたのなきにや。大臣殿をめし。院に申せ。一年の心地にも。さもと仰られし。行尊めしてたべと申させ給へれば。やがて即ち参りたれば。やがて枕かみ近くめして祈らせ給ふ。三井寺の人々は千手經をたもちたれば。それをぞ最尊とくよまるゝ。御惱消除して壽命長からむと。ゆるゝかに誦せらるゝ。きくぞ頼もしき心地する。かやうにいみじき人たち數多さふらひて。我も劣らむと祈り参らせらるゝけにや。御物のけあらはれて。りう僧正頼家らいがうなど名のりのゝじる人顯れさせ給ふて。一とせの行幸の後。又見参らせばやと。ゆかしくお



もひ参らするに。そのとくなければ。驚かし参らするぞといふをきかせ給ひて。いかにも此二三年。例ざまに覺ゆる事のあらばこそ。行幸もあらめ。近きほどだになし。此心地やみたらばこそは。年の内にもあらめと仰らるる程より。くるしげにならせ給ひにたり。例の御方より人遣したり。さる心などなき人ときげ。せめて思ひやる方のなければ云なり。こなたへたい今のぼりまいりなんや。道などぞふたがりて。かたはらいたくおぼしめせと仰せられたれば。いかでかは参らむと申さん。承りぬと申たれば。さらば今の程にと仰られたれば参ぬ。はなれぬ人なれば。宣旨をぞ遊ばさせ給ひて。御心地のありさまとせ給ふ。文参らするまゝに。申さんと。おびたいしく申ちらしけりなごもれ聞えて。あしき事もやなど覺ゆれば。さもえ申さず。又わざと召て問はせ給ふ

に。申さんらんもあしかりぬべければ。ただのぼりて見参らせ給へ。さはいみじう苦しげにみえさせ給ふと申せば。さはもしや。とほりよからんひまにと申て。とくかへしつかはしつ。参りてみれば。殿や大臣殿院より戒うけさせ給ふべきなりと奏せさせ玉ふけりて。せんせい法印召すべきさせられ。その御設けどもせらるる程なりけり。かやうの後ならば。夜も明ぬべければ。宮の御方より召しつれば。参りたりつれば。かうくこそ仰られつれと申。道の所せばきぞと。よはげに仰らるる。くるしげに覺しめしたり。殿にも。のぼりてみせ参らせばやと申させ給ひければ。今の程。宮のぼらせ参らせん。物騒がしからぬさきにと思ふに。のぼらせ給ひぬれば。御かたはらに人のなきがあしきぞとさせられて。そのよしを申されけるなめり。かへり参らせ給ひて。たい

すけばかりは侍らへと仰らるる。さて三位殿おはして。殿たち皆障子の外に出させたまひぬ。なげしのきはに。四尺の御几帳立られたり。御枕がみにおほとなぶらちかく参らせて。あか／＼とありけるに。添ひぶし参らせたり。はしたなき心地すれど。えのかず。宮上らせ給ひたると。あない申せば。いつらいつくなど仰らるゝは。無下に御耳もきかせ給はぬにやと思ふに。心うく覺ゆ。その御几帳のもとにと申せば。いづらと。御几帳の妻を引あげさせ給へば。こゝにと申させ給ふ。物など申させ給はんとぞおぼしめすらんと思へば。御跡の方にすべりありぬ。ちがひて。なけしの上に宮のぼらせ給ひ。しばしかり何事にか申させ給ふ。殿の御聲にて。久しうこそ成ぬれ。御粥などはや参らせんやと仰らるゝに。宮聞かせ給ひて。今はさは歸りなん。あすの夜もと仰られて。還らせ給

ひぬ。例のかたはらに参りて。氷など参らす。殿たちまいらせ給ふて。今は法印召し入よとて。ふたまなるけいなど参らせて。戒のきたせさせ給ふ。法印参らせ給ひぬれば。みき丁ばかり隔てゝ。御なをしどりてまいれと仰らるれば。取て参りたり。御手水参らすべきけれど。あきあがらせ給ふべきやうなければ。紙をぬらして御手などのごはせ参らせなごする程ぞかなしき。御かうぶりなど持て参りたれば。するかせぬかの程にをし入て。御なをし引かけて参らせたる。御紐さゝむと。おぼしめしたるなめり。さんどせさせ給へど。御手もはれにたれば。えさゝせ給はぬ。みる心ちぞ目もくれて。はか／＼と見えぬ。かね打ならして。事の趣申あきらめ給ふ。十戒を先の世にうけさせ給ひて。やぶらせ給はざりければこそ。此世にて十善の位長くたもち。佛法をあがめ一切



衆生をあはれみさせ給ふ心。いまだ昔より今に至るまで。かばかりの帝王おはしませず。いと今宵の御戒の志るしに。すみやかに御惱消除せうさんして。百年の御命長く保たしめ給へと申さる。聞くにただ。今やませ給ひぬると聞えてめでたき。さて御戒受けさせまいらすれば。いとよくたもつたもつと仰らる。殿たち。たもつと仰らる。やと申させ給へば。うなづかせ給ふ。うけさせまいらせはて。法印出させ給へば。故右大臣の子にぢやうかいあざりといふ人の許よりさふらはる。御枕がみに近くめしよせ仰らる。やう。經ずしてきかせよ。ぢやうかいが聲きかむも。今宵ばかりこそきかめと仰られて。いみじう苦しげにおぼしめされたれど。御涙もえ出ず。それを聞ん心地。たれかはなのめなる心ちせん。たれも堪へがたき心ちぞする。あざりやしもいらへ

なし。經の聲も聞えぬは。あれもためらはる。なめりと聞ゆ。まばし計りありて。すこし出されたるをきけば。方便品の比丘偈にかゝる程の長行をぞよまる。つくくときかせ給ふて。衆中之糟糠佛威徳故去といふ所より。御聲うちつけさせ給ひて。露ばかりが程とよほる所なく。ゆふくと讀ませたまふ。御聲たふときあざりの御聲をしけたれて聞ゆ。あざりもどりわきて。そこをしも讀み聞かせ參らせらる。明暮一二の巻をうかめさせ給ふと。きをき給へる事なればなめり。かかる程に。三位の許より。むげに重くおはします由聞て。女房おこせてこまかの事きくに。威にけり。いませ給ふとも。參りてつぼねながらもきしまいらせん。よそにてしからせ給ふ。のぼらせ給へといへば。やがてぐして參りぬ。みれば。大貳三位うしろのかたいだきまいらせて。大殿の三位。

有つるまゝに。添ひ臥し參らせられたり。御跡のかたについ居たれば。大貳三位。くるしうさせ給へば申つるぞ。その足とらへまいらさせ給へとあれば。とらへまいらせ給たり。御あせのむひなどせさせ給ふ。大殿の三位。かくしづまらせ給へる程に。せまほしき事のあり。して參らんとて。參らせ給へとあれば。添ひ臥しまいらせぬ。まばしばかり有て。例の定海あざり。御几帳のそばに召し入て。觀音品讀てきかせよと仰らるれば。いとたふとくよみ給ふ。いかに覺しめすにか。偈をよめと仰らる。おぼしめすやうあるなめりと。心えがたし。大臣殿の三位歸り參られたれば。御足うちかけて。御手を首に打かけさせ給へば。えはたらかねば。三位殿。我るたるやうに。御跡のかたにさふらはる。例の氷など參らせ。御汗などのむへと仰せらるれば。御枕がみなるみちのくに紙して。

御びんのわたりなどのむひ參らす程に。いみじくくるしくこそ泣かるれ。我は死なんぞる成けりと仰られて。南無阿彌陀佛とぞ仰らる。をきくに。たにおはします折に。かやうの事は□くの下人まで。いましき事にこそいふを。御口よりさはく仰せられ出すときくは。夢かなどまであさましければ。涙もせきあへず。殿御顔にあて。佛を念せさせ給へ。かせ給ふとき。參らせし御筆の。大般若は。いづこにかおはします。それを能く念じ參らせ給と申給へば。ふた間にこそあらめと仰らるれば。殿聞て。どりて參らせ給ふ。是にやなごみせ參らせ給へば。これなりと仰らる。なをくるしうこそ成増るなれとて。只せきあげにせきあげさせ給御けしきにて。只今しなんずるなりけり。太神宮助けさせ給へ。南無平等大會講明法華など。誠にたふとき事ども仰ら



れつゝ。くるしうたへがたく覺ゆる。いただきおこせと仰らるれば。起き上りて抱き起し參らするに。日頃はかやうにおこしまいらするに。いと所せくだきにくく覺えさせ給へるなりけり。いとやすらかに起させ給ひぬ。大貳三位。御後に居給ひたり。御せなかを寄せかけ參らせて。御手をとらへ參らせなどする。御かひなひややかにさぐられたまふ。かばかりあつき頃かくさぐられ給ふはと。あやし。あさまし。譬へんかたなし。僧正めし。十二人の供從者めしよせて。大かた物も聞えず成にたり。大臣殿の三位。御口に手をぬらして。ぬりなどし參らせ給ふ。念佛いみじく申させ給ふさまこそ殊外なれ。ともすれば。太神宮たすけさせ給へと申させ玉ふも。其しるしなく。無下に御目などかけり行。僧正とみに參らせ給はず。やゝ久しく有て參らせ給へれば。日頃へだつれど

何の物覺えんにか。物のはづかしとも覺えむ。たゞ一つにまどはれて。僧正三位殿二人。御前我身五人の人々。一つにまどはれあひたり。聲をおしまず。頭より誠黒煙立ばかり。めも見あげず念じ入て。佛をうらみくどき申さるゝさま。いとたのもし。例ならぬ折は。あやしの僧だにも物祈るはたのもしくこそなる心地すれ。かばかりの人の。一心に心に入て。年頃佛にかうまつりて。六十餘年になりぬるに。又されども。佛法盡きず。すみやかに此御目直させ給へと。人などを云ふやうに。をそしゝとあれど。何のしるしもなくて。御口の限りなん念佛申させ給へるも。はたらかせ給はずならせ給ひぬ。殿御覽じまりて。今はさは院に案内申さむと申させ給へば。民部卿俊明こなたに召して。殿みすをしあげ。物忍びやかに。いかに仰らるゝにか仰らるれば。たゞれぬ。大臣殿よりて。今

は何のかひなしとて。御枕直して抱き臥させ參らせつ。殿たち皆たゞせ給ひぬ。僧正なを御傍に添ひる給ひて。何の事にか忍びやかにつぶ／＼と申きかせ給ふ。かゝる程に日はなばなどさし出たり。日のたくるまゝに。御色の月頃よりも白く晴れさせ給へる御顔の清らかにて。御びんのあたりなど。御けづりぐしまたらむやうにみえて。たゞおほどのこもりたるやうにたがふ事なし。僧正今ほど見はて奉りて。やをら立て。御傍の御障子を忍びやかに引おけて出給ふに。大貳三位。あな悲しや。いかにまなし出させ給ひぬると。助けさせ玉へと。聲も惜まらず泣き給ふを聞て。さながらなきとよみあひたり。左衛門督。源中納言。大臣殿の權中納言。中將の御めの子の君だち十餘人。女房のさぶらふ限り。聲をどゝのへて。せめておぼゆるまゝに。御障子を。なるなどのやうに。が

は／＼とひきならして。なきあひたる。おびたゝしき。物おぢせん人はきくべくもなし。今一度見まいらせんとて。したしき上達部殿上人。我も／＼參れと。うどきは呼びもいれず。大貳三位。大殿籠りたるやうなる人を。我君や。いかにして方々をば。すておはしましぬるぞ。生れさせたまひしより。かた時はなれ參らせず。あやしのきぬの中よりおほし參らせて。いづれの行幸にもはなれず。しりにたちさきにたち。病の心ならぬさとあ十日ばかりするにも。戀しく床しく思ひ參らせつるに。片時見まいらせで。いかでかさふらはん。たゞぐしておはしましね。今一度驚かせ給ひて。見えさせ給へ。あなかなしや。こひしさをいかにしてか侍らはん。ただめしてぞと。御手をとらへて。をめき叫び玉ふ。きくぞ堪へがたき。此聲を聞て。そこらのしりつるくじうさども。ひしと



やみぬ。山の座主今ぞ参りて。僧正の出給ひぬ。障子引明け給へば。三位。山の座主をも今は何にせんずるぞと。いひつゝけてなき給ふ。御さうじよりなげ入らるゝ物を。何ぞとみれば。我局に置たる二あゐのからぎぬかづきたるもの投げ入て。人のゐるをみれば。藤三位殿の。斯どきして参り給へるなりけり。あな心うや。例ざまにうち見あげ給ひつらんを。今一度見まいらせず成ぬることろなきを。何のものいみをして。よび給はざりつるぞ。年頃の御病のだに。はづるゝ事なくあつかひ参らせて。限の度しも。かくこゝちを病みてける身の。すぐせの心うき事といひつゝけてなき給ふ。我は御汗を拭ひ参らせつるみちのくに紙を貞に押しあてし。そへゐられたる。あの人たち思ひ参らせらるらむにも。をどらず思ひ参らすと。年比は思ひつれど。猶劣りけるにや。あれらのやう

に聲立てられぬはとぞ思ひしらるゝ。大臣殿参らせ給ひて。うち見参らせて。いかにおぼしどくにか。持たまへる扇の骨を疊みながら。はら／＼と打ち摺りて。泣きて出給ひぬと思ふ程に。今は御かうし参れと有りけるにやとみて。すなはちしたしき殿上人なめり。源中納言の四位少將あきくに。右大臣殿の加賀介家さだ。あか／＼と日のさし入て明きに。はら／＼とあろしていぬ。あな淺まし。こはいかにしつるよと。えさらぬ心にまかせぬ日の暮るゝだに。おほどなぶらをとくさし出よかしと。まだあろさぬ先に心もとなく覺えしものを。はな／＼とさし出たる日におろし籠めて。わざとくらうなすよと覺ゆるに。物ぞ覺えぬ。藤三位。あないみじ。かくはいかにあろしつるぞや。かひなき御顔ながらも。あかくて守り参らせてあらんとこそ思ひつれど。聲もあしき泣

き給ふ。大臣殿また参りて。御ぞ今はぬぎかさせ参らせて。御疊今は薄くなさんと。えもいひやり給はずの玉ふて。御單取よせ給ふて。ひきかづけまいらせなどせられぬ。なげしの下に罷りいでさせ給ひぬと見参らすまゝに。大臣殿の三位まるびありて。やがてそこに同じさまにて。いきも絶たるさましてふし給ひたる。大臣殿見給て。子の中納言めして。あれゐてのけよとあれば。其方の女房。中納言として。いとたのもしくめでたげにて。掻き抱きていぬ。さる程に大貳三位も。御子播磨守出雲守などいふ人々。かきすくひてゐていぬ。藤三位殿は。例ならぬよはげにみえつる人の。なげ入られつるよりとして。聲だにもせず。いひつゝけて泣き給ふさま。こどはりとみゆれど。すぎいられぬるにやと見ゆれば。子の加賀守を見おこせて。それ抱きのけ奉らせ給へど。いとよ

はげにみえさせ給ふさまをば。物の覺え侍らぬぞ。助け給へとあれど。いふかひなし。しもにありさせ給へど。ひきのくれど。何事の給ふぞ。うるはしくておはしましつる御顔を。今一度見せさせ玉はずなりぬるが。うらめしさはいふかたなしと。あぢきなく。人の罪のやうにうらみ泣き給ふも。こどはりにぞ聞ゆる。御かひなをさぐれば。いまだひえながら。例の人のやうにたをやかにさぐらるれば。心みがてら。しはしもさらば。たがへ参らせて。物の給へかしと思へば。いたくもすゝめて。諸共に御かひなをどらへて居たれば。いつの程にかはるにか。たいすくみにすくみはてさせ給ひぬ。今はかひなしと思ひて。いざさせ給へ。さふらはせ給ふとも。今はかひなし。一言もこそ。もしやと思ひつるほどこそ有つれど。引のくれど。大かた取つき参らせて。いかで一所をきまいらせ



ていかむずるぞとの給ふ。加賀守の。さばかりあるは。いだきのくべき心ちもせねば。加賀守に我はえ抱き給ふまじくは。局の人をよび給へといへば。さばかりの物もおぼえすけなる人の取りあへず。いかで我君のおはします所にげすをばよせんぞて。いみじう泣かる。参りさまにいだかれたりつれば。せめて物の覺えてかどおぼゆる。されば我方の女房どもよびよせて。ひだうに引のするやうに。人の脊なかにおほせてやりつ。御めのとたちたれぬれば。因幡内侍とて。明暮あまたの内侍の中に。よりわきつかうまつりつきたりし人と一人。御傍にむごにちかくさぶらふ。あはれおほく侍らひつれど。契深くもつかふまつりはてさせ給へるなどいひつ付けて。いみじう泣かるゝさまぞ。いと催さるゝ心地してたへがたき。つばねより急ぎたるけしきにて。きとおは

しませ。三位殿たえ入せ給ひぬといひて。引さげてみていぬ。誠になき人のやうにて。大方いきもせず。暮かゝる程に。集りてかきのせてゐていぬ。御まへのかたかいすえて。いつの間にかはるにか。日頃おびたしく物も聞えずのゝ去りつるけしきども志めくゝと。火をうちけちたるとは是をいふべきにやと覺えて音もせず。大貳三位の局。壁を一重へだてたる。泣くけはひどもして。晝の聲どものやうに泣あひたる中に。三位の御聲にて。哀かやうに日の暮るゝに。御かうしとく参れかしと。心もどなく覺えしに。いふべき事もなく志なし参らせつるは。いかにしつる事ぞや。是助けよや。たいおはしますらん所へ我をめせや。をひをひとくどきたてて泣るゝをとす。聞くぞいといたへがたき。日の御座の方に。こぼくゝと物とりはなす音して。人々の聲あまたすなり。何事にかと

寛永十六稔念二

秘書郎

讚岐典侍日記下

聞く程に。おまへより。同じ局に我方さまにてさぶらひつる人。打ちきて。いみじう物もいはず泣く見るに。いとど其事と聞かぬに。なきふさるゝ心地ぞする。暫しためらひていふやう。あなこゝろや。たい今神璽寶劔の渡らせ給ふとて。のゝしりさぶらふぞ。日の御座の御物具のわたり。御帳のひき御鏡など取いでさぶらふ。御帳こぼつ音なりけりといふに。悲しさをたへがたき。晝より。美濃内侍を。やがて殿のはかしにつけさせ給ひつれば。つき参らせて。おはしつるやうなど語る。我は朝かれぬのおましのことはまらざりつれば。此人のかたをきして何にかはせん。

右拜借 仙洞御本。使安中書奏廣端。太神景明奥書寫之。與清閑寺亞相具房卿。一按了。落字魚魯等不可勝計。重可加校正者也。

かくいふ程に。十月に成ぬ。辨三位殿より御文といへば。取入てみれば。年ごろ宮づかへせさせ給ふさま。御心のありがたさなど。よく聞き置かせ給ひたりしかばにや。院より社。このうちにさやうなる人のたいせちなり。だうし参るべきよし仰ごどあれば。さる心地せさせ給へとある。みるにぞ淺ましく。ひがめかと思ふまであきれられける。おはしまし折よかり。かくは聞えしかど。いかにも御いらへのなかりしにぞ。さらでもとおぼしめすにや。それをいつしかといひがほにまいらむ事あさましき。周防内侍。後冷泉院にをくれ参らせて。後三條院より七月七日参るべきよし仰られたりけるに。



後拾  
天河おなすなれと聞ながら渡らん事はなを悲しき  
とよみけんこそげにと覺ゆれ。故院標の御かた  
みには。ゆかしく思ひ參らすれど。さし出ん事  
なを有べき事ならず。そのかみたち出したに。  
はれ／＼しさは。思ひ扱ひしかど。親たち三位  
殿などして責められん事をとなん思ひて。い  
ふべき事ならざりしかば。心のうちばかりに  
こそ。あまのかるもに思ひ亂れしかど。げに是  
も我心にはまかせずともいひつべきことなれ  
ど。又世を思ひ捨てつときかせ給は。さまで  
大せちにもおぼしめさむと。思ひ亂れて。今少  
し。月頃よりも物思ひそひぬる心地して。いか  
なるついでを取り出ん。さすがに我とそぎす  
てんも。昔物語にもかやうにしたる人をば。人  
もうとましの心やなどこそいふめれ。我心に  
もげにと覺ゆる事なれば。さすがにまめやか  
にも思ひたらず。かやうにて心づからよはり

行けかし。さらばことつけてもと思ひつゝけ  
られて。日比ふるに。御めのとたち。まだ六位  
にて五位にならぬ限は。物參らせぬ事なり。此  
廿三日六日八日ぞよき日。とく／＼とある女  
度々見ゆれど。思ひ立べき心地もせず。過にし  
年月だに。私の物思ひの後は。人などに立まじ  
るべき有さまにもなく。見苦しくやせ衰へに  
しかば。いかにせましとのみ思ひあつかはれ  
しかど。御心のなつかしさに。人たちなどの御  
心も。三位のさて物し給へば。その御心に違は  
じとかや。はかなき事につけても。用意せられ  
てのみ過した。今さらに立出て。見し世のやう  
にあらん事もかたし。君鳥羽はいはけなくおはし  
ます。さてならひにし物ぞとおぼしめす事も  
あらじ。さらんまゝには。昔のみ戀しくて。恨  
みむ人はよしとやはあらんなど。おもひつゝ  
くるに。袖のひまなくぬるれば。

かはく間もなき墨染の袂たもとな哀むあはれしのかたみと思ふに  
かやうにてのみ明暮るゝに。かく里に心のど  
かなる事かたし。五六日なれば。内侍の許より。  
人なし參れといふ文のこしなど。思ひつゝけら  
れて過す程に。御即位みまがなど世にのしりあひ  
たり。大納言のめのと奉と奉ばりあげし給ふべし  
とて。安藝の前司の三位殿こそ。故院の御とき  
とばりあげはせさせ給ひければ。その例をま  
ねばんなどたづねらるゝと聞く程に。大納言。  
日ごろ例ならで。俄におもりて。失せ給ひてと  
きこゆ。いと心細き世かなと思ひかこちぬ。夕  
暮に。三位殿の許より。とばりあげすべきよし  
あれば。いとあさましくて。日頃はきゝすぐし  
てのみ過つるを。まいらじと思ふなめりと心  
得させ給ふて。をしあてさせ給ふなめりと思  
ふに。すべきかたなし。たのみたるまゝに。例の  
人よびて。かう／＼なん院より仰られたるを。

いかいいはせむずるといへば。いかがせさせ給  
はむ。世中煩はしく侍らふめり。たゞとく思し  
めしたつべきなめり。まいらじとさふらは。い  
我爲にこそよしなき事出まうでこめ。我君さ  
るべきとおぼしめさせ給ふべきになど。また  
しあひたる程に。くらのかうの殿より人參ら  
せたり。院宣いんせんは攝政殿の承りにて侍ふ。堀河院  
の御みそふく賜りたらば。とくぬぐべきなりと  
宣旨下りぬ。とくぬがせ給へといひにをこそ  
たり。かばかりの事だに心にまかせず。だうり  
にぬぐべきありもまたず脱ぎてん事心うき  
に。せりつみしといひけんふる事を。身に思ひ  
よそへらるゝ。かくさたするを聞て。せうとな  
る人。あはれ男の身にてかくいはれ參らせば  
や。うら山しくもおぼえさせ給ふかな。女の御  
身にてさらでも有なん。故院の御時に。年ごろ  
の人たち。御めのとごたちなどの。賜はりあは



れしそ蒸服ふくを。何ばかりの年ごろさぶらはせ給はざりしかと給はらせ給ふ。今の御時に。又なを大せちにいるべき人にて。月もまたずぬげと。宣旨下るもあやしなどいひつゝくるを聞程に。あぢきなく耻かし。花山院のありに。これし成げの辨兼家を。入道殿一條院にわたりて。もとの如くろく六座ざにてつかはれんと仰られけるをだに。我君につかうまつりし事の。それにつけても。思ひ出られぬべければ。つかさ位をすて。法師に成にけん我身の。何の思ひ出にて。古の耻しさに思ひこりず差し出づべき。あまたの女房の中に。など我しも。二代までかくはあるまじき目をみるべからんと思ふに。先の世の契も心うけれど。さるべきにこそはと思ひなして。流の水を結び。さやになり親しくなれ仕うまつるしうとならせ給へは。おぼろげならぬ契にこそと思ひ慰むれど。藻に住虫の

われからどのみ。世にありてかゝるめも見ること悲しけれど。さてあるべき事ならねば。急ぎ立ぬ。しもの人などは。年比もしきの中に遊びならひたる心ちに。つくくと思ひたえたり。里るは口おしう思ひけるに。かゝる事出来たるを。嬉しう思ひたるけしきにて。心ちよげに思ひけるを見るは。つれなくうらめしきに。霜月にも成ぬ。十九日に。例の参らんと思ふに。雪よるより高く積りて。こちたくふる。いそがしさ今いく程なく。残り少なく成にたれば。大かたの人も夜を晝になして。物も聞えぬまで急ぐめれば。我はこの日ならんからに。忙がしとて参らざらむが口おしさに。出たつを。ひとりうけ引人なし。さばかり急がしくしちらさせ給ふてよかし。けふ参らせ給ひたらんに。院も大臣殿も。よにいみむともあらむ。参らせ給はずともあしき事もあらむ。かばかり

雪は道もみえず降めり。我御身こそ車の内なれば。扱もおはしまさめ。御供の人はいかでか絶えむずるぞなどわびあひて。といめつれど。人たちによしと思はれむとて。参る事ならばこそあらめ。此月ならむからにいそがしとてかくべき事かは。いさましく嬉しきいそぎにてあらんだに。それにさはるべき事かは。我を少しも哀と思はん人は。けふぞ参らせよといふまゝに。けしきもかはるがしるきにや。いはれぬる人ども。さばかりと思しめしたらむ事。さまたげ参らすべき事ならず。車寄せよ。供の人よばせなどする程に。例はしまるほど。思ふ程。やうく日たくるに。参らでやみなんずるなめりと思ふ。口惜くわりなき人どもきぬれば。とくくといへば。嬉しくてのりぬ。道のほど誠にたへがたげに雪ふる。車のうちにふりいりて。雑色うしかひ皆かしら白く成に

たり。牛のせなかも白き牛に成にたり。二條の大路には大宮の路もなきまで降る。参りたれば。人々。あないみむ。例よりも日たけつれば。けふはえまいらせ給はぬなめり。ことほりぞかし。急がしくおはしつらんと申あひたりけるに。おぼろげならぬ御心ざしかな。けふはどあはれがりあひたり。十一月もはかなく過ぬ。十二月朔日。まだ夜をこめて大極殿に参りぬ。西の陣に車寄せて。えんだう志きて入べき所とて志つらひたるに参りぬ。ほのく。と明はなる。ほどに。かはらやどものむねかすみわたりてあるを見るに。むかしうちへ参りしに。過ぎまに見えし程など思ひ出られて。つくく。と詠るに。北の門より長ひつに。ちはやきたる者ども。すはうのこきうたるくはうこの出しぎぬ入てもてつゝきたる。べちにも面白く見ゆべき事ならねど。所がらにやめでたし。人ど



も見さはぎ。いみじく心とに思ひ合ひたるけしきどもにて見さはげども。我は何事にも目もたゞのみ覺えて。南の方をみれば。れいのやたがらす見もしらぬ物ども。かしらなどたてわたしたる。見るも夢のこゝちぞする。かやうの事は世繼などみるにも。その事書かれたる所はいかにぞやおぼえて。ひきこそ返されしか。うつしにけさくを見る心地。たゞをしはかるべし。日高くなる程に。行幸なりぬとて。のしり合ひたり。殿原里人など。玉のかうぶりし。あるは錦のうちかけ。近衛づかさなど。鎧とかやいふ物着たりしこそ。見もならはず。もろこしのかた書きたるさうじの晝の御座にたちたるみる心地よとあはれに。かくて事成ぬ。おそしくとて。衛門の佐いとおびたいしげにひさまもんなどをみる心ちして。我にもあらぬ心地しながらのぼりしこそ。我ながら目

くれて覺えしか。手を掛けさするまねして。かみあげよりとばりさしつ。我身いでも有りぬべかりける事のさま哉など。かくしをきたる事にかと覺ゆ。御前のいとうつくしげにしたてられて。御もやの内にあさせ給ひたりけるを。見參らするもむねつぶれてぞ覺ゆる。大かた目もみえず。はぢがましきのみ世に心うく覺ゆれば。はかしくみえさせ給はず。事果てぬれば。もとの所にすべり入ぬ。夜に入てぞかへりぬる。あるかなきかにて。歸りたれば。顔をあやしげに思ひて守りあひて。御顔の色のがひておはしますはいかになどいひあへるは。まだなをらぬにこそと。しほくと泣かれぬる。しはすも漸つごもりに成て。辨のすけ殿の文といへば。とり入てみれば。院より三位殿大納言のすけなど侍らはぬ。朔日之。さやうのおりは。さるべき人あまた侍はぬこそよ

けれ。參るべきよし仰られたるとぞある。いかいせん。とく參らんとぞいそぎたつ。朔日の日の夕さりぞ參りつきて。陣いるより。むかし思ひ出られて。かきぞくらさる。局にいきつきてみれば。こと所に渡らせ給ひたる心ちして。其夜は何となくて明けぬ。つとめておきてみれば。雪いみじく降たり。今もうちゝる御まへを見れば。べちにたがひたる事なき心地して。おはしますらん有様。ことくしに思ひなされていたる程に。ふれくこゆきと。いはけなき御けはひにて仰らるゝ聞ゆる。こはたぞ。たが子にかと思ふほどに。誠にさぞかし思ふに淺ましく。是をしようちたのみ參らせてさふらはんずるかど。たのもしげなきぞ哀なる。晝ははしたなき心地して。暮れてぞのぼる。こよひよきに物まいらせそめよといひにきたれば。お前のおほとなふらくららかにまなして。

こちとあれば。すべり出て參らする。昔しにたがはず。御たいのいと黒らかなるごきなくて。かはらけにてあるぞ見ならはぬ心ちす。はしりおはしまして。顔のもとにさしよりて。たれぞこはと仰らるれば。人々。堀河院の御めのごぞかしと申せば。まことと覺したり。との外に。見參らせし程よりは。おとなしく成らせ給ひにけりとみゆ。をどしし事ぞかし。參らせ給ひて。こきでんにおはしましに。此御方に渡らせ給ひしかば。まばし計り有て。今はさは歸らせ給ひね。日のくれぬさきにかしらけづらんとそゝのかし參らせ給ひしかば。今まばしさふらはいやと仰られたりしぞ。いみじうおかしげに思ひ參らせ玉へりしなど。只今の心地して。かきくらす心地す。そのよも。御傍にさふらひたれば。いといはけなげに。御そかちにあさせ給へる。見るぞ哀れなる。明ぬれば。



皆人々おきなどしてみれば。御まへのみす。いと  
 おびたいしげなるあしどかいふ物掛けられ  
 たり。へりはにび色なり。御障子の御きちやう。  
 おなじ色の御几帳の手白きなり。御けづり櫛  
 の大床子もなし。かゝるおりになきにや。お  
 さなくおはしませばかどぞ。物など参らすれ  
 う。けくにしてめすぞ哀なる。ひるつけて殿参  
 らせ給ひて。人々るなをりなどすれば。物を参  
 らせさして立たんも。あとなにおはしまし  
 にぞ。さやうの折も分かず立しか。又おとなし  
 くなどもつけさせ給ひしか。是は打ちすて、  
 たはよき事やいはれんずると思へば。猶る  
 たるも。かくこそありがたかりける事を。心に  
 任て過しけん年月を。いかで思ひまらざらん。  
 はしたなく思へばうちうつぶしてゐたれば。  
 御さうしの外にゐたる人たちに。あれはたぞ  
 と問はせ給ふ御聲聞ゆ。夫といらふるなめり。

御障子の内にちかやかにつゐるて。いつよりさ  
 ぶらはせ給ふぞ。今よりはかよふにてこそは。  
 そも昔の思ひ出られ給ひてこひしきに。其か  
 みの物語りして慰めんなどある。いとかなし。  
 我も人も同じやうにてこそ物せさせ給ふめ  
 れ。はかなりし世にばいせんは誰ぞとどひて。  
 それがしときかせ給ふては。御舌さし出させ  
 玉ひて。さしぬき高く引あげてにげさせ給ふ  
 とて。人々笑ひ興じまいらせしは。ひと所の御  
 けむはいにて有けると思ふに。何の御かへり  
 かは申さん。物申されねば思ひ掛けざりし事  
 哉。かやうに近やかに参りて。物など申しこと  
 は思はざりしか。例ならでおはしまし  
 ありなど。御傍に添ひ臥させ給へりしありに  
 参りたりしかば。御膝高くなさせ給ひて。陰に  
 かくさせ給ひしあり。かやうならん事どもと  
 こそ思はざりしか。げにかけにも隠れさせ給

ひしかな。世はかくもありけるかなと云ひ掛  
 けて立せ給ひぬる。聞ぞげにと心うき。か様に  
 て。はえなき朔にて過ぬ。人たちのきぬの色ど  
 も。思ひくゝに薄らぎたり。正月に成りぬれ  
 ば。此月ならんからにかくして参りて。堀河院  
 に参りたれば。人々。いかで参り給へるぞ。内に  
 と聞参らせつるは。この月はよもとおもひ参ら  
 せしにと。いひあはれたり。いかでか参らざら  
 む。つかうまつりはてんと思へば。いみじうい  
 そがしかりしにだにも参りしをといへば。誠  
 にかくかゝず参らせ給ふ事のありがたさなど  
 言ひあひつゝ。つれくゝの慰めに法花經に花  
 たてまつり給ふにとて。いとなみあはれたる  
 ぞいと哀れにみゆる。二月になりて。私のきに  
 ちにわたりあひたり。講きくさうしのもとに  
 てみれば。ひとしせの正月に。すむやう行ふと  
 て内にさふらひしを。迎ひにをこせられたり

しかば。面白き所なるに。我どぐして御坐ませ  
 とて。大夫のすけや内侍などぐしておはした  
 りしに。此障子のもとにゐるおとなびをき  
 て。おはしましにけりな。誰々ぐしてといへ  
 ば。内侍殿にあひ参らせん。いと嬉しき事かな  
 といひて。あはれたり。此御前おぼしあつかふ  
 るさまの。殊の外にくなげに。悦もえ申させず。  
 今は籠りたる身にて。まかりありきなども。  
 頭つきの見苦しう成たるみれば。さと殿など  
 へもえ参らず。さらでのけさうはえなければ。  
 此月にどけてや。まかせかくれんずらむと。し  
 うに成ぬべき心ちのしつるに。今宵は佛の御  
 するしと覺えて。いみじうなん嬉しきは。今に  
 心易くよしあきらめつれば。後の世もやすく  
 とありし聞しが。さまでおぼすらんと有しが。  
 まつ思ひ出らる。かくて二月も過ぬ。三月に成  
 ぬれば。例の月に参りければ。堀河院の花いと



面白く。かねかた三條院にをくれまいらせて。  
後拾  
いにしへに色も替らず咲にけり花こそ物は思はざりけれ  
とよみけん。げにと覺えて。花はまことに色もか  
はらぬ氣色なり。昔の清涼殿をば御堂になさ  
せ給ひて。七月迄は宵曉のれいじたえず。其人  
のくらうどまち左近の陣など僧坊になりた  
り。内裏にて。ありし所どもさびしげなる見る  
にも。うせさせ給へりけん院の中のひきかへ  
かいすみ。さびしげなる御覽して。

影たにも留らざりける草のうへ玉の臺さ誰かひけん  
とよませ給ひけん。げにとぞ覺ゆる。宮の御方  
に三十講を行はせ給ふ見て。法華經を日に一  
品づゝ講せさせ給ふ。それきくに。三位殿の參  
らせ給ふにぐして参りて。講などはて。御前  
近く三位殿をめせば。さふらはる。宰相とてさ  
ふらはる人。三位殿は今すこし近くまいらせ  
給へ。すけ殿は今にはづかしといふをきかせ

給て。それしもこそ心ざしみゆる。見たてなく  
思ひ出もなげに。みゆる所を忘れずみゆると  
仰られも果ず。むせ歸らせ給へる音の聞ゆる  
に。我も堪がたし。暮ぬれば罷でぬ。晦日に内へ  
参りぬ。四月の衣がへにも。女官ども例の事な  
れば。我もくんと身のならんやうもしらず。几  
丁ども取あへる。人見あへれど我はみまほし  
からず。是をおかしと思召したりしが。思出ら  
れて。灌佛の日になりぬれば。我もくんととり  
出されたり。事始りぬれば。日の御座の御前の  
みすちろして。人々出てみる。殿を初めまいら  
せて。ひろひさしの高欄に。例のさほう違はず。  
したかさねのしり打掛つゝ。上達部たちゐな  
はたり。御導師の見さま申て。みづから山の座  
主こしきのわたるむかしにたがはで。御たう  
し水かけて。殿参らせ給ひて。かけさせ玉へれ  
ば。次第によりて次々の上達部。かく何事かは

たがひてみゆる。左衛門督源中納言よりてか  
くどて。いとたへがたげに物思ひ出たるけし  
きなり。顔もたがふさまにみゆる。あぢきな  
し。我もせきかねられて。大方例はどのかたも  
みどと思ひて。御几丁引よせてみれば。みきち  
やうのかみより御覽せんとおぼしめす。御た  
けのたらねば。いだかれて御覽する哀なり。お  
どなにおはしますには。ひきなをしにて。ねん  
ずしてこそ。御帳の前におはしまし。か。先め  
だちて。中納言にもをどらず覺ゆれば。人めも  
見苦しうて。お前と果ぬにありぬ。五月四日夕  
つがたに成ぬれば。さうふいとなみあひたる  
をみれば。こぞのけふ何事思ひけん。さうぶの  
こし。朝かれあつぽにかきたて。殿こどに  
人々のぼりて。ひまなくふきしこそ。みつ野の  
あやめも今は盡ぬらむとみえしか。又の日も  
空はさみだれたるに。軒のあやめ車もひまな

くみえけるに。  
五月雨の軒のあやめもつくくさ袂にれのみかゝる空かな  
どのみおぼゆ。やうく十日餘りに成ぬれば。  
さいそう講いとなみあひ参らせてと聞しか  
ば。はてゝの十餘日ばかりのつれく物語に  
は。その日の論義といひ出し。いみじさなどさ  
たせさせ給ひし思ひ出らる。六月になりぬ。暑  
さ所せきにも。まづこぞの此頃は。事となく御  
心地よげに遊ばせ給ひて。堀河のいづみ。人々  
みむと有しを。何とおぼしめし。にか。あなが  
ちに進めつかはし。かば。思し召事なれば。先  
あすどて。我は出て人たち待しに。二車ばかり  
のりつれて。日ぐらし遊びて歸りしに。みれば。  
今宵とまりて。心やすき所にうち休まんと  
思ひてとまりしを。常陸殿といふ女房。あな  
ゆかし。たい参らせ給へ。扇引など人々にせさ  
せんなどありし。御扇子ども設けて待参らせ



給ふあどあれば。此人たちになして参りぬ。待つて。泉のありさま内々に問などして。扇引。今宵はさはと仰られしかば。あけんが心げなさま。今宵と思ふに。人たちのけしきの苦くて。見えざらむこそ口惜く候へと申ししかば。つとめて。あくるやをそきとはじめさせ給ひて。人たちめしすへて。大貳三位殿をばしづめておはれたりしに。先ひけと仰られしかば引しに。うつくしとみしをえひきあてし。中にわるかりしを引き當てたりしを。うへになげ置しかば。かゝる心うやあるとて。笑はせ給ひたりし事を。但馬殿といふ人の家の子の心なるや。こと人はえせむなど興じあはれしに。その折は何とも覺えざりし事さへ。いかでさはしまいらせけるにかど。なめげに。けふは有がたく覺せる。七月にもなりぬ。御はてとてのゝ去りあふ。その日に成ぬれば。こそこの御法事同じ

と。百僧なり。ありさま同じ事なれば。とゞめつ。こそより後。女房六人を留めつ。宮の御方に扱はせ給へるが。今はまかでなんずる。哀に出なしき事。かやうにさぶらひつればこそ。月などに参らせ給ひしを。日たちては。とく其日になれかしと。かぞへくらされて。待参らすれば。今はさは見参らするが心うきと。誰も誰もいひあひて。泣こと限りなし。なきあふとはてぬれば。三位殿立て出ぬ。□の出雲といふ女房の讀て。北面のつぼに薄に結びつく。今はさてわかる。秋の夕暮は尾花が末も露けかりけりと讀たりつれと聞も哀なり。萬はてぬれば。廿五日。よの中の諒闇ぬきあはる。御前のまつらひ。日ごろ影しげなりつるみす木丁のかたびら御さうしなど取拂はれて。日ごろは夜のおとれの御帳もなかりつれど。有しやうに立られ杯して。たゞ古への御しつらひにて。違ふ事なく

めでたく成にたり。殿を初て。殿上人藏人さうそくかへゑいおろし。女房たちのすがた。我もくくど色々つくしあはれたるさまぞ。たいありけん心地してそなえ居られたる。水無月比に引かへてめづらしき心地する。さいしもどゆひは白かりつる。例のやうにむらこになされんとて。いとなみあはれたり。殿うるはしくさうそぎて参らせ給ふて。とく参らせ給へどめせば参りたれば。御前諸共にさうそくせさせ参らせ玉ふ。うつくしげにしたてられ。ひきなをしにておはします。御しりつくり参らするにも。昔まづ思ひ出たる。かやうにみそせさせ参らせて。日ことにいしばいの御拜のありは。いかゞさせ給ひしと。まづ思ひ出らる。くはんし参りたるや。時よくなりになりやと。とくノと申させ給ふに。我獨ぬぎかへでさふらふべきならねばぬぎかへつ。局にありても。

先着替んども覺えず。是をさへぬぎかふるこそ。院の御かたみとおもひつれ。是をさへぬぎつれば。いと心細し。一天の人。御心ざし有も無もみなしたりつるに。またしく仕うまつりつるさへ。一度にぬぎてんずる。思ふによからぬ事なれど。ぬぎかへましき心地する。限り有ことなれば。いかいとぞぬぎつ。遍昭僧正の。深草の帝にをくれまいらせて。法師になりてこそうせけるか。又の年御服人々ぬぎけるに。  
みな人は花の袂になりぬなり昔の衣よかほきたにせよ  
とよみけん。かくて八月に成ぬれば。廿一日御渡りと定りぬ。人々いとなみあひたり。されば。我はかはらぬ九重の内の有さまをみんに。はじめたる御渡に。えねんずまじき心ちのすれば。参らんとお思はぬ。院より。さるべき人々みな参るべき由。参らせ給へど。三位殿よりあ



れば。そのさたあらばさてあてたらん。火取水  
 取ばかり参らせて。われはまいらむとなん思  
 ふといへば。げにさぞ覺しめすべき事にてぞ  
 あれと仰らるゝに。参らせ給はざらむも。ひが  
 くしきやうなり。思ひ念じて猶まいらせ  
 まふべきとて出したてらるれば。かばかりの  
 事だに。心にまかせぬ事と思ひなから出たつ。  
 その日もなりて。内大臣殿御びんづらに参ら  
 せ給ひて。朝餉のみす巻あげて。御びむづらゆ  
 ひ参らせらるゝみれば。かはらぬ顔してみえ  
 させ給ふもあはれなり。暮果ぬれば行幸なり  
 ぬ。御仰に。やがて引つゞけてまいりぬ。中御  
 門の門のより。思ひしにしろくかきくらさ  
 る。かうりう寺に参るとてみいれしに。我明く  
 れ出入し門ぞかし。をとゝしのしはすの甘餘  
 日こそ。堀河院にうつろはせ給しか。それに出  
 けんまゝにこそは有けめ。限の日ともおもは

でぞ出けむかし。今は何事にてかは。此世にて  
 又いらんずると思ひしを。我身も同じ身なが  
 ら。又たち歸りいるぞ。心うく悲くも覺ゆる。  
 参りつきて見れば。局は大貳三位殿おはせし  
 所とぞ。ひる三位殿ありつれば。御物のぐを持  
 て参りつるとて。そなたへ出んからくらへや  
 をあゆみ過て。今も少しのぼる。その夜も御そ  
 ばにふしてみれば。夜のおとゝ見るに。みしよ  
 だにこそなし初めたる御あたりなれば。火取  
 水取などのわらは持ちたりつる。御枕がみに  
 左右にをかれたるぞ。たがひたる事にてはあ  
 る。御傍にふしたるも。かやうにてこそ。宮上  
 らせ給はぬ夜などは侍らひしかとおぼえて。  
 哀にのみぞ。皆人はよげにぬれども。我は物の  
 み思ひつゞけられて。目もあはず。瀧口の名た  
 いめん。御ゆどのゝはさま殿上の口にて申聲

ぞ。聞ゆる程に覺えたりしかと。耳に立て聞ゆ  
 る。うけせう時そうして尋べし。心みねばとい  
 ひて。時のふたにくひさす音す。左近の陣の夜  
 行てんめきたるありくも。昔にもかはる事な  
 し。御帳の帷見るにも。先仰られし事ども思出  
 らる。昔を忍ぶ。いづれの時にか露かはく時あ  
 らんと覺て。かたしきの袖もぬれまさり。枕の  
 下につりしつばかり。万の事に目のみたちて。  
 たがふ事なくおぼゆるに。たゞ一所のすがた  
 のみえさせ給はぬと思ふぞかなしき。御まへ  
 のふさせ給ひたる御方をみれば。いはけなき  
 にておほどのこもりたるぞ。かはらせおはせ  
 ましゝとおぼゆる。をとゝしの頃に。かやうに  
 て。よるひる御傍に侍らひしに。御心ちやませ  
 給ひたりしかども。院より。あなかしこ。よく  
 つゝしみて。夜のおとゝを出させ給はで。しば  
 しと申させ給ひしかば。徒然のまゝに。よしな

し物がたり。昔今の事かたりきかせ給ひしお  
 り。殿のあとかたにより奉らせ給ひしかば。そ  
 のまゝにてさふらはんは。なめげに見苦く覺  
 えしかば。起あがりての給はんとせし。みえ参  
 らせむと思ふなめりとおぼして。たゞあれ。木  
 丁つくり出んとて。御膝を高くなして。陰にか  
 くさせ給へりし御心のありがたさ。今の心ち  
 す。いつのまにかはりける世のけしきぞと。萬  
 の人たちの。そのかみの人ならぬ中に。我はか  
 りありし昔ながらの人。いかに結び置きける  
 さきの世の契にかと。物のみ思ひつゞけられ  
 て。哀しのびがたき心ちす。明ぬれば。いつしか  
 とおきて。人々めづらしき所々みんとあれど。  
 ぐしてありかば。いかゞ物のみおもひ出られ  
 ぬべければ。たゞほれてゐたるに。御前のおは  
 しまして。いざゞ。黒戸の道を。おれらしら  
 ぬに。教へよと仰られて。引立させ給ふ。参り



てみるに。清涼殿仁むら殿古にかはらず。だい  
ばんどころこむめい明池の御さうし。今みれば  
見し人にあひたる心地す。弘徽殿に皇后宮お  
はしまししを。殿の御とのるどころに成にた  
り。黒戸の小は半じとみのまへに植をかせ給ひ  
し前栽。心のまゝにゆくくとおひて。みはる  
のありすけが。

右今 君がうへし一村薄虫のねりしげきのべさ成にける哉

といひけむも思ひ出たる。御溝水の流になみ  
たてる色くのはななどもいと愛たき中にも。  
萩の色とき咲亂れて。朝の露玉をつらぬき。夕  
の風靡くけしきことにみゆ。是を見るにつけ  
ても。御覽せましかば。いかにめでさせ給はま  
しと思ふに。

萩の戸に面がほりせぬ花みても昔を忍ぶ袖ぞ露けき

と思ひいたるを。人にいはんも。同じ心なる人  
もなきにあはせて。事の初めにもりきこえむ

抱きて障子のゑ見せよと仰らるれば。萬さむ  
る心ちすれど。朝餉の御障子の繪御覽せさせ  
歩くに。夜のおとのかべに。あけくれ目なれ  
て覺んどおぼしたりし樂を書て。をしつけさ  
せ給へりし。笛のふの押れたるあとの。壁にあ  
るを見つけたるぞ哀なる。

笛の音の押されし壁の跡みれば過にし事は夢さおぼゆる

かなしくて。袖をかほにをしあつるを。あやし  
げに御覽すれば。心えさせ參らせむとて。去げ  
なくもてなしつ。あくびをせられて。かく目  
に涙の浮たると申せば。みなしりてさふらふ  
と仰らるゝに。哀にもかたむけなくも覺えさ  
せ給へば。いかにしらせ給へるぞと申せば。ほ  
もむ女字のりもむの事思ひ出たるなめりと仰せ  
らるゝは。堀河院の御事と。よく心えさせ給へ  
ると思ふも。うつくしくて。哀もさめぬる心地  
してぞえまるゝ。かくて九月もはかなく過ぬ。

よしなければ。承香殿をみやるにつけても思  
ひいでらるれば。里につくくと思つゞけ給  
はんど。をしはかりて。これを奉りしかば。  
思ひやれ心ぞまごふ諸さにもみし萩の戸の花さきくにも  
思へばさておなじさまにて。しありかせ給ふ  
だにさおぼすなり。ましてつくくとまぎる  
ゝ方なく思つゞけんは。押計られてぞありし。  
かくてあるむ。昔今すこしおもひ出らるゝ。斯  
て長月になりぬ。九日御せ御句く參らせなどして。  
十餘日にも成ぬ。つれづれなるひるつかた。く  
らべやの方をみやれば。御經教へさせ給ふと  
て。讀みし經をよくしたゝめてとらせんと仰  
られて。御行ひの序に。二間にてたちておはし  
まして認させ給ひて。局にありたりしに。御經  
したゝめてもて參りて。笑はれんとぞ覺しめ  
して。あまりなるまでかしづかせ給ひし御事  
は。思ひ出らるゝに。御前におはしまして。我

十月十一日大嘗會の御禊とて。天の下の人いと  
なみあひたり。其日になりて。播磨守なりざね  
御びんづらに參りたり。内の大い殿朝餉のみす  
まきあげて。なげしの上に殿さふらはせ給ふ。  
椽に。左衛門佐いとあからかなるうへのきぬき  
て。事をきてし。暫しありて。御びんづら果がた  
に成て。藏人參り。女御對面に參らせ給へりと  
そうすれば。聞せ給ひぬ。事どもすゝめよと急  
がせ給ふ。事なりて。皇后宮などめでたくした  
てさせ給へり。かやうに。世のいとなみやうや  
う過て。今は五節臨時の祭いとなみあひたり。  
今年の五節は大嘗會の年なれば。例にも似ず。  
上達部かすそひて。いとめでたかるべき年とい  
ひあひたり。女房たち我もゝと。御覽の日の  
童とて。ゆかしき事。寅の日のよすでに例の事  
なれば。殿上人かたぬぎ有べければ。いづれよ  
りかのぼるべきと問ひあはれたれば。いらへ



せんとも覺えず。一とせ限の度なりければにや。常より心に入て。もて興じて。參の夜よりさはぎありかせ給ひて。その夜。帳臺の試などに夜更にしかば。つとめて。御朝いの。例よりもありしに。雪降たりときかせ給ふて。大殿籠あきて。皇后宮もそのおりにおはしまし、かば。御方々に御文奉らせ給ふとて。御前に侍らひしかば。日蔭を諸共に作りて。結びるさせ給ひたりし事など。うへの御局にて昔おもひ出られて。物ゆかしうもなき心地してまでなど。わらはのぼらんずる。ながはし例の事なれば。うちつくり参りて造るを。そきやう殿のきざはしより。清涼殿の丑寅のすみなる長橋どのつまして渡すさま。昔ながら也。御前めづらしうおぼして御覽ずれば。暮るゝまで御傍に侍ふにも。雪のふりたるつとめて。また大殿籠たりしに。雪高く降りたる由を聞しめして。その

夜御傍にさふらひしかば。諸共にぐし参らせて見しつとめてぞかし。いつも雪をめてたしと思ふ中に。殊にめでたかりしかば。あやしの賤家だに。それにつけて見どころこそは有に。まいて玉鏡よと作りみが、れたる百敷の内にて。諸どもに御覽せしありさまなど。繪かく身ならましかば。露たがへず書て。人にも見せまほしかりしかど。をしあげさせ給へりしかば。誠に降積りたりしさま。梢あらん所は。いづれを梅どわきがたげなりし。しう殿のまへなる竹の臺。折ぬと見ゆるまでたはみたり。御前の火たきやもうづもれたるさまして。今もかきくらし降さまこちたげなり。瀧口のほんそのまへのすい垣などに降をきたる。見所ある心地して。おりからなればにや。こせんのたちしめての我心の見なしにや。かやきしまでに見るに。我わくたれの姿まばゆく覺えしか

ば。常よりみまほしきつとめてかなと申たりしを。おかしげに覺しめして。いつもさぞみゆると仰られて。ほゝゑませ給ひたりし御口つき。むかひ参らせたる心ちするに。五節のありきたりし黄なるより紅までにほひたりし。紅葉どもにゑびぞめの唐衣とかやきたりし。我きたる物の色あひ雪の匂ひ。ふさゝとこそめでたさに。とみにもえ参らせ給はで。御覽せしよ。瀧口の本所のさうしなめり。女の聲にて。すいがいのもと近くさし出てみるけはひして。あなゆゝしの雪の高さや。いかせむずる。棹もえどりゆくまじきはとよといひしを聞せ給ひて。是きけ。いみじき大事出来にたりとこそ思ひ扱ひたれ。雪のめでたさめぬる心地するとて。わらはせ給ひしなど。思ひ出されて。つくくと思ひ結ぼるゝも。たゞも御覽じまらず。なのうちへくもやりもちたる物こそはせ

て。いでく出てゆかぬさきに乞はせよ。それいへくどひきむけさせ給へば。うつくしさに萬さめぬる心ちす。御返事申などするに。まぎれぬれば罷でなんといへば。あなゆゝし。なご物も御覽せでといひあひたり。皇后宮の御方。常よりは心とに。細殿の几張などにも。織物の三重の木丁に。菊を結びなどして。袖口菊もみぢ色々にこぼし出されたりしかば。過にし方。例はさやうに亂れさせ給ふ事もなかりしが。をどししもうへの御局に。人々のきぬどもの中に。よしと御覽せんを。上らう下らうともいはず。それかれをいださん。わざといたしたるとはなくて。はづれてあひたるやうにせよとて。御手づから人たち引すへて。一のまには出せと仰られしかば。皆人の袖口もりうたんなるに。我からぎぬのあか色にてさへありしかば。獨まじりたらんがけしき覺えて。是



こそ見苦くやと申しかば。とをくは何か見えむ。あへなどその人といふ書附てもなし。よもみえむ。あながちにせんと思召たりし事なれば。どがなきやうにいひなさせ給ひて。すべて黒戸の傍につまきたる小はじとみより御覽むて。あの袖今少しさし出せ。これすこし引入よなど。もて興させ給ひし有様。いかでか思ひ出さるべきをなど覺えて。目留めらるれ。とまりてなど思ふ程に。院よりせいそ堂のみかくらには。すけ二人。さきさきも参ると仰られたるに。一人ぞ辨のすけ参る。今一人は参らせ給ひなんやと。殿仰らるれば。その出たちに事づけて。出なんと思ひて。迎に人をこせよといはせられた。暮るゝ儘にをこせたり。道すがら心やすく。夜の更ぬさきに出るにつけても。物のみそ哀なる。と人何事かつかうまつりなれし。御心に侍らひしあり。ふけしさまに所せか

りし心地せし物を。まして出悦びすとて。わびさせんと思召たりし折は。あやにくがりて。とみに御手もふれさせ給はざりし物を。急きて罷でんと思ひしよの事ぞかし。宮の御方に渡らせたまひて。夜の更るまで歸らせ給はざりしに。辛うじてまちつけ参らせて。進め参らせしを。いかで心えさせ給ひたりしにか。まかづる事仰られしかば。さにさふらふと申たりしを。聞せ給ふまゝに。うちふさせ給ひて。今宵は明方に何事もせん。ねむたし。ねなんと仰られて。いかにつきなうぞ見あへる物かなと思ふ人あらんと。ほゝゝゝませ給ひて仰られしかば。我は。何の心にかさまでは思ひたまはん。待るたりとも。人いつはるとこそわびしからめと申せば。いづみもわびよ。いけもわびよ。我苦しからずと仰られて。御疊の上のうちふさせ給ひて。みつかはして。哀れゆゝしに。に

くげに思ひたるさまこそしるけれ。いかせむ。苦しければ打臥て休むぞかしと。しばし念せよかし。あなわびしなど仰られて。さまでもなき事をこちたげに仰られなして。笑はせ給ひし事など思ひ出られながら。まかでぬ。つとめて。肩脱まだしからんと思ひ居たる程に。かみつかひ。うつくしげなる文。これまいらせん。内にもちて参りてさふらひつれば。出させ給ひにければ。こち参り侍らひつるなりとてさしいれたり。思ひがけずとおもふに。やまと殿よりといふ。取てみれば。

そのかみのをさめの姿おもひ出ていこゝ戀しき雲の上にとぞ書たる。

そのかみの忘がたきに雲の上も出る日高くおごろがす哉とぞかゝれぬるに。小安殿の行幸とてのしりあひたり。里よりやがて参る。大嘗會の事かゝずとも思ひやるべし。みな人しりたる事な

ればこまかにかゝず。御神樂の夜に成ぬれば。事のさま内侍所の御神樂にたがふ事なし。是は今少し今めかしくみゆる。皆人たち。をみの姿にて。赤紐かけ。日蔭のいとなどなまめかしく見ゆるに。かざしの花の有様見る。臨時の祭もとりくゝにせらるゝに。殿も本末のひやうしどり給ふぞうるはしき。ひの装束なる。殿は今少し人たちの座よりはあがりて。御さじきなれば。それにもさせ給ひたり。使ひの頭挿の花さゝせ給ひたるみるに。さまかはりてめでたき。もとの拍子。あぜちの中納言の子の中將のふみち。琴。そのおとゝのびちうのかみこれみち。ひちりき。あきの前司つねたゝ。あまたありぬれば。事長ければかゝず。斯て御神樂初ま高き所に響きあひたり。聲聞知らぬ耳にもめ



でたし。御神樂やう／＼果がたになると聞ゆ。せんざい／＼万さい／＼と謠ふこそ。あまての神の岩戸にこもらせ給はざりけんもことほりと聞ゆ。我君のかくいはけなき御よはひに世を保たせ給ふ。伊勢御神もまもりはぐみ奉らせ給ふらむと。位たもたせ給はん年の數そひ。未はながあのおうらのはる／＼と。濱の眞砂の數もつきぬべく。みもすそ川の流いよ／＼久く。位の山の年へさせ給はん。誠に白玉椿八千世にちよを添る春秋まで。四方の海の浪の音靜にみえたり。かくて御遊はてがたに成ぬれば。殿御琴。治部卿もつなびは。はうしもとの如くむねたいの中納言。しやうの笛内大臣の御子の少將まさたい。笛ひちりきもとの人々御つがひにて。殿の御聲にてまんざいらく出せとて。われうちそひさせ給ひ。ふたかへりばかりにて。あなたうといせの海など。

みだれあそばせ給ふ。むねたいの中納言拍子とりて出す。事はてぬれば。各さうぞくぬぎかへさせ給ふ。殿の御琴の音つまをと。なべてならず愛たし。皆々人々ろくかたにかけてたつに。殿は。人には今ひときはまさり参らせて。御したがさねうち御ぞかたにいだかせ給ひたるを見まいらすれば。三笠の山にさし出る望月の。世々をへてすみのぼらんやうに見ゆ。御年のほどなど。誠に盛なる櫻の花の咲とのほりたらむを見る心ちす。御よそほひ。天りんしやうわう斯くやと覺えさせ給ふ。たせ給ふとて賜りたる物なり。をきてたつべからず。なめげなりとて。御肩にかけながらおはしまして。大しやうしの前にて。御子の中將殿をまいれ。これ給はれとて。ゆづり参らせ給ふ。見参らすれば。二葉の松の千世に榮へむ御ゆくさき。雲をわけてなりのぼらせ給はん程たの

もしく見えたり。事果ぬれば。車を立てやがてまかでぬ。又の日。よべの名残めづらしく心にかへりて覺ゆるにも。先昔の御名残思ひ出られさせ給へば。周防内侍の許へ。度々覺えて。げにと思ひ合せらるらむとて。いひやる。めづらしき豊の明の日影にもなれにし雲の上ぞ戀しきかへし。

思やる豊の明のくまなきもよそなる人の袖ぞそばつる晦日に成ぬれば。朔日の御まかなひすべきよし仰られたれば。いそぎあひたるにも。我はただ。わかれやいざとのみ覺えて。つごもりの夜内へ参るとて。堀河院過るに。二條の大路堀河など。かいすみ物さはがしげに。人の出入たるけしきみえず。目のみ先とまりて。  
後進  
ぬしなしと答ふる人もなげれども宿の氣色ぞいふに増れるとよみけんふることさへ思ひ出らる。うちみん人。女房の身にて。あまり物しり貌にくくし

などぞ。そしりあはんずらむ。かやうの法問の道杯さへ。朝夕のよしなし物語に常に。仰られ聞えさせ給ひしかば。事のありさま思ひ出らるゝまゝに書たる也。もどくべからず。忍び参らせざらん人は。なにとかはみん。我はたい一所の御心の。有難くなつかしう。女房衆などこそかくはおはしまさめと覺給ひしか。忘るゝ世なく覺ゆるまゝに。かきつけられてぞ。  
歎つゝ年のくれなば無人の別やいと遠くなりなむ  
十月十餘日の程に。里にゐて。萬の事につけても。おはしまさましかばと。常よりも忍ばれさせ給へば。御姿にこそみえさせ給はねど。おはします所ぞかしといへば。香隆寺に参るとてみれば。木々の梢ももみぢにけり。外よりは色深く見ゆれば。  
古へをこふる涙のそむればや紅葉の色もとにみゆ覽  
御はかにまりたるに。尾花のうす白く成て。招



きたちて見ゆるが。所がら。さかりなるよりも  
かかるしも哀なり。さはかり我もくど男女  
の仕ふまつりしに。かく遙なる山の麓に。なれ  
つかうまつりし人も獨だになく。たゞ一所ま  
ねきたし。せ給ひたれども。とまる人もなくて  
と思ふに。大かた涙せきかねて。かひなき御跡  
ばかりだに。霧ふたがりて見えさせ給はず。  
花薄まれくにさまる人ぞなきけふり成し跡ばかりして  
尋れ入心のうちをしりがほに招くお花をみるぞ苦しき  
花薄きくだに命つきせぬによそに涙を思ひこそやれ  
これを或人いひをこそせたり。

いかでかく書留め綴みる人の涙にむせてせきもやらぬに  
かへし。  
思ひやれ慰むやきて書置しものはさへぞみれば悲しき  
我同じ心にしのび参らせん人と。是を諸共に  
みばやと思ひまはすに。忍び参らせぬ人は誰

群書類従卷第三百廿二

かはある。されど我をあひ思はざらむ人に見  
せたらば。世に煩はしくもれ聞えんもよしな  
し。また相思ひたらん人も。かたうどなどなか  
らん人は。はへなき心ちすれば。此みかどにあ  
ひたらん人も哉と思ふに。常陸殿ばかりぞ。此  
帝にあひたる人はあなれと思ひ迎へたれば。此  
思ふもしるく哀に心やすく渡らせたり。日暮  
しにかきらひくらして。

右申請 官本。俣源極藤俊治。書之。與三岩  
倉中將一拔畢。

寛永十六稔臘十六 秘書郎

右讃岐典侍日記以奈佐勝舉本書寫以百花庵宗固本按合

羣書類従卷第三百廿三

日記部 四

辨内侍日記上〔舊本行書跡〕

寛元四年正月廿九日。富の小路殿にて御讓位後藏  
なり。そのほどの事ども數々記し難し。いとい  
どめでたくて。辨内侍。

今日よりは我君の世と名づけつゝ、月日し空に仰がざらめや  
三月十一日。官廳にて御即位。春の日もとに麗  
かなりしに。様々の儀式ども。いはむかたなく  
めでたし。人々の姿どもめづらかにみえ侍し  
かば。辨内侍。

玉ゆらに錦をよそふ姿。こそ千歳はけふさいやめづらなれ  
四月一日。平野の祭也。上卿土御門大納言。秋  
定。辨。經俊。車。すけつぐ。くやく。さきつな。いだし

檢 校 保 己 一 集

きぬ。若楓。御てうづ参らせよといふをみれば。  
紙をぬらして申にはさみて。ことくしげに  
車へさしいるゝもあかし。松の木陰風涼しく  
吹て。けいきおもしろく侍しかば。辨内侍。

萬代と君をぞいのる千早振平野の松の古きためしに  
同じ日。少將の内侍。松尾の使にたつ。上卿二  
位中納言。良教。辨。ちか。り。くやく。ためなほ。車。か  
れとも。出衣。しやうふ。しげき木ずゑに郭公の初  
音をききて。少將内侍。

千早ふる松の尾山の郭公神も初音をけふや聞覽  
四月十三日。臨時に。内侍所へ使に立て侍しに。  
軒 麻 宜 陽 殿  
こんらうをとをりて。ぎやうでんのだむの上



なれば。夜更てめぐる月影。さやかにみえしかば。辨内侍。

増鏡くらぬみよに仕へてぞさやけき月の影もみるべき  
五月五日。あさかれるに。かつみを参らせたるを。歌をそへてとりて参らせよ。仰と有しに。あやめと思ひて侍れば。ひきたがへたるもあもしろくて。辨内侍。

かつみおふる淺香の沼もまだしらで深くあやめと思ける哉  
五月の廿日あまり。在明の月隈なくて。ことに面しろく侍りしに。御ちよくろにて御連歌有しこそ。いとやさしく侍し。かた家ためつぐばかりにて。人數も少かりしかば。いとまさりし程に。此序に勾當の内侍のびはをきかばやと。仰ごとありしかども。月もいりかたちかくなりて。みな歸り侍にし。名残多くて。釣殿かたに休らひて。辨内侍。  
月をみて思ひも出ばをのづから忍はれぬべき有明の空

返し。少將内侍。

思ひ出む後さはいはし今のまの名残の 有明の月  
七月七日。きかうてんの夜。頭中將まさいへ。事ども奉行す。朝餉にて。勾當の内侍。とち立られて。ちと搔ならして出されしこそ。いと面白かりしか。頭中將奉行がらにや。今宵の雨もしめやかにふるなど。人々仰せらるれば。少將内侍。

こめくご今宵の雨のふるまひに奉行の人の氣色をぞしる  
など申せば。大納言殿とに興じて。笑ひ給もあかし。琴どもよくなりて。うへの御局より二間にてみれば。燈火の影かすかなるも面白くて。少將内侍。

さもし火の影も耻かし天河あめもよにさや渡りかぬらん  
返し。辨内侍。

星合の光はみせよ雲より雲はちかし鶺鴒の橋  
八月十六日。御せ所へ行幸ありしに。万里の小

路の大納言。公基。左衛門督。實藤。頭中將。雅家。頭辨顯朝。なんど参て。御遊ども有り。御留主には。中納言のすけどの。宮内卿どの。辨内侍など。朝餉のひろひさしにたちいでたれば。高欄にそへてたてたるむまかたの障子はづれより。ほのかにみゆる月影いとわりなきを。いにしへ二條の後後涼殿に候給ひけむは。此一の對の程ぞかし。その世にもかくや心づくしなりけんなど申出て。辨内侍。

昔より曇らずといふ月影をさやかにみぬは心なりけむ  
還御の後。これを聞て。少將内侍。  
雲の上に猶澄ながら秋のよの月をさやかにみざらん

八月晦日。女く所へさだまるべき内侍。朱雀門へ向ふべきにて侍けるに。少將内侍いたはるとありて。代官にたて侍しに。風いと涼しく吹て。みかきがはら面白く侍しかば。辨内侍。  
大内や古きみかきに尋きてみよ改まるけふにも有かな

九月八日。中宮の御方より。菊のきせ綿参りたるが。とにうつくしきを。朝餉の御つぼの菊にきせて。夜のまの露もいかゞと覺え渡されて。面白く侍しかば。辨内侍。

九重やけふ九日の菊なれば心のまに咲せてぞみる  
十月一日。除目ときこえしが。十一日に延びて。土御門院の御忌日とて。陣に公事ありて。大宮大納言。万里小路大納言など参らせ給へり。職事ども。つねとし。むねまさ。光國など参り。御祈のと定めらる。十九日より金輪の法てんちさいへむなど始まるべしと聞えし。奉行藏人侍従むねまさ。ちりしも霰はげしくさへたるけいき。いと面白くて。辨内侍。

八百萬祈るしるしも顯れて霰玉ちる數もみえげり  
十月廿四日。河原の御祓なり。その日の事どもめでたしといふもあろかなり。葺屋より見渡したれば。はるかにいさごぢ白々とみえて。河



風さえたりしに。辨内侍。

けふしと清き河原のいさこ地に千世へむ數もさり始むらめ十一月十四日の夜。雪いと面白く。みちたえて積りにけり。夜番にて。花山院宰相中將。もろつ頭中將など候けるも。院の御所へ参りにければ。人々清涼殿へ立出てみれば。竹にさえたる風の音までも身にしみて面白きに。月は猶雪げに曇りたりしも。中々見所あり。大宮大納言。きんすげ。万里小路大納言きんもと。など参らせ給ひて。南殿にてよもすがらながめ給けるが。暁がた殊に冴たりければ。上の男子共。殿上のおりまつめしけれども。つきたるよし申ければ。廣御所の北向にて。かれたる萩の枝など。折松にせられけるときし。いとやさしくて。辨内侍。

霜枯の古えの萩のおり松は崩出る春の爲さこそみれ有明の月隈なかりしに。雪の光さえ通て。面白

くみえ侍しかば。常の御所の高欄の本へ立出たりしに。公忠の中將。大宮の大納言殿の。硯こはせ給とて。持て参りしも。いづくの御文ならむと。ゆかしくて。辨内侍。

明やらでまだ夜は深き雪の中に文みる道は跡やならん十四日のよ。少將内侍女く所へ渡りて。心ち猶詫しくて侍りければ。なにともしらずふしたるに。暁がた。はるかに雪深きをわけける音の聞ゆるに驚きて。こゝちをためらひて。やをら起上りてきけば。大宮大納言殿よりといふ聲につきて。妻戸ををしあけたれば。いまだ夜は明ぬものから。雪にしらみたる内野のけいき。いつのよにも忘れ難く面白しといへば。なべてなり。御文をあけてみれば。

九重や大内山のいかならん限りもしらす積る白雪返し。少將内侍。

九重の内野の雪に跡つけて遙に千代の道をみるかな

その雪のあした。少將内侍の許より。

九重にちよを重ねてみゆるかな大内山の今朝の白雪返し。辨内侍。

道しちらんちよの御幸を思ふには降さもののべの跡はみえなん十七日。雪猶いと深う積りしに。吉田の使に立て。かへさに。しゆき方主基の女く所の事がらゆかしくて。そなたさまやれと申し侍しかば。くやく。ためもち。六位の車の供のものなども。夜更てはるかにめぐらむ事。かなふまじきよし申侍しかども。せめて尋ねまほしさに。吉田の使の返りには。必ず女く所へたちいるしきにてあるぞと申侍しかば。誠にさる先例ならばとて。はるくくと尋ねゆきたりしに。えむが門をそくあけ侍しに。今にはじめたる事か。吉田使の返さに。内侍のいらせ給に。とあたらしくあけもまうけぬかど。荒らにいさめ申侍しも。かやうの事や。先例にもなり侍らむと。おかしく

て。辨内侍。

問はましや積れる雪の深きよに是も昔の跡さいはすは十八日は。中の西の日なり。攝政殿實細参らせ給ひて。御くしそがせおはしますに。物の具にて参るべきよし。仰有しかば。折しもをしいだしの衣。よそひなき由申て。なえたらむも又いかゞとて。辨内侍。

しほれたる衣なきせそ大海の蟹の袖かさ人も社みれゆき方の女く所は。勾當の内侍なり。此程の雪さえとほりたる夜もすがら。琴彈あかし給ふと聞しも。とにいみじく覺えて。辨内侍。

ふもすがら野への白雪降とも千世松風の例にやひく少將内侍。女く所。左近ふの築垣の中なれば。はるくくと見渡されたるに。月の冴たる雪の上は。かぎりなく面白て。少將内侍。

いつのよも忘れやはせむ白雪の古き御垣にすめる月影衛士めふるとか。夫ともとるとて。になひたる



ものどもうちをかせて。さまぐつかはるゝなかに。こに物いれて荷ひたるが。とになげきて。さしたる所へまかるに。かまへて暇たべと。泣やうにいふも。いとく惜くて。少將内侍。

身におへばこそ思ふらむ箭のてむはなつよの心迷ひに

おかしげに。色々なるものども。ぬひかけたれば。雪どけにぬれぬべくて。衛士ども上にのぼりて。雪搔く音も面白く。耳にとまる心地して。少將内侍。

あばらなる板屋の軒の白雪のかくばかりなき降積る覽

ことに風吹さえて。おろそしき程なりしに。奉行辨ちかより。内野の風に吹すゑらるゝ心ちして。たへがたくて。つや／＼と物もいはれず。けさよりぎようじ所への風に吹れて。何事も覺ず。かゝるたへがたきとなしと。ふるひくいはるゝも。誠にことほりとをかしく覺えしに。女官ども。辨殿こそ。參らせ給ひたれとて。

ひしと並びいてそめく。さなにかさかりて。御とかけはてなんずと。聲々申侍しかば。すべてふるはれて。ものもいはればこそと有し。おかしくて。少將内侍。

言の葉も思ふにさこそなかるらめ吹さふくよの風の景色に

廿二日官廳へ行幸ならんとて。かねて中宮の行啓也。

廿日。よひ月まち出る程に。ふけてぞいらせおはします。藏人のすけ。經俊。内侍たづぬと聞て。奏事にやあらんとて。臺盤所のぬいの障子のもとにて待つ程。行啓の供奉の人々。此方さまへくる音して。中宮權太夫。通成。花山院宰相。將。師繼。頭中將。雅家。通世の少將など。ゆづえの音までも。さを通りて面白きに。切みすのほどに。藏人の侍従むねまさか聲にて。ゆゝしき月の光かな。白薄様のころこそ。思ひやられるれといふ。げに限なくみゆれば。辨内侍。

かれて思ふ豊明の寒けさをましていかに澄る月かな

廿二日の曉。官廳へ行幸あり。とに寒くて。雪さへこほりたるに。あからさまにしつらひたる御所なれば。大そうの御屏風のすきまの風に。雪のちりくるもいと面白し。大宮大納言殿まいらせ給て。やぶれたる御格子ども參り渡し給ふ。御所は高みくらむきなり。瓦の棟に雪白く積りたるに。只今も修理しきどものぼりて。おのゝをともたゝこゝもとに聞ゆ。清涼殿は。常の御所の御障子のあなた。二間をしつらひて。御拜の座とす。くるゝどよりしもは。おものやどり御づし所也。局一まを四にへだてゝ。二三人づゝあひいたれば。せばきもわりなし。中宮の御方へいらせおはします。御道は妻戸のひとまより。せいそだう見渡されて。いと面白し。假初にしつらひたれば。人々の足音までもあかしう聞ゆる。今宵は帳臺の心みなり。

清涼殿にしつらひたる二間。殿上のくしがたあるまには。徳大寺の大將されも。を初て。上達部の出しづまの姿ども。めとまりてぞ見ゆる。常の御所の御障子の方は。臺盤所なり。女房だち袖をつらねていなみたり。なかに大宋の御屏風をたてたれども。ひきくて。御所へ參る人々も。あなたの公卿どもに。めを見合はずもまばゆくて。むかし女房のやうに。いさりありきしもおかし。荒薦のやうなるものを敷たれば。織物の絹の裾は。みなちりにぞなりし。嵐はげしく吹て。へだての屏風つゝきて倒れにしかば。渡殿まで見渡されたる。晴々しさ限りなく。辨内侍。

隔つる風のたよりもおしなべてさらにぞ豊の明也けり

少將内侍。黒木のやへむかひて侍けるに。髪上の具をとりおとして。官廳の局へ乞にたびたりしに。是にもさしあふ程にて。かなはざりし



かば。とともよくなりて。とくく〜とたび〜  
せめられしも。たへがたくて。少將内侍。  
しばしまて打垂髪の差櫛をさし忘れたる時のまばかり  
後にこれを聞て。辨内侍。

差櫛のさしあふほどの時の間は打垂髪も我ぞ亂れし

寅の日は。みやの御方のえむすいなり。夜も更  
にしかば。御所も御夜にならせおはしました  
りしが。しろすやうのこゑに。御めさまし  
て。又出させおはします。各たちて舞ひ給。右  
大將實基。三ど。大宮大納言公相。五度。萬里小路  
大納言公基。四度。右兵衛督有資。いだしうたな  
り。左衛門督實藤。ときこえしが。俄に凶服にな  
り給ひし。いとく〜ほいなし。又は花山院宰相  
中將。師繼。中院三位中將などぞ見えし。その夜  
はちこの祭の使にたちたりしに。顯朝の辨。院  
の推參燕醉などはてし。まいりたりしかば。曉  
になりて。宮のとがらも心すみて。物の音しら

べたるも。ちりから面白くて。辨内侍。

今宵しもいかなる神の誓にて物のねならず跡となりけむ  
藏人の侍従宗雅。急ぎ内覽すべしとて。いそぎ  
の節會より。しうきにうつらむに。御隨身はな  
を従ふべきにやと申侍しを。あまりに事しげく  
て。え申とをさわりしかば。しきりに急ぎ申べ  
き由侍しを。中納言のすけどのたゝなかにて。  
歌などにてはからへかしと聞えしを。さしも  
のここのまぎれに。ながめいだしたらむ心づ  
きなさと。おかしくて。心にはかくぞ覺えし。  
辨内侍。

さしも身に隨ふ夜半の月なれば移る方にぞ影はめぐらめ

卯の日は。せいそだうの御神樂なり。中宮の御  
方へまいる道にて。人々きかばやとありしか  
ども。攝政殿候はせ給ひて。いと口おし。清涼  
殿のかたへたち出たれば。職事ども立並びた  
り。又きぬかづきかさなりて。さらに道なし。

常の御所の御帳のもとに。人々祿どもにたき  
物などして。ほのかにきししかば。大宮大納言  
びは。花山院大納言笛。兵衛督拍子。面白ども  
いへば中々なり。辨内侍。

雲のり猶ほるかにや開ゆらん昔にかへす朝倉の聲

事どもはてし。大宮大納言殿。常の御所へまい  
り給て。勾當内侍どのに。ほくばのねはいかい  
侍つるとありしかば。かの大こくでんのびは  
のねとかやのやうに。いづくまでもくもりな  
くこそと申給も。げに限りなくて。辨内侍。

古への雲井に響くびはの音に引くらべても猶限りなし

辰の日は節會也。高御座へいらせおはします。  
たかきいしはしに。袴のふみどころたどられ  
て。扇もさしれず。いとわりなし。其夜の事共  
のめでたさ。いひ盡すべからず。辨内侍。

雲の上と思ふも高き古への道をぞ仰ぐけふの御幸は

節會はてぬれば。わらはのぼり。露臺の亂舞。

御せむのめしなどはて。清暑堂の月の有明の  
影。あかず身にしみて。面白きを。人々ながめ  
て。辨内侍。

九重によを重ねつる雲の上の有明の月をいつか忘れむ

かくて閑院殿へいらせおはしまして。大内裏  
の事思ひ出てし。辨内侍。

雲おにて有る雲井の戀しきは古きを忍ぶ心なりけり

臨時祭は十一月一日と聞へしが。のびて十二  
日也。日來ふる雪さえとほりたるに。いしばい  
の間にかけりたち。つくく〜とまぢいたりし。  
ひえざまもいとたへ難し。少納言内侍少將は  
いせむのいくさあらそひして。しかれしもあ  
かし。攝政殿。公卿には花山院宰相中將ばかり  
ぞみえし。職事光國。庭火のかげに月の光さえ  
て見えしも。面白くて。辨内侍。

赤星のこゑもさこそはすみぬらめ庭火に月の影ぞ移るふ

内侍所の御神樂は。十二月十五日なり。すけ。



按察のす内侍。小納言。月いと面白くて。人々いざなひてきくにおはせしが。中院三位中將。雅忠の中將など。こむらうの方にみえしかば。空くて立還りたりしを。大納言殿。このせきもりの心づきなき。いかと思ふと仰られしかば。辨内侍。

うちもれぬその關守の心地して通さぬ道に立かへる哉

廿一日。せちぶんの御方違の行幸。官廳へなりたりしに。ありしよの事思ひ出られて。清涼殿にしつらひたりし所に。少納言内侍とよもすがら月をながめて。辨内侍。

あざりし雲井の月の戀しきに又めぐりきぬ有明の影

廿四日。久我太政大臣の方せち會なり。夜更て殿まいらせ給ひたりしに。髮上の内侍にて。少納言とふたり大盤所に候しに。夜は更ぬるか。丑のくびのほどかどはせ給ふを。誰も何とも申さたりしを。少納言心のうちに。御返事定

めて有つらむ。いかと聞ゆれば。辨内侍。

轉寐にれや過なましよ申の丑のくびもさしてしらすば藥師の御修法。十二月十八日より始りて。廿四日けちぐわむとさししが。のびて廿六日佛名の夜。けんむまもりたてまつるとて。つくづく候しに。のりの聲々いとたふとくて。辨内侍。

七日ぞと思へばあかぬ日をのべて行ふ法の聲ぞ聞ゆる

寛元五年。元日のはいらいのけひき。殊にめでたくて。辨内侍。

今日ぞとて神を列ぬる諸人のむれたつ庭に春はきにけり

七日。白馬節會なり。春の日影もうららかなるに。内辨のよそほひゆしくみえしかば。辨内侍。

(右大將殿九條殿)

舍人めす春の七日のひかり幾萬代のかけかめぐらむその夜。白馬の渡るをみて。辨内侍。

牽き連れてうちもたゆまぬ駒の足早く此は更やしぬ覽

十九日。攝政かはらせ給ふとて。せんざせらる。上卿二位中納言。良教。職事頭辨。顯朝。そうたてまつるほど。おりしも月曇がちにて。なにとなくものあはれなれば。辨内侍。

はるよの月と誰か眺むらんかたへ霞める春の空哉

奏し奉るを。御湯殿の上にて。少將内侍みて着到せられたるかや。かみのさうじのつまやりて書き附たる。少將内侍。

色かはる折も有けり春日山松をさきはさ何思ひけむ

これをみて。辨内侍。

春日山松は常磐の色ながら風こそしたに吹替るらめ

日記の御双子三帖。おほたいりの比。中納言のすけ殿に預させ給たりしを。光國申いで。返し參らすべきよし申侍しに。なにとまれ申さばやといふとにてありしかども。御歎きの程心ばかりは用意せられて。辨内侍。

瀧千鳥あまをかたみの恨だに波の上には如何さめむ

廿三日。御拜の御どもに。大納言殿中納言のすけどのなど参りて。二間のすのこの許にたち出給へるに。餘寒の風も猶さえたる吳竹に。日はてりながら。雪の降りかゝりたるを。中納言のすけどの。文屋の康秀がいとひけむこそ。おもひよそへらるれ。さすがさほどの年にはあらむとやなど聞ゆれば。辨内侍。

たが身にかわきて厭はん春の日の光にあたる花の白雪

二月廿八日。年號かはりて寶治といふ。陣のさだめの人々。大藏卿八條大納言。みちた。土御門大納言。顯定。のこりの人々は。きしかど忘れにけり。攝政殿岡屋殿兼經。參らせ給て。古の陣の定に。四納言たち。いかにゆしかりけむ。さてこそ。照少將光少將などは。つかさくらゐたかくのぼらむとおもふは。身の耻をしらぬ也けりと思ひとりて。世を遁れけめなど。ふると語出させ給も。げに思ひやられて。辨内侍。



古に定め置けることのはを今も重ねて思ひやる哉

三月一日。こどうの御神事に。凶服にて仁壽殿の妻の局に渡りたるに。左衛門の陣向なれば。東三條の木ずるも。近くみえ渡されて。いと面白し。けふは陣に公事ありて。經光の宰相。頭中將。頭辨もまいり。瀧口ども従ひてみゆるもおかし。宗雅光國なども參る。花も盛り。いと面白きに。ありしも大宮大納言參り給。なをしすがた常よりも心とに。匂ひ深くみえ給ひしかば。辨内侍。あを狩衣きたる人ぞ。御供にはありし。

花の色にくらべて今ぞ思ひしる櫻に増る匂ひ有さは

三月九日。左衛門督實藤。夜番にまいり給て。今宵は宿を通すべきよし有しに。衛門督通成。も參りたる由。聞せおはしまして。なにとにても。面白からむ事なくてはほるなしとて。殿上に誰々かさぶらふ。少々めしてまいるべきよし。有資卿うけ給はりて。公忠。公保。通世。隆經

やうの人々まいりて。五節のまね亂舞などは。左衛門督。りやう山みやまの五葉松。右衛門督。兵衛督。つけうた。面白しとも愚なり。今夜の名残をとめばやと。人々ありければ。辨内侍。

いづはりのことしもいかゞ忘るべき豊の明は時ぞもなし。中宮の行啓は。彌生の頃なれば。其程に人々いざなひて。いづくの花も雲井よりとて尋ねむに。咲ぬ櫻はあらむなど。万里小路大納言殿のたまひしかども。なにとなくてやみにし。口惜くて。辨内侍。

花むむと頼めしとやいかなれば尋ねばかりのなだに留らぬ返し。少將内侍。

華咲かぬ花や仇なに立ぬらん空頼めにも成にける哉

三月二十一日。御祈ども有べしと聞ゆ。藏人の侍従奉行す。金輪法は太政大臣殿。佛眼法は殿の御さたとぞ聞えし。前の座主仁壽殿に候は

せ給べき御しつらひに。なにとなくよも更ぬと思ふに。もむしやくのこゑきこゆ。唯今まではなど申さけりけるにかと尋ねれば。こよひは官奏とて。陣に公事ありてといふもとはり也。なにとなく面白くて。辨内侍。

我ならぬ人もさこそは聞つらめ曉方の瀧口の聲

廿三日は季の御讀經也。大宮大納言。万里小路大納言。左衛門督參りて。皆御所へ御まいり有。殿より。かへでの枝に手鞠を付て參らさせ給ひたるを。中納言のすけどの見給ひて。こぞさきとのより。舟に鞠を十つけられて。參りたりしこそ。思ひ出らるれとて。なにとなく。舟のどまりは猶ぞ戀しきと。くちずさみ給へば。辨内侍。湊川浪のかゝりのせと荒てと。つけたりしを。是を一首になして。返す人のあれかしと聞ゆれば。辨内侍。

いかにしてかけたる波の跡やそのうきたる舟の泊り成らん

花山院宰相中將。西園寺の花見の御幸の御供に參りたりけるまに。母の失にけるを。ことになげかるゝよし聞しも。いと哀にて。少將内侍里なりしに申つかはし侍し。辨内侍。

悲しさのさらぬ別をしらすしてちよもさ花の陰や頼めし

返し。少將内侍。

春こそは花は又さも頼みなむさらぬ別れよいつを待らん

三月廿八日。洞院攝政殿の十三年に。せんにん門院御さし。御くしあるさせ給と聞しありしも。雨降ていと哀なりしかば。少將内侍の許へ。辨内侍。

たちなれぬ衣のうらや春雨に始てあまの袖ぬらす覽

返し。少將内侍。

津の國の難波もしらぬ世中にいかでか蟹の袖濡すらん

權大納言ひるはむに參りて。常の御所の高欄の許にて。なにとなき御遊あり。公忠。公保。資保なども候。みかはみづに山吹の花の流るゝ



をみて。大納言新吉野川と見ゆものかなと聞  
ゆるを。御殿ゆどのの上には。人くもいと面白くこ  
そ。なにとまれ申さばやなどありしかば。心の  
うちに。辨内侍。

山吹の花の陰みる水なればうつす芳野の河さいふ也

卯月十日の比は。太政大臣殿北山におはしま  
すほど。女房たち。郭公の初音たつねにおはし  
ましたりけるに。甲斐々々しくまいりたりし  
が。我心のうち。うたによめと有しかば。辨内  
侍。

厭はし何方よりも尋ねさへあかぬ名残にきなば返さ

最勝講は。十八日よりなれば。結願廿一日也。  
行香にたつ人々。左大臣殿。近衛殿。花山院大納  
言。さだまさ。權大納言實雄。などぞ。御あかしの光  
にほのみしりたりし。さならぬ人々はいとみ  
わかず。殿は鬼の間に候はせ給ふ。聞きもしら  
ぬ論議の聲も。結願なにとなく名残おほくて。

辨内侍。

比へみる御法のちまの花ならばけふはつかに荅開けん  
花山院宰相中將。師繼。いろにてこもりいられ  
たりしに。南殿の立花盛りなりしを。一枝折て  
遣はすとて。兵衛督どのに代りて。辨内侍。

あらざらむ袖の色にも忘るなよ花橘のなれし匂ひを  
返し。宰相中將色の薄様に書て。鬘の枝に附た  
り。

古へに馴し匂を思ひ出て我袖ふればはなやつれむ

五壇の御修法は。十七日より始りて。七日なれ  
ば。廿三日結願なり。こよひはいと名残多くて。  
曉の御時に。必らず聽聞せむなどいひて。月の  
かたぶくまで。常の御所の御えんのかうらむ  
におしかりて。兵衛督殿。勾當どの。少將辨  
など。なにとなきそいふ事どもいひかはして。  
どのみすがたもつゝましきに。唯今人の参り  
たらんになどいへば。これほど更たるに。誰か

はこゝにものせんなどいふ程に。按察使殿参  
らせ給ひて後。御湯殿へ通りのたてしとみに。  
かぶりのさきのみえつる心ちのする。人のお  
どもしつるにやなどいひ出して。あなたさま  
に誰か候。いざとはんとて。女主めしたかづんして  
尋ねれば。三條の中納言殿公親。こそおはすれど  
いふ。あなあさまし。立部の上よりも。よくよ  
く見えぬらんと。心うがり歎ほどに。曉の御時  
の鐘の聲聞ゆれば。聽聞して。只今深く歎きつ  
る罪も浮ぶらむと覺て。いと貴くて。辨内侍。

何さなき心の罪も消ぬらん月も有明のかれの響に

六月一日。土御門の中納言あきちが。の夜番なり。  
其日は院の御所の夜番なりけるにや。いとど  
くひるほどに参りて。かくと勾當の内侍どの  
に聞えさすれば。めづらしくこそとて。あひし  
らひ給を。きりみすのもとにて覗けば。直衣の  
色はなやかに。とにひきつくるひて。にほひ深

くみゆ。今の世にはこれ程なる人も有がたし  
など。人々も聞ゆ。番にもけたいなくまいり。  
さらぬ奉公も怠るまじきはなど。こまやかに  
聞えてたちぬる名残も。なにとなくとまる心  
地す。瀧の口よりいでむを。ひろ御所にてやみ  
るべきなどいふ程。殿上に久しくたゝずみて。  
にきうの御ふだ着到など見て。どのもんつか  
さにものいひ。着到つけても猶いでやらず。な  
りいたのほどにたちて。なにも目とまるけ  
しきなるを。いかなるとにか。先々は院の御所  
に心のひまなき人々にて。おほろには。番にも  
まいらぬに。あやしうこそなどいふほどに。つ  
ぎの日きけば。はや此あかつき。りやうせん  
て世をそむきぬときくも。昔物語を聞く心ち  
して。あはれさ限りなくおぼえて。辨内侍。

そむきえて心も風も涼しさの岩のかけちを思ひこそやれ  
八日。けふは晝の番に参らましものを。熊野の



みちのほどにてやあるらむと。哀にて。大納言  
どのに。辨内侍。

旅衣たちて幾日に成ぬらんあらましかばさけふぞ悲しき  
時繼の辨参りて。臺盤所にてしむこむじきの  
御神事のと申侍しついでに。土御門中納言の  
とあはれさ。心有人のめでぬはなし。浮世をし  
らぬ人は。畜生に人の皮をきせたるこそ聞  
侍れといふも。げに悲しくて。辨内侍。

かく聞ば流石身の毛の立つものをとりに劣らぬ心なれども  
七月十五日。月いと面白きに。清涼殿いかなら  
んと仰事ありて。只今と御前に参る程なれば。  
御格子もす可らず。御丁のもとにて。御覽せさ  
せおはします。殊に隈なくみゆれ。ばいせむ爲  
氏なり。

今宵又初の秋の半までうすく月の影ぞみらぬる  
十六日。除目なり。殿まいらせ給ふ。經俊みつ  
くになどまゐりて。臺盤所に。内侍もて奏待べ

秋をへて馴し庭の萩のえにさめし心の色をみせばや  
返し。

思ひやる萩の古枝になく露はもこみし人の涙也けり  
十一日はしやくてんなり。朝餉にて。ありつぐ  
奏す。ゆゑしきみちの人々。詩作りてあそぶら  
んこそゆかしけれ。などこの殿上などにてな  
からむ。さもあらば。たちきしてむなど。人々  
仰られしかば。辨内侍。

道しあらば尋れてぞ聞ん敷しまや倭にはあらぬ唐のもの  
八月十五夜。常盤井殿にて。院の御會侍しに。  
大宮大納言。万里小路大納言。藤大納言。爲家。權  
大納言。實雄。右衛門督。通侍。吉田中納言。爲經。た  
めうち。ためのりなど。さらぬ殿上人も侍しか  
ども。これこそとをりにみえし。花山院の大納  
言定雅は。少しさがりて。歌講せられし程にぞ参  
られたりし。月は曇り勝にて。いと口惜。この  
曉。みぐしけこのうせさせ給ひぬと聞えし程

きよし經俊申侍しかば。内侍たち月ながめて。  
何事も物をまつは久しきやうに覺ゆる。夜も  
すがらも詠め明してのみこそあれども。これ  
までも。公事と思へば心元なきなどいひて。辨  
内侍。

是も又待さしなれば秋のよの更ぬさきにさ月をみる哉  
御湯殿の上に。少將内侍候しに。女主して聞え  
たれば。返し。少將内侍。

心にもあらで今宵の月をみて更ぬさきにさ誰を待らん  
八月一日。中宮の御方よりまいりたりし御た  
きもの。よのつねならず匂ひうつくしう侍し  
かば。辨内侍。

けふはまた空焚物の名をかへて頼めば深き匂ひさぞなる  
院の御所の辨内侍。勾當の内侍の許へ。はぎの  
どの萩は咲たりやと尋ねられたるに。一枝お  
りて遣はすとて。勾當の内侍にかはりて。辨内  
侍。

なれば。よろづもの哀なり。御連歌などもあり  
き。またみるかげのなかるらんといふふると  
の。御口すさびに聞えしものあはれにて。辨  
内侍。

秋のよの浮雲はるゝ月はあれどまだみぬ影を誰忍ぶらん  
十六日は。こまひきなり。今宵は月とにはれ  
て。いと面白く。あきとももの辨。十五夜にはお  
それをいだき。すましたる月かな。内侍たちこ  
れにかとて。夜べの月の曇りたりしも。身のと  
がの様に憂へありくもおかしくて。辨内侍。

澄増る今宵の月のいかなれば半よりけにさやけかるらん  
引分の使は。公保の中將ときこえしが。俄に凶  
服に成て参らぬよし。聞せおはしまして。誰な  
らむと御尋ありしに。辨内侍。

雲井より此方彼方へ引分のつかひは誰ぞきりばらの駒  
月の明かりしよ。清涼殿の孫廂に入々あまた  
遊ぶ中へ。中宮大夫隆親。扇の妻を折たるに書



付て。

萬代もすむべき月の影ぞこはいかにか今宵契りなくらん少將内侍。

契ありてすむべき月の影までも空にぞしるき秋の萬代辨内侍。

萬代さちぎりなきてもあまり有月にこもなふ雲の上人権大納言は夜番に参りて。萩の戸にて御遊び侍しに。只今はなにの時ぞと御尋あれば。おきてゐの時と申給へど。夜のおとしいには。内侍もねなんとせしかば。あよりは更ぬらんとて。辨内侍。

只今はおきてぬぞこはいふめれど衣片しき誰もれなしん中宮の御方へ御使に参るとて。萩の戸のすいかるよりみれば。花も盛に面白きに。霧立渡り侍しかば。辨内侍。

よしに咲古えの萩のもとなればきり立渡り鷹ぞなくなる勾當の内侍の妻の局にて。よもすがらびは引

あかし給しを。按察三位殿の心のうち思ひやられて。いとこそ面白けれと仰せられしかば。辨内侍。

あまそよぎ袖にや露のかゝらん半はの月の影ぞ更行

九月十四日。殿の上表也。とどもはてし。夜更る程に参らせ給ひて。餘りに月の面白きに。女房たちさそひて。月み侍らむとて。南殿釣殿などの月御覽ず。かやうの月のよは。村上<sup>六十二</sup>一條院の御時は。若きかんだちめ殿上人など。今様うたひ。ど經あらそひなど侍けるに。まいりて遊ぶ人のなき。いとこそ口惜けれ。今宵の番の人は誰か候つると問せ給へば。万里小路大納言只今まで候つるものを。今しばしなど申出てくちあし。すけよしといふ六位召出て。月みるべきやうなどおしへさせ給も。いとあかし。曉方にもなりにしかば。御ちよくろへいらせ給ひしに。兵衛督どの。御名殘申さばやとあらまし

て。辨内侍。

いざこいひてさそはざりせば久方の雲の月を誰か詠めむ同じ月の比。万里小路大納言。按察のすけどの。中納言のすけ殿などさそひて。河よりあなたまで。夜もすがら遊びて歸り参りたりしに。按察三位殿聞せ給ひて。いと面白かりけるとかな。河を隔てたる戀といふ題にて歌よめと仰せられしかば。辨内侍。

袖ぬらす河よりをらすむ月の影にも人を戀や渡らん

秋の夜長くていと徒然なるに。御よるのしち。大納言殿。按察すけ殿。中納言のすけ殿。少將辨。歌をつぎて遊び侍しに。勾當の内侍殿はまじらむとて。妻の局にて琴ひかると聞て。按察のすけ殿恨みやらばやと侍しかば。辨内侍。

和歌の浦にうらむる波も有ものを松の嵐よ心してふけ

中宮大夫たかつむしといふ女主に。かくいはいやとおもふいかいとして。

思ひそむる心の色ぞまだみせぬよそめ許りに年はへぬれど女主にかはりて。辨内侍。

人しれぬよそめ許りはかひもなしみえぬ心の色をしらばや常の御所の御壺に。秋の草ども植られたるなかに。かしらけづらずといふ木の。ちいさくていたひけしたるを。いはのはざまに植られたるを。權大納言見給て。かしらけづらずとこそあかくさげなれときこえしを。いとあかしと人々仰られしかば。辨内侍。

亂れたるそのなげかりの黒髪につげの小櫛も如何さるべき月明きよ。同じ御局の菊。いと面白きを。左衛門督實藤。おりて参せられたる枝の残り。また折て参らせよと。仰せと有しかば。辨内侍。

月影に折けん人の名残さて結びなまめそ菊のした露

同じ頃。大宮大納言。万里小路の大納言。左衛門督。なべてならずうつくしう見ゆる菊どもを参らせて。御壺に植られたるを。いづれにて



もとに見えむ一枝。折てまいれと仰せとあれ  
ば。辨内侍。

いづれをか分てもおらむ色々の人の心も白菊の花

五節は十六日より始まる。月ごとにさえて面  
白し。丁だいのこゝろみ。ふたまたよりやをら見  
やりしかば。攝政殿あつし。内大臣殿あつし。大宮の  
大納言殿。松重のこりの人々はいともみえわ  
かず。どらの日。月いとあかきに。五節所へ行  
幸なりしに。攝政殿まいらせ給。左大臣殿御供  
にまいらせ給ひたりしが。御ぶむとていだけ  
れたりし櫛を。御懐へいるよににて。さなが  
ら御袖の下より落させ給ひし御ことごら。い  
ひしらず見え給ひしかば。辨内侍。

霜氷る露の玉にもあらなくに袖にたまらぬ夜半のさし櫛

御覽は。殿いだけさせ給ふ。わらはもなべてなら  
ずみえ侍りき。一人はふるきはしたものの。ふく  
らかにうつくし。いま一人はいづくのきみと

かや。ほそらかに思ひいれたるけしき。とり  
くなり。人々ともてなして。かさみの袖な  
どつくりひ侍るもめとまりて。辨内侍。

あつみみる乙女の袖の月影に心やさまる雲の上人

節會は十八日なれば。月いと明かりしに。召に  
すゝみて侍し御階の月忘れがたきよし。中納  
言のすけ殿に申いで。辨内侍のかみあけの  
きぬ。雪のしたの紅梅。

雪のした梅の匂ひと袖さえてすゝむ御階に月をみし哉

權中納言五節いたさるゝと聞て。櫛こひたて  
まつるとて。辨内侍。

思ひやれ誰かはみせん九重や豊の明のよほのをき櫛

返し。大納言。

たれこめて豊の明もしらざりき君こそみせよほのさし櫛

いたはるとおはしけるともしらすで。申たりけ  
るも。げに心づきなくて。辨内侍。

たれこめ一頃ともしらぬ忘りに豊の明の月は更にき

臨時の祭の御馬御覽のよ。大宮大納言まいら  
せ給て。御所にをかれたる風流に。九十くもど  
いふ心したるたなをみたまひて。あれをかく  
し題に人の歌よみたりける。なにはうくしう  
くもえせしとかやなどいひて笑ひ給。いざ折  
句に歌よまむと聞えさすれば。程なくものに  
書て。御丁のもとに差置たれば。いとこそはや  
けれ。かへるはなにかちとかやうのやうに。か  
ゝるこはきとこそなけれとて。大納言殿。

くるよは篠のは草の上葉まで碎くる露のもる時雨哉

少將内侍。

雲の上やしるきみ垣の内にのみくるよすがらもるや殿守

辨内侍。

吳竹の霜をく夜半の上風に曇らぬ月のもるをみる哉

叙位に。瀧口のすぐるをきけば。こひと思とて  
など。様々名残おしむと聞程に。たちかへり。  
うれしやみつとはやす。いつしかいかにと思

へば。ながやす一臈になりたる歡びやときく  
も。うつりかはるほどなさおかしくて。辨内  
侍。

しほりつる袖の名残を引かへて包むあまりになる瀧の水

廿四日。記録所の行幸なり。万里小路大納言。  
左衛門督。されふぢ。右衛門督。みちなり。右兵衛督。  
ありすけ。頭中將。まさ家。頭辨あきさも。などまいり  
て。例の様々面白き御遊とも侍しに。いつれか  
ことにおもしろく覺ゆると。人々仰せられし  
に。少將内侍。左衛門督の琴の音猶すぐれてき  
こゆるよし申て。

柏木のほもりさいへる神もきけそのの音に心ひかすば

とて。辨内侍。

琴の音に心はひかす柏木のはにふく風の聲を身にしむ

權大納言は遅く參給ひて。御夜になりてのち。  
御格子のどにたゝみて。さすや岡邊の松の



はのど。返々ながめ給ふも。耳にとまりて。聞人もやあらむと覺えて。辨内侍。

夕月夜さしてしるべき方ぞなきつれなき松に染る心を後夜にうつる鐘のこゑを聞ゆとて還御なりぬ。人々みな出給ふに。ちかき火ありとて。少々はさふらひ給。權大納言女房たちなどもなひて。南殿のかたざまにて遊び侍しに。左衛門の陣のはしに。霜の白くさえたりし。寒くつめたさ限なかりしも面白くて。辨内侍。

をき迷ふ霜もさながらさゆる夜に誰けちかぬる炎成らん。寶治二年母の忌にて里に侍しに。石清水の臨時の祭廿日思ひやりて。辨内侍。

目影さす春のさざしの色々もをりしらぬ身の程ぞかなしき同じ比。夏のひとへをたまはせたれば。辨内侍。

かゝる身は時しもわかぬ衣手にけふこそ夏の立としりぬれ十二月十九日。佛名によ參りたりしに。月いと

訝て面白し。職事ども例の鬼の間にて。ぶむばい。左右の頭中將もさむやす。まいらす。經俊。宗雅。光國など。せちかゝりしたひにしるす。ぢんごの祭は宗雅などぞきこえし。昔は小袖給といふと。こよひ有けるなど語り。上卿皇后宮權大夫。もろつぐ。きゝもしらぬ佛の御名。ともになのりつゞくる聲々。まことに滅罪の益もあるらむと覺えて。辨内侍。

まことに誰も佛の数なれやなのり續くる雲の上人

寶治三年正月一日。寅時。四方拜也。清涼殿へ出させ給。御どもに按察三位殿。中納言佐殿。勾當内侍殿。奉行宗雅。春の初の事がらまことに目出度て。辨内侍。

今日にも時をば春の始きて祈なれたる方も畏こし

正月十五日。月いと面白きに。中納言のすけ殿人々さそひて。南殿の月見に御座ます。月華門より出て。なにとなくあくがれてあそぶ程

に。油の小路表の門の方へ。直衣姿なる人の參る。いとふけにたるに。誰ならむ。皇后宮大夫の參るにやなどいひて。妻へいりてみれば。權大納言殿也。いとめづらしくて。兵衛督どの。臺盤所にてあひしらひ給ふ程に。まよやけふは人うつ日ぞかし。いかゞしてたばかるべきなどいひて。出給はむ道にて。いかにもうつべし。いづかたよりか出給はんをしらねば。あしこころに人をたゝせむとて。ましみつるいづるひる。こめい<sup>明池</sup>ちの障子のもと。御湯殿のなげしのしもの一間に。勾當内侍どの。みのどの。切簾のもとに。中納言のすけ。兵衛督殿。年中行事の障子のかくれに。少將辨など窺ひしかども。曉まで出給はず。いとつれなく覺えて。すけやすの少將して。なにとなきやうにてみすれば。殿上のご庭の月ながめて。たち給へるといふ。兵衛督殿日の御ざの火どもけちて。櫛形

よりのぞけば。殿上のかべにうしろよういしてゐたまへり。かくしてしけむもねたし。なにどまれ。つえにかきつけて。櫛形より差出さばやなど。さまゝあらますほどに。夜も明方に成ぬ。いかにもかなはず。つひに油小路の門の方よりいで給ぬと聞も。限なくねたくて。白き薄様にかきて。つえさきにはさみて。追付てつかはしける。少將内侍。

うち詫ぬ心くらべの杖なれば月みて明す名こそ惜けれ返事。權大納言。

うち詫る心もしらで有明の月のたよりに出にけり哉

かくて次の日の暮ほどに。彼より。表書には。御あしつめたの御かたへとぞかゝれたる。御手水のまにて。兵衛督殿勾當内侍殿などあけてみれば。

うち詫てれにける夜半の鐘の音に驚かされて月や詠めし待かれし身は夏虫の燈けちいたづらとに物思ひけん御はぎの太き細きもたちそひて月に忘れぬ夜半の面影



返事。辨内侍。

うちはへてぬるさは何ぞ有明の月を見ずして心ならずば  
いさしらすたれ夏虫の燈けち竹のは風や吹もしつらん  
忘れずよ月の面影立そひてその御はぎもくるしかりけむ  
里に。春の初とて。とく咲紅梅ありと聞せおは  
しまして。折せてまいらせよと仰事ありしに。  
尋につかはしたれば。盛りなる枝に結付て。寂  
西。

雲井までいさもかしこく匂ふ垣根隠れの宿の梅が枝  
その花の枝を瓶にさして。萩の戸にをかれて。  
面々にかへされたるを。やがてぬし〜のか  
きて結び付ける。太政大臣。實氏。

雲おまで匂ひきつれば梅花垣根がくれも名のみなり見  
四條大納言。たつら。

垣れより雲おに匂ふ嬉しさを色に出ても花ぞみせける  
冷泉大納言。きんすけ。

咲そむる垣根隠れの梅の佐君がやちよのかさしにぞおる  
万里小路大納言。きんもと。

も。いまだ御夜にもならせおはしませず。御手  
習などありて。面白く思はむ詩かきて参らせ  
よと仰とあれば。蘆葭洲裏孤舟夢とかきて。そ  
ばに。辨内侍。

身一つの憂へや波に沈むらん蘆の下れの夢もはかな  
などかきて。秋の詩は。いづれも面白くてこそ  
ど。さまざま申程候はむに。公忠の中將候が。  
誠にさはぎたる景色にて。せうしの候。皇后宮  
の御方に火のといふ。浅猿ともおろかなり。あ  
まりうつゝともなくて。柳のうすぎぬ裏山吹  
のからぎぬきたりしをぬぎて。袴ばかりにて  
局へすべりて。荒らかにたゝきて。いそぎ竿な  
る梅重の衣に。ゑびぞめのからきぬ重ねて。参  
りたれば。勾当内侍殿やがてよるのおど〜へ  
いりて。劔璽取出しまいらす。油の小路の門の  
かたへゆく。御所も。二位殿抱き参らせて。中  
納言少將の内侍は大原野の使に立て。心ちわ

君が代に垣根隠れもあははれてあまれく匂ふ梅の初花  
權大納言。されを

雲井まで垣根の梅は匂ひけりいさも畏き春の光に  
この敷にかへすべきよし仰せとあれば。辨内  
侍。

雲おにてみれば色こそ増りけれ植し垣れの宿の梅がえ  
大納言二位殿がの女よりまいりたりける薄様  
の小草紙を。權大納言給はりて。面白き戀の歌  
どもを。なべてならず書て。参らせられたるを  
みて。少將内侍。

戀すてふ名を流したる水莖の跡をみつゝも袖濡せまや  
辨内侍。

なを流すその水莖の跡にしも戀てふをみぬぞ悲しき  
二月一日。よ更る程。大盤所より参りて。鬼の間  
の布障子かけんと思ひしかども。燈火のかけ  
かすかにて。常よりはいかにやらむ覺えて。朝  
餉より常御所へまいりたれば。宮内卿佐殿。兵  
衛督殿。勾当の内侍どのなど候はせ給ふ。御所

びしくて局にふしたりけるが。荒く叩く音に  
驚きて。火とききて。いそぎ御所へ参りたりけ  
れば。人もおはしませず。煙りは満たり。何方  
へ行幸もなりつらんと。浅間敷くて。まよひあ  
りく程に。夜の御殿の一間にやといふ人有。ば  
けものやと。おそろしながらゆきてみれば。  
なにやらむのみ御ぞに。うす御ぞ重ねて。さし  
ものさはぎの中にも。さまざまもてかくして。  
御くしのかゝり。御ひたひのかみ。御たけまで  
かゝりたり。せんじどの御たち持て。これはい  
づくへか具し参らすべき。按察三位どのに申  
せと仰らるれども。いづくともこれもしり候  
はぬとて。油の小路表の妻の方へ出たれば。  
ひとしと人々おはします。かくと申せば。兵衛督  
殿。みちびき参らせんとておはしませぬ。一番  
に權大納言殿の車参りたるに。御所。皇后宮。  
中納言のすけ殿。宮内卿のすけ殿のらせ給。門



のどにてぞ御輿には召移りける。皇后宮。冷泉大納言殿のかたをふまへて。めしうつるべきよし侍りけれども。なにとなきさまにて。やす／＼とそ召移りける。權大納言。万里小路冷泉大納言など。そのまぎれにもゆゝしげに。いそめきあはれけるに。中納言のすけ殿よく御かいしやくして。したすだれにてとかくまぎらはしてぞ。御輿にはめしける。夜めにも。御ことがら。たゞの人にはみえさせ給はざりしとぞ。後に語り給ひし。けんじは二位殿のめしたる御車に。勾當辨内侍もちまいらせて乗りたりしを。御輿にもおはしませず。とり出しまいらせたりけるにやと。なにのなかにも。さうとうにてありけるに。もちていでたまひつる人おはしましつといひけるとて。たれかみつるといはれけるに。兵衛督殿。一定勾當辨とり出參らせつるとありければ。勾當辨めしたる御

車はいづれぞ／＼と。馬を早めて。走りちがひ／＼尋ねられし。なに事ならむと思へば。けむじはおはしますか／＼とぞ。あつたきて。聲のかはるほど。尋ねおはしますといふに。なを一定にやと問れし。げにもとはりなり。げんしやうはのりときぞとり出しまいらせける。大納言殿だち移馬にのりながら。あるはゆみもちやあひなどして。門に立れし。夢のこゝちしていと淺まし。さりながら。延喜天曆の賢き御代にも。あまたたび侍けるなど。仰せらるゝ人々もありしかば。辨内侍。  
やけぬとも又こそたてめ宮柱よしや烟の跡も歎かト  
富小路殿内裏になりて。廣御所の妻の紅梅盛なりし比。月の朧なる夜。たれとはなくて。白き薄様に書て結び附られたりし。  
色もかも重ねて匂へ梅の花九重なる宿のしるしに  
この御返事は。院の御所へ申べしと仰られし

かば。辨内侍。

色も香もさこそ重ねて匂ふらめ九重なる宿の梅がえ  
勾當の内侍どの、局は。女院の御所なりけるほど。宰相どのと申人の局にてありける。その人の許より。梅や盛なるらんと尋ねたる返事に。勾當内侍にかはりて。辨内侍。

色もかもなれし人をや忍ぶ覽みせばや梅の花の盛を返事。宰相殿にかはりて。權大納言。

ながめばやなれし梅の花のかも今九重に色はそふ覽  
この歌ども。太政大臣殿聞せ給て。さしもゆゝしき色もかも御秀歌に通ひて。色もかもとあるわろし。又御返事も。九重になるといみじくつゞけられたるに。いま九重とよみたる。ただしかるべからず。ともにおつどなりと仰せらるゝときし。面目なさ。おかしくて。辨内侍。

匂ひなき色を重ねて梅の花つらくも人に咎められぬる

二十七日は。七社のほうへいなり。やがて其日は七らしいの御はらへなれば。内侍たち大盤所にて。きせぎぬのさたして。花も盛におかしきを。つく／＼ながめるたり。御所にもなりて。御覽せさせおはします。冷泉大納言御装束にまいらせたるも。やがて御供に候て。としは御鞆あるべきよし申たまふ。唐橋の大納言まさち。上卿に參られたる。もゝとせに一歳たらぬ程にやとみえて。雪と霜とを戴けるかみげに。黒き筋なきもいとをし。花のこかげにたゝれたるをみて。辨内侍。

君が代に花をしみけるしるしには頭の雪も厭はざりけり  
三日の御鳥あはせに。今年に女房の合せらるべしときし。かば。若き女房たち。心つくし。てよき鳥ども尋られしに。宮内卿のすけ殿は。爲教の中將が播磨といふ鳥を出さんなどぞありし。万里小路大納言の參らせられたるあ



かどりの。いしどさかあるかけ。いろもうつくしきをたまはりて。あき局にほこらししてをきたるを。もりありといふ六位が。そのとりきどまいらせといふ。かまへて鳥などに合せらるまむき山。よくくひひてまいらせつ。とばかり有りて。片目はつぶれ。とさかよりちたり。お抜けなどして。見忘るほどになりてかへりたり。おほかた思ふばかりなし。今はゆゑしき鳥ありとも。なに、かはせん。賜りの鳥なれば。きくもいみしらむとこそ思ひしになど。返々心うくて。辨内侍。

我ぞ先ねになつばかり覺えけるゆふ付鳥のなれる姿に  
三日。御鳥合なり。御所も廣御所へ出させおはします。冷泉大納言。万里の小路大納言。左衛門督。三條中納言。公親。頭中將。公保。伊與中將。公忠。すけやすの中將。藏人は殘なし。はつゆきなるあかこくろなどいふ鳥ども。かねてより

ふせどにつきて。各々預りて。丁子じや香すりつけ。たきものなどして。いづれかにほひうつくしきとぞ争ひし。みすの内より出されしかば。万里小路の大納言たまはりて合せられし。ゆゑしかりし君なり。ひよくより御所に御手ならさせおはしまして。飼たてられしいみむさばかりにてこそ侍れ。御とりがらはあやしげなれば。かたせんとて。それよりをとりたる鳥どもに合せられしもおかし。公忠公保がとり合せしあり。伊與中將がとり。そらおどりするどて人々笑ひしに。冷泉大納言。ひさかたのそらおどりこそおかしけれとのたまへば。公忠さこそといひたりしおかしくて。辨内侍。  
雲のさばなれさへしるや久方の空おどりする鳥にも有哉  
廿日は。臨時の祭の御馬御覽なり。さきくはたいめふが引渡したるばかりにて有しに。御隨身かねみねに。あけさせて御覽せし。いと面

白し。公卿は万里小路の大納言を候給し。けづけ中將すゑぞね。庭の月影いと面白くて。辨内侍。

なにしおふ月げの駒の影までも雲おほさぞきみえ渡る哉  
花盛り。ことに面白かりしに。ためうぢの中將奉行にて。御鞠あり。花山院大納言。冷泉大納言。万里小路大納言。左衛門督。右衛門督。すけひら。きむたい。ためうぢ。ためり。たかゆき。日暮かゝる程。ことに面白く侍しかば。辨内侍。

花の上にしはしまるきみゆれども。傳ふ枝に散櫻かな  
少將内侍。  
思ひ餘り心にかゝる夕暮の花の名残も有きこそきけ  
かずもあがりて。木ずゑのあなたへまはるほど。左衛門督のあしも早くみえ侍しを。兵衛督殿。まりはいしいものかな。あれほど左衛門督をはしするとよとありしを。大納言。我もさみ

つるを。いみじくもめいくを聞えさする物かな。めのどにてあるに。この返りとあらばやと侍りしかば。辨内侍。

散はなをあまりや風の吹つらん春の心ほのこかなれども  
三月廿八日。改元也。公卿八人。上卿花山院大納言。さだまさ。經光の宰相などぞきこえし。奏まつほど。ふくるまで大盤所に。内侍たちなにとなき物語して。往古の延暦延喜は廿年にもあまりけるに。かくほどなくかはる。名残惜きやうにこそなといひて。辨内侍。

程もなく變るもつらし古へはたさせあまる年も有世に  
四月七日。松尾の使にたつ。上卿吉田中納言。爲經。辨。經俊。桂川を渡りしに。みなかみの方に。やなどいふものに。水のたぎりて。落る音のきこえ侍しかば。辨内侍。  
川のせに築うちわたす水浪のあまりし音の碎け行哉  
十七日。御方違の行幸あり。今出川殿へなる。



女院もやがて渡らせおはします程なり。左衛門督設の御所に候給。御けんのすけまさいゑの宰相の中將。兩貫首も還御まで候。月ごとに面白くて。誰も夜もすがらねでぞながめし。冷泉大納言。万里小路大納言。左衛門督と。かゝる月こそなければとて。殊にめで給。幣にうつりたる有明かたの影。譬へむかたなく面白きに。折しも郭公の鳴侍しかば。辨内侍。

歸るさのかれまつ程の有明につれなからとなく郭公

祭は廿日なれば。警固の召仰せ十八日なり。上卿權中納言。冬忠。賀茂より葵とも参りしを。大盤所にて。人々草子にをさんどて。小葵えりて候よしほど。左頭中將。もさしも。とに色はなやかなる直衣。けいこの姿いとうつくしうて参りたり。同じく右頭中將きむやす。もまいりたり。これもはなやかに。あらぬすぢにほこりたるけしき。とりくくにみゆ。公忠もほそたちゆる

さるとぞきし。けいこの姿ども面白くて。辨内侍。

千はやふる祭の頃に成ねれば近きまもりも心してけり  
攝政殿参らせ給て。廿一日の夜の月いと心もどなくまたせ給ほど。人々に出たるやと問せ給へば。様々にやうをかへて中に。やまのこなたへは出ながら。光のいまだあらはれぬと申入侍しを。この申やう念ありて。さもありなど人々も仰せられしかば。辨内侍。

山のはにせめても月の遅きよは此方と思ふも猶ぞまたる  
最勝講は。廿二日より始まりて。廿六日結願也。此御所にては。これが始めなれば。珍らかに。行香のほど面白し。鬼の間を上にて。御手水の間。大盤所はうしろにす。堀川内大臣どもみ。冷泉大納言。權大納言。新大納言。左衛門督。三條中納言。ふそくさだひら。きんたい。ども遅く始まりて。有明の月出る程に。人々出

給し。(廿三日)その頃聖護院僧正正觀音法行はる。廣御所。廿七日結願なるべきを。その上行幸にて侍しかば。曉の御ときを引上て。夕暮に行はれし。れいのこゑも殊更心すみて貴かりしかば。辨内侍。

曉の鐘よりも猶夕暮のれいにれいの聲もすみけり

廿日。大盤所のごいしの参りたるを。御覽せさせおはしまして。せちゑのにつくりたるわろし。あかつきにこそ作るべけれど返さる。天上のごいしは。いにしへ寛平法皇と業平朝臣と御すまひありけるに當りて。折たりけるを先例にて。いつもその折たる姿に作られ侍と。傳へさへ聞もいと面白くなど申いで。辨内侍。

ふりにける昔の跡を其まゝに變らすみるや名残なるらん

六月廿八日より。ことなる御祈ども侍しに。醍醐の座主。實賢。普賢延命法。皇后宮御かたの日。

御座をしつらひて行はる。冷泉大納言殿御沙汰。七佛薬師廣御所。太政大臣殿御沙汰。秋になりて。風いと涼しく吹て。皇后宮の御かたの御局に。やうくく虫の聲ほの聞えて。面白く侍しかば。辨内侍。

君へむ千歳を祈る法の聲こなたかなたに松虫のなく

神なりていとおそろしかりしに。御所は朝餉に渡らせおはします。六位のつるうちめすほど。瀧口のくやくか弓召して。冷泉大納言殿弦打し給。かみのなる音に。いみじくてうしのあひてきこゆる。只今は壹越調ならむと。すけやすに笛吹ならさせて聞せ給へば。まことにその調子なりけりとて。勾當の内侍殿も興し給。いと面白くて。辨内侍。

物の音をひきも鳴さで梓弓をして調べをいかにしらん

八月十五夜。院の御所にて御連歌ありしに。夜ふけゆくまゝに身にしみかへりて。面白き句



ども有し折しも。かねの音。こゝもとにきこえしかば。御祈始まりたるにやとさくほど。權大納言御簾のもとにさしよりて。後夜るときこそ始まれ。とくくつげよと仰られしこそおかしかりしか。鐘の音も心澄て聞えしかば。連歌をばさしをきて。少將内侍。

秋のよの月にさえたる鐘の音にやかも時の移ぬる哉  
辨内侍。

時うつる鐘のをさぞ聞からに月も半の影や更ぬる  
九月八日。万里の小路大納言。廣御所に夜はむにしにゆく音して。さふらひ給しに。菊につけて。少將内侍。

菊の上におきぬる露も有ものを誰徒らにれてあかず覽  
返事。大納言。

九重の雲のうへふし袖さえてまごろむ程の時のまもなし  
雲のうへふし。いとやさしくて。辨内侍。  
まごろまの程をさくにご思ひし露を片しく雲の上人

大納言殿三位せさせ給たりし歡び申とて。少將内侍。

秋風の身にしむばかり嬉しきやなを人しれぬ心成らん  
辨内侍。

かひ有て今こそ三の位山まよはぬ道は猶ぞうれしき  
御返し。大納言三位殿。

身にしみてうれしき物さ今ぞしるただ大方の秋の初風  
この御所より常盤井殿は近ければ。月のころは夜をへて。万里小路の大納言殿。女房たちさそひて。終夜遊び侍しに。水に移りたる月いと面白く見えしかば。少將内侍。

やがて我心ぞ移るさきはぬの水に宿れる月なられ共  
これを聞て。辨内侍。

折節を空にしりける月なれば猶常盤井の影ぞさやけき  
かやうに遊び行き侍し程に。女院の御方の女房たち。内裏の月見にとて。あまた参られたりけるが。尋ねあはせ給けれども。いざ。いづく

へやらんときこえければ。参りて侍つれども。本意なくてこそ侍れといひ置れたりけるを。返り参りて。かくと聞て。女院の御かたのびぜん殿といふ人のもとへ。少將内侍。  
あくがる心くらへもある物をな尋れみよ秋のよの月返事。

またもみむのぞけき御代の秋の月近き雲ぬに心へだつな  
此御返事。いと面白くて。辨内侍。

尋ねむ心のへだてくまもあらすちかき雲井の秋のよの月

辨内侍日記下

今年五節は。この御所はせばくて。冷泉どのへ十二日行幸ありて。十八日より始りし。月は隈なくていとあもしろく。兩貫首もごいももことなる人々なれば。きさいま待イちの亂舞なども。ことにはへありてぞみえし。女院の御かたのえむすい。寅日なり。四條大納言女房達さそひて。

御帳の後ろよりはつかにのぞきて侍しこそ。いと面白かりしか。閑院大納言たちはさらなり。いと興ありて侍しに。内大臣殿二條殿いかにはやしたてまつれども。うるはしくもたち給はざりしに。右兵衛督ありすけ。まらさきこそしらはへのそくなれど。拍子をあげて囃たりしかば。さし扇してたち給ひたりし。御ことごらとによくみえ給ひしかば。辨内侍。

白鷺はいかなる色のためしにて立舞袖のかけなびくらん  
卯日は童御覽なり。今年に常の年にも似ず。御覽の童皆登り侍し。いとめづらかに。辨内侍。

舌へのならひは聞ず九重やあまた乙女のかすをみる哉  
權大納言。木のさきのゆへおはしたりしに。雪ふかくつもりたる頃。兵衛督の殿のもとへ。内侍たちにつたへよとて。

九重に降積るらん白雪を深きみやまに思ひこそやれ  
返し。少將内侍。



九重の雪の中にも旅人のふみみる道を思ひこそやれ  
辨内侍。

九重になを重れても思はずふみくる程の山の白雪

十二月十八日月隈なきよ。頭の中將もさしも。夜  
半に参りて。鬼のまに候ほどに。装束のをどの  
する。誰ならんみてまいれと。すけやすの中將  
に仰せとあれば。還りまいりて。中將。

鬼のまに人音のする誰ならん弓さるかたの頭の中將

左の心もことになむありて。とりなしたりな  
ど。按察三位殿も仰せられき。やがていでぬる  
由きして。辨内侍。

やさいひて引やまめし梓弓いる方しらぬ頭の中將

十九日。例の佛名なり。<sup>(宣花門)</sup>皇后宮御方も今宵なる  
べしと聞えしほどに。とにいそがる。月はいと  
面白きに。いでゐの殿上人のおり松するも。こ  
の御所にては。大盤所もわたどのちかくて。た  
いこしもとにそみゆる。定平。伊頼。伊長。基政

などぞみえし。女主が。めづらしく袴の裾短に  
きなして。ありまつするを。定平はやしあげた  
るもおかし。辨内侍。

いこせめてさゆる霜夜の慰めにしは折くぶる雲の上人

更て後。行香にたつ人々。四條大納言。<sup>實任</sup>左宰相  
中將。<sup>藤原</sup>皇后宮權大夫。土御門宰相中將。<sup>藤原</sup>左大辨  
宰相。けそくさだひら。これより建長二年正月  
三日殿上のえんすいなり。此度は。ちもくに貫  
首もあがるべしと聞えしかば。四條大納言と  
に忠つくすべきよし。奉行し給ふ。御所もこし  
とみより御覽ず。さねたか。つねたか。これも  
どなど聲ある人々。てを盡して囃されしかば。  
兩貫首十度ばかり舞たりし。興ありてみえ侍  
しかば。辨内侍。

亂れつうたふちくはの松の色に千代の影そふけふの盃

やがて。皇后宮御方へ参る。みちく思の津に  
舟のよれかしと。囃し〜まいりし。こまにて

み侍し。いと面白くて。辨内侍。

暫しまて立よる波にもこはむ思ひのつにぞ舟よばふなる

二月五日。春日使に立たりしに。上卿皇后宮權  
太夫。もろつぐ。くれほどになしはらに著たれば。  
夕づくよほのかに面白く侍しほど。辨内侍。

梨原のそのなは秋になりならずれてやは夜半の月を見べき

さくやといふさうしをぐしたりしを。くやく  
ためなば。笏とりてもてならして。今は春べと咲  
さだむら。笏とりてもてならして。今は春べと咲  
や此花と。したひを取て囃したりし。誠に己が  
春に逢たる心ちやすらむと。おかしくて。辨内  
侍。

春をみる我身一つになにおひて咲やま人にいはれぬる哉

佛法僧となくどり。太政大臣殿よりまいりた  
るを。常の御所の御えむにをかれたりしが。雨  
などの降日はことになく。げにぞ名もさやか  
にきこゆ。姿はひえどりのやうにて。いますこ  
し大きなり。辨内侍。

こにかくに賢き君が御代なれば三の寶の鳥もなく也

局は二のたいの妻なれば。夜ふけてすべるお  
りは。必ず京極おもての大柳のこかげより。  
月のさやかにもりたるが。さし向ひて出たる  
やうにみゆる。いと面白くて。少將内侍。

青柳の糸はよるこも見えぬかな木かけ曇らぬ月の光に

同じ局なれば。ともになすへり侍しが。まことに  
月の影おもしろかりしかば。辨内侍。

青柳の糸には影も亂れれば同くすぢにぞ月はさやけき

三月十六日。七瀬の御被なり。使々まつほど。  
大盤所の高欄の許へたちいで。閑院殿には。花  
ばかりやまさりたるらむなど。御さたありし  
かば。少將内侍。

櫻花やへに咲こも九重さ思ひなすにぞ色増りける

又辨内侍。

なにも忍ぶ昔の雲ぬには花こそ及ぶ匂ひなりけれ

三月廿九日。御鞠なり。冷泉大納言。公相。万里



小路大納言。公基。權大納言。爲氏。左衛門督。實藤。右衛門督。通成。源宰相。有資。頭中將。爲氏。爲教。資平。公忠。時經。花は散りすぎこずゑなかくおもしろきに。人々の用意とがら。とりくみにぞみえし。暮かゝるほど。院の御所より御隨身頼峯御使にて。御葉松の枝にぞ。御鞠はつけられたる。頭中將とりてまいらす。しろき薄様結びつけられたり。あけて御覽せらるれば。吹風もおさまりにける君が代の千年の数は今ぞ数ふる御返し。辨内侍。

限りなきちよの餘りのあり数はけふ数ふとも盡すぞ思御鞠はてし。花のかげに立並び給へる。御名どりどもなどさまよく申いてい。少將内侍。数々に餘りなるまで戀しきはいかに詠めし夕さかしの返し。辨内侍。

風に匂ふ余りは花の色に出て數限りなき夕さぞみし其後又御鞠あるべしとて。まづ万里小路大納

言殿へ申されて。やがて奉行せらるべき由。仰せとありしに。風のけどころせくて。かなふまじき由申されたりし程に。常盤井にて。しのびて鞠遊侍よし聞せおはしまして。にくし。なにとまれ言やれど。仰とありしかば。少將内侍。春風のつらさをかこつ僞の身に餘りぬる程ぞしらるかへし。大納言殿。春風のつらさをかこつ心より身の僞になるが悲しきををいつはりならずと聞ゆるこそなど。御さた有しかば。辨内侍。

花の爲あまりぞ猶もつらからむ僞にやは風の吹べき卯月の八日は灌佛なりしに。室町の大納言さねふぢ。賜はせたる布施に。紅うちの色こゝに花やかなるに。鶯かへで青葉なるをきて。うつの山の心しげま。とにうつくしうて。かねのうちえだにつけたり。人々のは。殿上へ出されて後。遅く参らせたりしを。大盤所より職事にた

ばんに。その人のとて出さるべきよし。按察三位殿。兵衛督殿仰せられしこそ。とに用意あるべくやと覺えて。辨内侍。奉行。光國。

傳へきく鶯もかへでも若葉にてまだうつろはぬうつの山道の祭の女使に。中納言のすけ殿たち給しに。撫子のきぬ。すこし色薄く侍しを贈るとて。辨内侍。

くらべみるこゝには色の薄ければ唐撫子にいかでそむべき六月十一日は。しんこんむきの祭なり。上卿土御門中納言。通行。辨。顯雅。内侍とうよりたちてのち。辨上卿ははやたせ給。内侍とくと申侍ければ。少將内侍。

遅しとは誰をいふらん君をこそ待らんと思ふ時も過ぬれ歸りまいりて侍しに。少將内侍かくと語り侍しかば。上卿よりとくたちて。我こそ侍しかなどかたりて。辨内侍。

いつもさぞ我を待とは云しかまたれと物をさふる迄

權大納言。黒戸のばむなどもかきがちにて。まどをになり給しを。こぞの七月星合のほどに。参り給たりしなど申出て。少將内侍。雲をばよそにのみして天の川遠き渡りにはや成にけり返し。辨内侍。

雲井にて遠しとはみし天川人の心や渡りなるらん七月十三日。閑院殿のと始の日。事の奏辨つれと。参られたり。なにとなく心もとなき心ちして。辨内侍。

百敷の大宮造りけふよりやかれて其の日と定めをくらん八月十五夜。例の御會也。雨降ていと口惜し。事ども果て。妻戸あけさせ給ひて。御覽せられしかども。月の曇ざまいと口惜。なごりに阿彌陀佛連歌たゞ三人せむと仰事あり。いひすてならんこそ念なけれ。少將覺えよとぞ仰せごどありし。

名残をばいかにせよとて歸らむ 御所



もしやと待む秋の夜の月

少將

あかなくに廻りあふふもありやさて

御所

みちうきほごにかへる小車

辨

類ひなきわが戀草をつみいれて

御所

つみあまるは袖の白露

少將

夜もあけはなれにししかば。残りはまだの御連歌にしつかんとて。名残多くてぞかへりまいりにし。此折々の御連歌を。大納言三位殿聞せ給て。この戀くさの御連歌思ひいてなるべし。その山の歌よみて。家の集などにかゝるべしと仰られしかば。辨内侍。

思ひ出のものはさなる草ならば七車にも我ぞつむべき十六日はこむまびき也。上卿万里小路大納言宰相。まさ家。引分の使もとまさ。こといもはてゝ。大納言殿局の妻にかきて。公忠して。

君が代につかへて今宵みつる哉よそに聞こし望月の駒返し。少將内侍。

君が代につかへてし身は望月の駒もちとせのためしにや引

ことこのやうとにやさしくて。同じく返し。辨内侍。

今もさよふの面影かはらめや秋のこよひの望月の駒

今出川殿へ行幸ならんとて。夜雨ふりげに侍し。どうたいのくひを。七人していはせられ侍し。はてにゆふ人は。これくく日のことまじうことにて有しを。いつも少將内侍其役勤むる人にて侍しが。里へ出たりし代官にまふべきよし。人々仰せられしに。あまりに有るべくも覺えで。局にかくれみて侍しかば。いよといふ人舞けるとぞ。辨内侍。

楫をさるその舟人にあらぬみのあすのひよりを如何祈らん御神事のほど。御人少なにて。いと御つれくくなりしに。おもてかたして。人々をさせと仰事有しかば。袴を胸まできて。濃き單をかづきて。大盤所の口に立ちたれば。大番の者ども。さばぎて弓など取直して。たちめぐり侍しかば。か

へりて。餘りにおそろしくて。遣水に落入りて侍しを。おもたる鬼かなとて。人々笑はせ給。次の日。里より慎べき事ありとて。物忌をたびたりし。おやのまもり哀れにて。辨内侍。

梓弓引たがへたる命こそそへける親のまもりなりけれ

節會臨時祭の次第など。御覽せさせおはしましを。そのまねを女房たちにせさせて御覽せ侍るらむとて。興せさせ給て。しやくども作らせてまいらせ給。頭中將。爲氏。節會の次第など書て參らす。人数は大納言三位殿。太政入道。按察のすけ殿。大納言のすけ殿。中納言のすけ殿。實家卿女。宮内卿殿。兵衛督殿。勾當の内侍殿。少將いよの内侍。しやく共に。みな名を書て持侍し。中納言のすけ殿。權大納言になりて。節會の次内辨催されて。したうつをえはかず。そう

らうとて故障申て。局におはせしに。蘆のはに書付て。局のみすにさす。辨内侍。

つの國蘆の下根のいかなれば波にしほれて亂れがちなる

大納言三位殿は。御しちらいのたびに。これは家のやうくと仰せらるゝを。中納言のすけ殿。いつもかく聞ゆれば心悪きやうに侍しが。まさしきいへのにきみざらむには。頼むまじき由聞ゆるも。とほりと覺ゆ。少將内侍は三條大納言になりて。常にしちらひがちにて。小朝拜にも。しやくをききて小拜などせられ侍りしを。兵衛督殿。ぬしにかたられて侍ければ。さしも失禮もせぬと思ふに。たへがたきことかなどいはれけるぞをかしき。伊よの内侍は。いつも臨時の祭には。人長になりて。みづからわをつくりて。それをもちてまはる。かほふるべし。あまりに此役の勤たくもなきとて。詫られしも。まことに覺えてをかし。辨は行幸



の年にうそをふく役を勤め侍し。又これも人長にはをどらず覺え侍き。冷泉大納言殿夜番にまいりて。此御遊に交りて。うそをふく役つとめさせ給たりしこそ。いとくうれしかりしか。按察すけ殿は。いかにも各々の中にては。いだしうたも亂舞も。てをつくし侍るべし。ことなる人々御参りあらむには。かなふまじきよし。かねて能々申させ給て。とにみだれて勤給き。近習の人々。御所へ御参りあるは皆まじはり給。万里小路大納言などは。長押のしもの一間より袖さし出して。かうかうなど。よくまはせ給もおかし。又五節のまねに。宮内卿のすけ殿。出し歌せらるべきにて侍しおりしも。左衛門督まいり給たりしに。只今はいかにもかなふまじげにて。大方聲もいだし給はぬを。按察三位どの。是ばかりはとほりにこそと申させ給しもげにおかし。餘り遅くなりて。そのぞ

もすみて侍しに。左衛門督も。ちとはおかしげにおもひてぞたち給にし。いとくおかしくて。心のうちに。辨内侍。  
 聞はやすしろうすやうの折からは如何云ふべき卷上の筆  
 十月十三日。鳥羽殿へ朝觀の行幸にて。よひのほどは時雨もやと思ひ侍しに。あしたとに晴て。いとめでたくそ侍し。鳥羽殿の御所のけいきの面白さ。ことほりにも過たり。色々のもみぢも。おりをえたる心ちす。れいとうげきすうかべる池のみぎはの紅葉など。たどへんかたなし。かみあげの内侍。こう當の内侍。少將内侍なり。日ぐらしかみあげて。様々の内侍面白くめでたきこと。いも見出して。老の後の物語は。いくらも侍べしなどいひて。少將内侍。  
 語り出む行末までのうれしきはけふの御幸のけしき成けり  
 これを聞て。辨内侍。  
 よしをへて語り傳へんとはやけふ 庭の紅葉なるらん

還御のち。めでたかりしその日の事ども申いでてぞ。めしたるまね。たれがしはなに色々。少々萩のどにてしるし侍しに。太政大臣殿の裏表白き御下襲。ことにいみじく覺えて。辨内侍。

白妙のつるの毛衣なにして染めぬを染る色といふ覺

廿七日。皇后宮の御方へいらせおはしまして。日の御座の御つほのみぢ。御覽せさせおはします。女房たちも。みぎはに散積りたるなど。たちいで、みる。おもふとかなふといはば。あのちりたるもみぢの數數へてんやと。人々仰せられしかば。少將内侍。

紅葉の數を數へて流すとも思ふ心はえやばゆくべき

今も風に散亂るゝ程。なをいと面白くて。袖にうけんなど。人々仰せられしに。こんらうのみうらの上卿にて。土御門の中納言。みちゆき。別當のさきとくしく聞えしに。驚きてみな内へ

入侍し。名殘おほくて。辨内侍。  
 をとづれて聞ゆるさきの追風に散もみぢばをみすて、ぞ行五節は十六日なり。朝餉よのひろひさし御どりやなど。露臺に作りなさむとて。かねて十二日。今出川殿へ行幸なり侍しに。御留守に候て。月隈なく侍しかば。辨内侍。

雲の上や豊のあかりのおなり名をわけてあらはす月の影哉  
 をしいだしは。大盤所の二間かけて西向なり。朝觀の行幸の菊紅葉など秋の色にて。常の年よりも。世にしらずうつくしう見え侍しを。大納言三位殿。ありし行幸の名殘とまりたる心ちする。いかにと仰せらるれば。辨内侍。

神無月ありし行幸の名殘さて紅葉の錦たえぬ也けり

十九日。節會。露臺の亂舞などはて。御前の召常よりもいと面白く。ものいひてのよ舞に。左頭中將。爲氏。六位や候。さしあぶらせよ。右頭中將されひさ。うちながめて。かほつえつき



て。豊明は曇らざりけり。爲氏が方みやりみやりなかめたりし。おかし。經忠はきぬかつぎ並ひるたるみて。このほどはしろく。又東帯の人々みやりて。あしこのほどは黒々といひし。是もとほていつていはたかなぞ刑部卿と聞ゆる。てんたつしや。こは 正くはんより次第いひつゞけて。十月は十せ れうたにまひ給。ましてむねのりまがはざらめやはやはとて。をれこたれ身をなきになして舞たりし。ふしぎにおかしく興あり。つねさだむばらこきのしたに。いたち笛ふく。さるかなつ。こどに面白く聞えき。ものさねに爲氏。實久。經定。伊長。爲教。經忠。伊基。みなむれたちて。あらたにおふるとみくさの花。面白くうたひて。たうへのまねしたり。なにもすぐれて。こどに面白く見え侍りしかば。辨内侍。

君が代に藤がぬ人はあらしかし風になみよるをたの早苗は

ものみのきぬかつぎのなかに。兩貫首をみて。ちうのはんはしとぞみゆるりやうくわんしゆといふ連歌をしたりけむ。いとおかし。少將内侍つくべきよし。きこえければ。めにたつもの人やみるらんと付たりける。

廿四日は臨時の祭りなり。あはれなりし事は。俄に久我大將はかなくなりぬと聞えし。この十二日の行幸に供奉せられたりしほどの近さもいとほかなし。此春の臨時の祭のかざしによりし事。只今の心ちして。いとあはれに思ひ出られ侍りしかば。辨内侍。

藤浪のかざしによりし面影のなごても春に立別るらん

かへし。少將内侍。

此春のかざしによりし面影の立別れぬる心ちこそせれ

十六日。除目なり。冷泉大納言右大將。花山院大納言左大將になり給。とりくにゆしき大將たち。いとくめでたし。其除目の頃。人々

の申文此方彼方より侍しに。ある人。いとしもなき先祖ひきたてし。申文に書載たりしをば。大納言三位殿。いにしへみき公任は五代の太政大臣の子なりとかきたりけむには劣りたるにやと。仰られしかば。辨内侍。

のぼりえぬ山をよしと思ふなよ己がさか行時も有世に

十二月十六日。野前の使の立つ日也。南殿の庭に幔引まはして。大宋の御屏風などたてし。みくらやづかひなどが。雪はかきたれふるに。あらしをしのぎて。使々いそがしもよほすけしき。いと寒げなり。雪打拂ふも面白くて。辨内侍。

風まぜの雪うちほらふ袖さむしのさきの使心しらなん

建長三年正月十二日。法勝寺の修正の御幸。院の御方の出し車に参りたりしかば。月明くていと面白きに。うしろとのさるかう。けう有てぞみえ侍し。すいのすがた。すのこゑ。すごく聞ゆるも。折柄面白くて。辨内侍。

白河の三代の御寺の跡なれや昔ふりせぬすいの。を裁

十五日。頭中將爲氏。まいりたりしを。かまへて。たばかりて打つべきよし仰事有しかば。殿上に候を。少將内侍げんせむといはすれど。心えて。大かた度々になりて。こなたさまへ参るをどす。人々つえもちて用意するほど。なにとかしつらむ。みすをちとはたらかすやうにぞみえし。かへりて少將内侍うたれぬ。ねたき事限りなし。十八日より。内にはた御所のやうとて。打べきよし仰せと有しに。十六日にさぎ丁やかれしに。誰々もまいりかども。頭中將ばかり。長橋へものぼらで出にけり。いかにもかなはでやみぬべかりしに。十七日。雪いみじく降たるあした。烏羽殿へ院の御幸なりて。此御所の女房参るべきよし有しかば。ひとつ車に。勾當。少將。辨。いよ。侍従。四條大納言乗り供して。



狭さかぎりなし。きぬの袖はか

も。たゞまへいたにこぼれのりたり。道すがらの雪いかにもふるめり。いと面白し。鳥羽殿のけいき。山のことずゑども。みぎはの雪いひつくすべからず。爲氏うち兼たるとを。聞せおはしましたりけるにや。御所には杖を御ふところに入れて。持て渡らせおはしまし。これにて爲氏けふうちかへせ。只今つかひにやらむずるを。こゝにて待ち設けて。かまへてうてと仰事有。少將内侍用意してまつ程。思ひもいれずとほるを。杖のくたくたとある、ほどうちたれば。御所を始め參らせて。公卿殿上人とよみをなして笑ふ。さもぞにくうちせさせ給とて。にげのきしもおかし。其後。北殿へ御船よせてめすほど。はれくしき限りなし。入相うちてのち還御なる。只かやうの御遊ばかりにてやみぬるも口惜くて。御車にめすほど。御

太刀のをに結びつけつゝ。少將内侍。

あらましの年を重れて白雪のよにふる道はけふぞ嬉しき還御の、ち。御よるにならんとて。御枕に御太刀置たりけるをり。御覽むつけてぞ御返し侍し。白き薄様に。

あらましの年積りぬる雪なれど心さけてもけふぞ覺えぬかやうに。ことならむ御歌の返しは。どもに申つべしと。按察三位殿仰られしかば。只心のうちばかりに。辨内侍。

年つもる雪さし聞げけふそへに心さけても如何みゆべき此雪に。内侍たち。定て面白歌どもあるらん。いよの内侍は手かきなれば。雪の上にもかきちらすなど。しゆこう仰せ有けるもおかしくて。辨内侍。

かきつくる心はしらす降積る雪には鳥の跡をやほみんすけやすが許に。るきのふのある參らせよといふ心。歌によみてやれと仰せと有ければ。少

將内侍折句に。

昔のむすの山の奥の麓にてこれをみまへてかへりけん返し。中將。

ふるさこの花の盛を諸共に。みまし昔しなりやまなをせめにやれど。仰と有しかば。辨内侍。古里の花よりもけに思ひやれそれより奥のしがの山越やよひの十日ごろ。

御かたの花いと盛なるに。こぞの春はさにて。花山院宰相中將。日ごとにまいられしに。なにとやらむしばしこもりゐられたりし所へ。一枝折て遣すとて。兵衛督殿にかはりて。辨。

こその春なれけるみやの花のかも。思ひ出すや返事。宰相中將。

宮人のなきへ通る。此春ははなやか。てあだにみるらむ三月十一日。月おぼろにて。面白かりしよ。四條大納言。萬里小路大納言など。女房たちあま

たさそひて。鷺尾の花盛りいと面白く侍しに。月のかたふくまで遊びて。次日少將内侍。

見ても猶あかね名残ぞ惜まる。朧月夜の花の下かけかへし。あかしの入道。大納言。

九しなにかざる蓮の色をこそみれどもあかね姿さほきけ法門にとりなされたるも。辨内侍。

あかすみる櫻もいへはおなとと九品さほ思ひへだてし三月卅日に。皇后宮院號蒙らせおはしまして。まかりいてさせ給。御名殘思やりたてまつりて。辨内侍。

行春の名残はとの數ならず。ぬけふの別れに返し。少將内侍。

またはよもあひも思は下雲の上に霞る月ほよにめぐる共五月五日。三條の中納言のもとより。れいのうつくしき薬玉。ころもみだれて。そさうなるよし申され。いとうつくし。

結びたる蓬の露にふかき。みえしを。兵衛督



殿。この心いはしやとありしかば。辨内侍。  
あやめ草をこしらぬまの長き根に深きさいふや蓬生の露  
返し。中納言。

菖蒲草をこしらぬまの長き根を深き心に如何くらべん  
ひろ御所よりみやれば。かつらといふものゝ。  
あやしの姿したるが五六人。かたみといふも  
のひちにかけて參る。あれもあほやけ物ぞか  
し。  
いとおもしろくて。辨内  
侍。

かつらより結つる少女ひきつれて 井のひなみしるらん  
よるのおといは。常の御所より 朝餉をへだて  
たれば。内侍も二三人ばかりぞふしたる。夏は  
しあけたるに。月のさしいりて。まばゆきほ  
どにぞみえし。夜ふけぬれば。柳のこずえのお  
そろしきに。たててねなんとする折しも。水雞  
の叩く音の聞ゆるを。勾當の内侍との き  
くやとあれば。少將内侍。

明てのみぬる夜むちなる月影にたがきを叩く水鶏なるらん  
これをきいて。辨内侍。

木末をぞ叩きもすらん月みむこ さしぬよはの水鶏は  
六月廿八日。閑院殿 しなり。女房廿

四人ときものしくわらはしもの。物 み  
な白きあこめどもなり。かみあげの内侍。こう  
當の内侍。少將内侍。攝政殿を始めたまつり  
て。まいらぬ上達部殿上人なし。三日かほどは  
様々の御遊どもありなど聞えしこそ。いにし  
へ九條右大臣のてうろくうちたまひたりけむ  
と思ひ出られて。いまさらゆし。左大將。さだ  
まさ。右大將。きんすけ。たちならびて。とに

給し。みめもとさらためしなく。  
どりくくにみ 人々いづれか猶まさると。  
仰せられあひた  
色深き花やもみちにわかかれて春秋をむる我心哉  
常の御所には。きやうようの丸いかけちに。ほ

ら貝をすりたる御づし。御手ばこ二。御硯。御

はんごうたらひ。はぎのどにはきり竹まさき。  
かひすりたる御づし。御手ばこ。御硯かいぐ。  
うへにたかき御手ばこに。かぬ千へのたひか  
六けん。きたのたい八間。二のたい十五間。棹  
に白き重ねのすわうのうはぎ。ふたあいのから  
衣。 ときはかま。はんごうたら

ひ。燈臺。お 殿に。ばんゑまきた  
る御づし。御手ばこ。御硯 たい十五  
間。ものゝぐのをきやう。皆同じ。ろたいあ

殿所々つくりそへられたり。たまかいみなど  
のやうにかゝりやきたる心ちす。三日がほどは。  
こきものゝぐにて。よるなどのあつさたへが  
たし。朝餉のみすうちかづきて。長押によりか  
りてぞ。若き人々うたゝねながら。あくるま  
でみなふしたる。三日すぎて。七月一日  
いろの筋格子。ふたへあやなど。心をつく

かさねどもをぞきかへ侍し。二日はまた

きぬふとんてうのうす物。すちかう  
のなかにぬひ物し。色々のえのぐ  
にて。 などをもかく。心もよばぬほ  
どなり。仁 さふらはせ給。御  
所出御なりて。南殿のつゆ せさせ

おはします。御どもに。女房たち。みな露臺に  
なみるたり。女院の御かたみ 御覽  
しいだされたりし。いとくすしる

殿。きんすけの大納言たち。御どもにて。女房  
らむせられしこそ。いと晴々しか

木丁屏風など。面々に心となり。月あ  
殿よりとて。車二三兩ばかりにてあそばぬ。  
とに 月あかきに。仁壽殿の露臺の白き薄様  
にかきて。をされたりけり。

上の常の月も光や増らん千年の秋の露の臺は  
誰どはしらねど。 思ふにさこそあらんとて。



御返しは。あの御所へ。少將内侍。  
雲の上に千年を廻る月なればよの常よりもげにぞさやけき  
辨内侍。

この秋は露の臺の敷そひて  
後にさししかばまた  
ちいにさやけき

中將して。院の御所よりおさせられけ  
夜のとまり。十四日のよ。同じく月

南殿釣殿などにて遊び侍しに。いつ  
れては覺ゆるを。人々仰せられしかば。少  
將

松などはうづもれて。月花門のはしら  
あくるまで皆ふしたる。三日すぎて。七月一日。  
いろの筋格子。ふたつあやなど。心をつく  
かさねどもをぞきかへ侍しに。二日はま  
きぬ ふせんでうの薄物。すぢがらのな  
かに。縫物 し。色々の糸のぐなどをかく。心  
も及ばぬ さふらはせ給。御所出御な

せさせおはします。御ども まつなどは  
うづもれて れひてたる。只今もどめ出た  
らん心ちし覺ゆるに。月のさやかにやどりた  
る程。たどへむこそとて。少將内侍。

水の上は雲間の月の心ちして  
辨内侍は。露臺のきは  
月はなをめぐらしく面白くこそとて。

雲の上や何くはあれど軒合の隙もる月の影ぞさやけき  
八月十五夜。二間に勾當の内侍どの少將辨な  
ど。清涼殿の庭の月いと面白きをながめいた  
して侍しに。南殿の方に笛吹はの音きこゆ。あ  
な面白。誰ならん。いさたちきかむとて。こな  
たよりめぐりて。月花門のかたごまにてきけ  
ば。びは、藏人のりさき。ふえはすけやすなり。又  
そりはし ふえつけて吹く人あり。誰  
といふすき おぼつかなし。勾當のつま  
にて。びは こゝにて聞ゆやとさけとて。

ひとりかへりてつげ給しこそ。いと面白かり  
し。すけやすが 井にとほりて聞えし  
かば。少將内侍。

名に高き今宵の空の月影に  
御びはならはせおはし  
うの くわんげんも常にせさせて。きか  
します。

八月十七日。はぎのどにて。宮内卿すけどの  
琴。勾當の内侍どの左衛門督殿びは。宰相

どの侍従内侍殿と。ひろ御所にてときへん  
笛のねたこれもうたうたはせな  
ど あはします。かやうの事よそに聞侍し  
くて。少將内侍。

琴のれに通はぬ物は心なりうらやましきは峯の松風  
辨内侍。

なさて我露のかとをかけもせて半の月の影にもれけむ  
宮内卿すけどの。院の御所の御講ごに参り

給しが。このあきはびはひき給べしと  
ひとかたならずいみじく覺えて。辨

なまけ有とは身にしむ松風  
九月十一日。 なごか調べかへけん  
たちて侍しに。なにとなく。内裏のけいきはい  
と面白し。すべりていそうの御屏風つ  
なれたるを。たてまはしてゐたり。うしろ  
さきのこと。はなやかに聞ゆるを。誰ならん  
のあなよりのぞけば。上卿右大將殿。き

んすけ。中 て。わきの陣とかやにつき  
給へり。御屏風のは  
まさこといも奉行す。にしき  
し侍らぬとて。つかひはしりちがひて。ほどと  
もさがりて。暮方にも成  
ぐれ侍しかば。辨内侍。  
夕時雨。このはを染るさきしもあれなごおりあへぬ綿なる覽  
九月廿七日。 權大納言ひるばんなり。さ



きの番つとめざりしかはりに。こよひはよもすがら候はんなどの給ひて。有明の月出る程にぞいで給し。二のたいのほどすぐるとて。おもはぬかたになびきにけりといふ歌をながめてすぎ給し。おりから面白くなど人々聞こえしを。さとに少将内侍に申遣したりしかば。少将内侍。

やがて我戀の煙に比べはや返し。辨内侍。

はるかなる鹽やはよその烟に 思ひのけつかたぞなき さとに侍し頃。 十六日。新大納言

れふち。夜番にまいりて。れいの にきり。をのづからなれども。まいり給ぬればいとひさし。 に。きりみすのほどにた

しみて。なのめ しみかへりたる聲にて。わざとならず。なにとなにけり。みせよきほどにうたひすて。いでた

を。ありしまほやのけぶりにもたちこえ。それをかはりにかたりかへすぞと。少将の

つかはして侍しかば。辨内侍。 聞ばやな倭にはあらぬ唐おきのみにしむ風は秋ならず共返し。少将内侍。

大和にはあらぬものから唐萩の返すくも猶ぞ忘れぬ 五節は十二日カキより始まる。月いと面白し。てうちやうとて 名高く聞ゆるてんこつしや

も侍しかば。ことにけう有あり。さるからなどは。むねの ほどのとはなし。辰の日 節會などはてし。 亂舞に御所も

仁壽殿へいらせおはしますに。右大將殿御とも。兩貫首あきつた。てをつく をみにて。 日蔭のいとを 露臺の柱に結びつけて。ときかかね。引かなぐりてまいりたりし。

とに興ありてみえ侍しか。はてぬれば御

しも。とに面白く侍き。ものゝまねさる 中將。頭辨頭。つねさだ。つねたい。これ

もど。たいすけ。あきつしまへながれこと。次第をとりてはやし侍しに。むねまさ。竹になりてふして。次第に流れくるまねして侍し。

く見え侍き。又同じ人々。我君の代に。せことあるに。蓬萊の山つき出さんと。一たびあるちりのといふ歌をうたひて。い

のつもりてか山となるらむといふに。むねまさの なりて。次第に

にたちあがりぐして。つきいだしてはやさせで。うるはしくたちて。長生不死の薬といふ

もりにかゝみをすかせて侍しを。ひまな

くどりかはしてみ侍しかば。いとむづかしとありしに。このま りは。ひとり

ふせこにすかしたるを。これもようなどて。辨内侍。 たきものゝ匂ひを袖に移し ぬ鏡のかけな惜みそ

十七日。女 して侍しに。祿を としらぬといふ たりしかど。 様々いはひと申 くて。辨

内辨。 立なるゝ霞の袖に包みても 色や余らん 二月十四日。までの どのゝもとよ

り。富の小路殿のむめさ につけて。 なべて世の色こそ今は 雲々の春の梅が、

返し。 梅花なれし雲のちかけ なべての色さやはみる 北山殿より こしといふ心。ふ

りうにしたる 梅の花 いらせさ



せ給て。このころ歌によめど。仰せごどありしかば。辨内侍。

驚のともふ宿のむめの花昔を今にうつしてぞ見る

顯方の宰相中將。あづまへくだるとて。暇申にまいりて侍。貫首にてちかくなれし名残もなにと

るべし。十九日鳥

もちて參てはせに參るべきよし申

さる。井 經忠。 惟基など。面々に鳥ど

ももちて せられけるに。顯方の白鳥とに

ゆゝし とも皆まけにけり。ひろ御所の

北向の御 れてぞ侍し。いま一どま

いらむと申されしが。 まゝにてぞくだり

にし。御鳥屋の事。少將内侍。

頼めこしゆふ付鳥はよそに れにねこそなかるれ

かへし。宮内卿。 あふ坂の關ぢの鳥に思ひ出 りの別れ有さば

四月廿一日。御 なり。右大將どの參らせ

給ふけらむのめ たはてざりけるに。けい

ごにてもまいらせとて 殿さまにて御

えいばかりなをしてまいり給て。 ち

やうは。くらのかうたかゆき。もちて參る。右

大將どの。朝觀の行幸に參りたりし。御びは

を弾き給ふ。そのほどのこといも。いとめでた

くて。辨内侍。

よつのをの調べはけふを始めにて ためしを引や傳へん

御てさりの ちども。こなたかなたより參

りたりし。 むかしの花山院の御繪。

又圓融院 侍しに。左大將。朝光。右大將。

成時。御幸に 人を々見給ひて。

ゆゝしかりける。 ならびて。ことに

したがひけむ。いかにい 仰せら

れしかば。いまの大將きだまさ。な

とて。辨内侍。

咲ならぶ昔の花の色 枝に匂はざらめや

土御門の宰相。

のちまで。くろどのはん つまへかたりて

はらず残りて侍けるをみ る名はか

雲の上になのりすてや郭公 には思ひ立けむ

返し。辨内侍。

子規雲のいづくにすぎぬらん たる跡を残して

事わざしげき御まつりとのあまりにや。この

御所中のくみいれの敷を。皆敷ふべきよしを

うけ給はりて。伊與内侍はりまなど。安福殿あ

けさせて敷へ侍しに。釣殿のくみいれのとに

多くて。いとつもりたるといふとにて侍。辨

内侍。

みるまゝにいさゝ積りて釣殿 かすは限りしられず

五月雨し つれづれなるに。大ば

はん所に女房たちな て。大

ばむのかみに。御物たなたきのばんあ

さしも。此度の内裏ゆゝしくつく

のたくみのつくりたる。棚のゆがみて

みゆれば。辨内侍。

ひだ匠そて作りにあられば のすぐにしもなき

五月五日に。つ 女房たちに。

しやうぶかぶとせさせ。花ども あやめ

のかつらかけは。けしきほどに。かさ

大臣殿。御ゆどのうへより。御參り有し。

侍従内侍など。萩のとより通りて二

間 にせられしに。辨はすこしさか

りて侍しほど。 頭中將みえしかば。

清涼殿よりはみどをして。ひろ御所の北向の

御鳥の一間に。日暮しこもりる へ。人に

やみえむと。いとあそろしくて。辨内侍。

黒髪のあやめはなきを額なるかふさは 多人やみる覽

五月廿日より最勝講也。 しつら

ひて。いまだ事ども始まらぬほど。まつ御覽せ

させおはします。次に女房たちにとて。をりな



はせられしこそいと興有 には。  
 二位殿三位殿ならせ給。あさくゆ かはる。 四  
 條の大納言もまじりて論議す。 を  
 かしきとどもをしへ給。本 かうの  
 論議はかなふまじとて。いつも讀師の  
 ほどは。なこどももちてまいるかげにい  
 とおもし 着座の公卿になり  
 しゝさまの女房 そつとめ侍し。  
 日たけて奉行の職 僧どもやう  
 へまゐりて。夕座はいそぎ なは  
 れ侍しもおかしくて。辨内侍。  
 いぞけた朝さ夕さもうち續き かれさいはなん  
 廿六日。菅三位なりしけ。参りて。向ひの  
 文あり。すけやす。きむひろ。時つねなど候。  
 そのみち 菅三位のむすめ 同し  
 参りて候しに。同じくいるべきよし。仰ありし  
 かば。辨内侍。

敷島や大和も唐も書みればその道しらでいかゞまづらん  
 御文はてゝ。常の御所へいらせおはしまし  
 て。菅三位かたり申けるからのとなど御物語  
 侍しを。及ばぬ心ちにもいとあ 侍し  
 なかに。それがしとかや。ことにまつ  
 となりの燈火のかけをたのみて。中  
 ちんにて。學問をしけるといふ事を。  
 まし。とにあはれにのみしくおぼ  
 たのみけんその燈火ぞあはれなる かべのあなたおもてに  
 さぬきといふ いそぎて参るべ  
 きとありて。朝餉 しに殿の御参りあ  
 りて。大盤所 かなはて。ひも  
 くれほどになりしかば。 る  
 ゆふかれぬにぞなりけるといふも。  
 とはりに朝まつりとしけ き社なるらめ  
 みな月のころふり へもちて参るとて。  
 うちおとして笑ふ聲 いづれのめすぞ

と御尋ね侍しに。これはたそ。なに  
 るめすこそといふに。ことによしある  
 けもなきが。おもひいれず。しほのこうぞと申  
 候といひたりし。いみじくしものくに聞えし。  
 いとおかし。大納言すけどの。誰といふぞと  
 仰せらるゝに。すけよしこそ。えこそかなふま  
 じけれとまねびたりし。めすぞなど申て。わ  
 なのらすは人や咎めむをきに聞木の丸殿にあらぬ物から  
 朝餉参りてのち。 けのおちたるを。万  
 里小路の大納言殿。 かきてなかにどり  
 をかゝれたる。このそば つけよと。  
 大納言三位どの仰せられしかば。  
 子を思ふ夜の鶴にもあらな 籠の内になく  
 神泉池なるべし 繼どりて参りたり  
 しを。かさねよとあ 辨内侍。  
 蓮葉の露の数々重れ まぬ色もみるべき  
 夏のよの月 りしに。三條中

納言。きんすけ。宰相中  
 の御覽に候しほど。御所もい し  
 て月御らむず。中納言はゐのつきてん 子  
 にはつみたるやうにて。なつなれど月はひか  
 り みえ。日は又あたくかにみゆ  
 るなど申侍しを。大納言二位殿。れいのよしあ  
 りていふにこそ。いかいきくと侍しかば。辨内  
 侍。  
 久方の照目にあへごいかなれば霜さみゆらん夏のよの月  
 五月十三日。院御所の御 しに。  
 事どもはてゝ。夜ふけて人々けふ  
 しをりしも。郭公の聲きこえ侍  
 ろくて。少將内侍。  
 折をえてさぞなのるらん郭公 たは遙かなれ共  
 返し。辨内侍。  
 夜もすがら月みるごちの心あ なふる時鳥哉  
 七月七日。 人々かねてより申



ちきりて。あかつ

姿みえぬ

ほどに。などあらまし侍

たれ

もねすぎてあけにしかば。清涼殿

たつゆもふみ侍らず。常の御所のせ

りあらそひふみ侍しも面白く。

道遠く分る草葉の心ちして

き庭の朝露

廿六日。攝政殿まいらせ

の御連歌

面白かりしことなり。仰せられいた

れむ歌ひとりありかゝせむとて。發句はせさせ

おはします。兵衛督殿ぞかき給し。辨少將た

三人なれば。いとします。なにとなく日くらし

候はせ給し程に。御いでのうち。御拜せ

させおはししかば。夕日のかげ仁壽殿の格子

にきら／＼とうつり。けのこずゑうちな

びき侍ほど。月のひかり

辨内侍。

吳竹の夜のまの月やわす

ふ夕日かげ哉

八月十五夜。月

時はあどのよ

り。太政大臣。

池水に今宵の月をうつし

みるかひもなし

御返し。少

さふ人は我ぞまたる夜

まさり影しなれば

また。

さひさはすみぎはを過て

の月の影を宿して

まての

しばしこもりみんずるよし。

申さ

いとをしと聞えわたらむ

はせ給

いふさた侍しに。

さらばいとをしといふ事

かきて

そうもんにたべと侍しに。少將内侍

さばやとありしかども。心ばかりに

心して暫しふるまへ笹蟹のいとをしこそ思ひよりぬれ

辨内侍。

夏引のいとをしといふ一節

計りさもかけてしらばや

重代な

心ばかりは。歌こ

のむ人侍しか 少將内侍

とて時

々よみ侍しに。

吹田殿の御

まりや侍けん。おぼつかなき事

どかに。太政大臣殿仰せられなすと

和歌の浦に人のかきをく藻汐草

かたにぬるし袖哉

かへし。

くやしくぞ漂ふ浪のみなか迄

袖濡しけり

北 て太政大臣殿より。

紅葉のわきてしぐるゝ

れの方さみてもしなむ

御

時雨だによきて染ける

同ト深山さ思ひける哉

辨内侍。

紅葉のこきも薄きもゆふし

の色こそみれ

女院の御かたより。色々

を参らせさ

せ給たりし御返事申せど。仰せごとありしに。

少將内侍。

染盡すやしほの色を九重にみよ

深き紅葉なるらん

御返しはなくて。

夜の局のみす

に。菊の枝に付てさゝれたり。

九重にかされてもみよ君か代に

すも白菊の花

又御返し。

こゝのへに猶幾千世を重ねら

さきくにつけても

辨内侍。

九重に重ねても猶しら

かもあかね也けり

九月十

御連歌侍しに。あめ

ふりていと

月とにくまなか

りしに。いゑ

の地下なるして。兵

衛督殿

かくながめさせられける。

今更にそのよの空のつゝ

月の影をみるにも

御返事。

誰もげにそのよの空はつ

もはれける月ぞさ思へば

辨内侍。

はるゝよもくもるも同トうら

しこもみす秋のよの月

十月十三日。

かはらけ給ぬれど



も。なを大殿とて参らせ給  
く。て。

辨内侍。  
ふ松そ 猶きはなり

を人々にたまはすとてなども  
を人々にたまはすとてなども

きつけられて侍りしに。その名の  
きて御返事に。申すべきよし。

はからひ仰せられしかば。少  
いさしらず誰に心を

に辨内侍  
いくとせもおきてや

のをぐしのみ。かくひかり  
いらせ給し

侍しに。女房たちみな供奉人  
つとめ侍しこそい

な  
とおかしか  
大納言も

羣書類従卷第三百廿三

まじりて。様々  
をしへ  
侍しに  
内藏頭  
み  
れほど

私云。  
此集。後深草院辨内侍歌多見之。仍號<sub>二</sub>彼集<sub>一</sub>。  
此辨内侍者。閑院冬嗣公一男中納言長良卿  
之末葉中務大輔信實息女也。<sub>辨内侍日記</sub>  
下云々。

右辨内侍日記以二本校合之傍注以草書(今加)符以標  
之者原本所附蓋當時之爲也楷書則今之所加以便覽者云

群書類従卷第三百廿四

日記部五

中務内侍日記〔舊本行書跡〕

いたづらに明しくらす春秋に。たゞ羊のあゆ  
みなる心地して。末の露もとの車にをくれ  
さきだつ例しの。はかなき世をかつ思ひなが  
らも。得達のえんにはすまらず。皆生々世々に  
迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。た  
いかゝる世のそゝるごとのみ。心にしみて忘  
れがたき中にも。弘安三年伏見殿の御せん法  
とて。院の御方はかなくなりしに。十五夜の月  
も。雪うち散て風ひややかなる枯野の庭の氣  
色物哀なれど。同じ心にもみる人もなし。獨眺  
んもすき／＼しかりぬべければ入てふしぬる

檢校保己一集

に。春宮御方釣殿に出させおはします。御供左  
衛門のかうの殿内侍殿。男には左中將ばかり  
まいる。宰相殿宮内三人ぬるを。御所になり  
ぬるとてあれば。皆起て参る。すさまじき物と  
かやいひ古すなるしはすの月夜なれど。宮の  
中はみな白妙にみえ渡りて。木々の梢は花と  
みゆ。池の鏡もされたるに。枯蘆のはかなくし  
ほれふしたるほど。よろづにみどころあり。音  
なくしつまりたるに。絶々岩にもるゝ水の音  
計して。軒端の松のみぞつれなくみゆる。權太  
太しこうしたるほどなるに。御使あり。常盤井  
殿の御まいりとばかり答へて。局にはちいさ



き童ばかりぞある。いとねんなく。初雪の心地してなど申。女院の御方も御るすなり。御つぼ御覽せらる。軒近く一叢生たる吳竹の雪折したるも。なべて枯ぬる草よりもはかなく。よろづにけぢかきさまに。み所そひてぞ侍る。又女房の局ども。未たねぬ所もあり。いとえんだちて。おかしき事共多し。猶立歸り。ありつる方を御覽せらるれば。すこし晴つる空も又かきくらし。風も烈しく冴たるに。やもめ鳥の一聲もあはれをそへて覺ゆる。

ながめわび心も空にかきくれて降白雪にすむ月の影

うきふしを思ひみだれてはかなきは汀の蘆の雪の下折

斯ていらせ給ひぬれば。御るすの御所にぬぬれども。まばしは猶はしをあけて。晴曇る空をながめて。なにどなく物語どもするに。時移り鳥もしばぐなくに。又あはれをそふる鐘のをども。枕に近き心地して。いとあはれに物か

なし。

我ならで鳥もなきけりれをそへて明行鐘のさゆる響にたい心の中ばかりつゝかぬ事のみ案せらるゝも。我ながらおかし。又弘安三年の年。御さかきいでさせ給しかば。廂の御所なりしに。四年の八月十六日。たそがれの程よりかきくれて降雨の。ふくるまゝに名残なく晴て。同じ空どもみえぬ月影面白ければ。春宮の御方入らせおはしまして御月見あり。霧降ておかしきに。猶曇らぬ露の光り。聲々に啼虫の音も。とり集めたる心地して。吹まよひたる風に亂れまさる露の玉も心ぐるしきに。松にかゝる光はことなるも。如意寶珠の玉かどみえけんさが野も。これには過じと覺えて。

をのづから暫しも消ぬたのみかは軒端の松にかゝる白露

御方々にいらせ給ひぬ。曉近くなる程に。院の御方はまだ南殿の月を御覽せらる。宵よりは

こよなう霧もふりまさりて。木々の梢もみえわかず。かすめる空に雁鳴渡りて。あはれもそへて面白ければ。

霧こめて哀もふかき秋の夜に雲井の鴈もなきわたる哉

御よるの後もとみにねられず。

よなくはねぬよの友さ眺むるに霧な隔てそ秋のよの月

又弘安五年四月十七日。さが殿の御るすなりしに。雨もをやまず。空さへどちて日敷つもの比。公私初音をまつなぐさめばかりに。あま夜の空を御らんせらるゝ。御どもに三位殿御局大納言殿別當殿。男にはあやの小路の三位土御門の少將。そいろこといも申して。おかしく興あることいもなり。心づくしにまぢあかしつる郭公は。それかどおぼめく程の一聲に。花橋の薫なつかしきも。よそふる人もありがほの心地して。ひかりなきよのやみのうつしも。思ひなすかたは何れもあさからねば。なかく

なる忘れがたみに。いまも盡せざりけり。

時鳥おほめくほごの一聲になごりの空も睡しき哉

世にふれば。なにどなく忘れぬ節々も多く。袖もぬれぬべきことほりもしらるゝこそ。かはゆく覺ゆれど。ことに弘安六年四月十九日。れいのさがどの御こうなりて。還御なる御よるの後。春宮の御方土御門の少將ばかり御どもにて。院の御方さまにしのびて御覽せらるゝ。南殿の花橋盛りなる頃なれば。かをなつかしむ時鳥もやど。またせおはしますに。心づくしの一聲もあかずうらめし。その頃。左中將なにごとにかありけん。籠りて久しく參らざりけるに。有明の空に鳴ぬる一聲を。ね覺にやきくらんなど。かたじけなくもおぼしめしいづるは。夢の中にも通ふらんをと思ひやらるゝに。思ひやるれ覺やいかの時鳥なきてすぎぬる有明の空と御けしきあれば。内侍どの。たどくしき程



の有明の光りにかきて。花橋に附られたり。さるべき御使もなく明ぬべければ。土御門少將。人もぐせず。たゞ獨むまにて行ぬ。てづから馬の口を牽てかどを叩くに。とみにもあけず。空は明方になるも淺ましくおかし。門をあけぬるに。思ひよらずあきれたちけんもことほりなり。さらぬなさげだに。折柄物はうれしきに。賢き御なさけも深く。色をもかをもとおぼしめし出るも。御使のうれしさはげにいかなりけん。同じ類ならん身は。げにいかにかうらやましからざらん。有難き面目いける身の思ひ出とぞ。よそに思ひしられて侍りし。ほのくど明るほどにぞかへりまいりたる。みやのうち鳴てすぎける時鳥まつ宿からは今もつれなしその日土御門少將に。

あし引の 山ほさゝきす しめてなを  
まつはつれなく ふくる夜に しばかりたしく

まきの戸は あらぬくぬなき まがへても  
さすがに明て たづぬれば しげき草ばの  
露はらひ わけ入人の すがたさへ  
思ひもよらぬ おりにしも いさもかしこき  
なさげさて つたへのべつる このはを  
我身にあまる 心地して げに世にしらぬ  
有明の 月にさむむる おもかげの  
名残までこそ わすれかれぬれ  
言の葉にいかにいひてもかひぞなき顯れぬべき心ならねば  
返事に少將。

久々の 月のかつらの かげにしも  
さきしもあるぞ ほさゝきす 一聲なる  
ありあけの 月毛のこまに まかせつゝ  
いさもかしこき 玉づきを ひざりある庭の  
しるべにて たづねし宿の 草ふかみ  
ふかきなさげな つたへしに 袂にあまる  
嬉しさは よそまでもげに しら雲の  
たえまに日影 ほのめきて 朝をく露の  
たまほこの 道行人の くれはさり  
あやしきまでに いそぎつる そのかひありて

千はやぶる かみしもこもに おきぬつゝ  
まつにつけても すみよしの 岸におふなる  
草のなの わすれかたみの おもひでや  
これあらはれば 闕 なかくいかに  
うらみまし 心にこむる わすれがたみを  
内侍どの少將にことつけ。  
時しもあれ御垣にほふ橋の風につけても人のこへかし  
かへりごと。

めつらしきその言のほも身にしむは有明の空に匂ふ立花  
廿日。内侍殿に。左中將。  
いかならん世にかわすれん橋の匂ひもふかけさの情を  
返とに。

橋の匂ひにたぐふ情にもこころいふいまで思ひしらるゝ  
弘安七年三月十七日。これも嵯峨殿の御るすな  
りしに。御あそびあり。御どもに女房四人ちと  
こ三人ぞ侍りし。たいの御方大納言殿冷泉殿。  
御てうづのまのみす巻揚けて。御所御ひは。綾  
の小路の三位朗詠。伯の少將笛。土御門の少將

琴。よもすがら御遊どもあるに。いつもどいひ  
ながら。ちやうの屋の花の梢おもしらく。秋な  
らねども身にしむばかり風も烈き花のあたり  
は。げにゆきてもうらみまほしき心ちして。お  
ほつかなき程にかすめる月は。しく物なく覺  
えて。おりからは物のねもすみのぼり面白き  
に。後も又忍ぶばかりのここの葉を御尋あり  
しに。めんくにあらはすもおかし。定めなく  
晴曇る村雨の空も。つくりいでたらんやうな  
り。かこちがほなるともいひぬべう詠めたる  
に。三位。

はれくもり花のひまもる村雨に  
とあれど。うちまざれつゝつくる人もなけれ  
ば。心の中に。  
あやなく袖のぬるゝ物かは  
とぞおぼえし。今宵はげに春のみやるもかひ  
ある心地して。



月影に幾春へてか花もみし今宵ばかりの思ひ出ぞなき  
八月十三日。晝より雨ふりてしめやかなるに。暮ぬれば。月はなやかに差出て。小倉の山もたどるまじげ也。夜も更去づまりたるに。人たゞ二人ばかり立出てみれば。御所になりて。しばし御覽せられて。いらせおはしましぬれども。二人は猶残りて。昔今を泣み笑み。てんぼうりの契り長生殿の心地して。曉ちかくなれば。入がたの月山のはに傾きたるは。入日ならねどをくるゝ心地して。古へのをのゝ山さへゆかしきまで覺るも。入なんあとの心細さを思ふにふしぬ。

詠めつる月もいるさの山端に心ばかりやなをしたふらん  
八年三月十七日。夢にいくらもまさらぬ春の夜も。あかしかねぬる寢覺に。誠やこそこの今宵。月と花とによをあかし侍りしも戀しく。唯今のやうなるに。程なくもめぐりあひぬる。定

めなき世にながらへけるかなと思ひつゞくるを。いまだ御所は御夜の程に。すへりて人まれば。外にはまらぬ心の中をと思ひて。大納言どのゝ御局へ花につけて。

我ならぬ人もや。その今宵さて月と花を思ひいづらん  
かくまで御所に御人少なりつれば。御晝よりさきにと急ぎまいりたれば。女官。土御門の少將殿まいらせよとて候といふ。とりてみれば。散たる花に附て。こそこの今宵公私の言葉をとめて。歌どもあまた書たり。面々みな披露せよとて。あるなかに。三位は同じかぎりならぬなげきにたへで。都のたのみだになく。かやうにまうで侍るときけど。人しもこそあれ。なごかりけん。必ず逢ぬることぐさの末もあはれにかなしきに。ありし夜の村雨。けふまた袖に時雨ぬる心地してぞ侍る。  
忘れずよしなば共にさいひをきし。その軒端の春のよの月

此歌の初めはあはれし事なり。末は。かしこき御言の葉を。ひとつによみ籠めたるどみえたり。御返事に。

月影をのち忍ぶべき物ぞはなをなべてにも詠めける哉  
わびぬれば移ふ人はつられぬ心の底にあはんこそ思ふ  
是も初めは。さそふ人あらばと。身を木枯のとありしとゝみえたり。心の底といふ事は答むべきふしなり。あはんと思ふといふは我言の葉の末なり。返りむに。

瀧川のながれてあはん行末を心のそに忘れやはする  
めぐりあふけふまらえても面影の霞める月は物ぞ悲しき  
是はと葉にてひとつにこめたる御返りごとなり。かゝる世のそゝることも聞くにつけても。あるましかばと思ふ例もかなしくて。まして都の外を思ひやるは。あはれもふかくかなしければ。けふと忘れず申せといはせて。散たる花に付て。

歎きこしそのかれとの末ならば諸共にさや身は厭ふらん  
よそにだに堪へぬ歎きの花櫻ちりにしあさを思ひこそやれ  
都に還りて後。三位。

今こそ思ひしらるれかれとの歎きによらぬ思ひありさは  
花ならで散にしあさの面影はたえぬなげきの残るばかりぞ  
又大納言殿の御局へ。三位。

忘れしと契をきてしもの葉や都にのこる形見なりけん  
村雨の空にはあらでみし月の我袖からさかけぞやつれし  
思ひ出てまづ袖ぬれし村雨やうき身ひさつの涙なりけん  
又三月卅日。へたゝる日數の名残も。あはれに思ひやられて。

いかばかり哀そふらん隔て行く日數もけふの春を名残にかへりごと。三位。  
かくばかりなげきやはせし大方の年へてなれし春の名残を少將。てゝにて侍し人にをくれて籠り侍るに。後れ先立つも。これにかぎる世の例とのみなげくに。程なく月日も隔たりぬれば。秋も更行



く山里の住居は。袖も一つの村雨のみ。みねの  
あらしやこととふらん。宮古だに。ふりみふら  
ずみ定めなきころは。たゞ大方のながめに侍  
るをど。あはれもふかく思ひやる計にて。久し  
くとはぬにつけて。

物思ふ袖の涙も紅の同うちしほにそむるもみぢば  
返とに。

千しほまでそむる紅葉をみるよりも袖の涙や色増らし  
又弘安七年のとし。遠き所に忍びて。ものに籠  
り侍るに。年頃あさからず申かはしたる人。な  
くなりて。年もあまたへだりぬるに。これに  
まいりて常に籠りし宿に侍といふ所をみれ  
ば。いたう荒れなどはせぬぞ。人なく哀れげな  
り。かけつくりなるに。しばがきやりみづなど  
はかなき物から。思ひ入ぬる計にや。みどころ  
ある心ちして。あはれになつかしければ。たづ  
ね行てみれども。いかにどがむる人もなし。か

げすみはてぬとみる池水にも。宿もる月だに  
なき頃なれば。音する物は。山より落くる瀧の  
ひいき計ぞおどろかしがほなる。あはれも同  
じかぎり。深き涙ばかりは。袖に浮べても猶  
どころせき。岩波たかく谷に流るゝ水のをど  
までも。取添へものかなし。

袖の上におちくる瀧のすゑなれやをさたてゝ行山川の水  
世にすまば又みんごそ思ひしか面影なれし山の井の水  
ながれあふ涙の末もかひぞなきかけすみはてぬ宿の池水  
たゞかひなき獨言のみぞ憐れなる。

七月五日。北山殿に行けいなる。御幸もなりし  
かば。はへくしき御遊どもなり。晝は山瀧な  
ど所々御覽せられて。暮れば御舟にめす。夕づ  
く夜より有明になるまで。かゝるよもなし。  
九日。月差出るほどに。れいの御舟にめす。太  
夫持参し侍りぬと。あそびくたびれて侍と申。  
まばしは釣殿にやすらはせおはしまし、かど。

御舟差出さる。御樂あり。殿上人共小さき舟に  
乗て。なか島をへだてゝ吹合せたるものゝぬ。  
譬へんかたなく面白し。はるかに漕出ぬるに。  
かすかにかつこを打音聞ゆるを。人々あき  
れて。いづくならんと申に。大夫にやあらんと  
て。むかへの小舟に。かくし朗詠などして。さ  
しよせれば。火をたきてぞまいり給ふを。

いみづく興せさせ給ふ。春宮の御方。十三日は  
御くたびれにやありけん。御舟にもめさず。無  
量光院の庇にて月御覽せらる。簀子に花山院  
大納言大夫殿さふらひ給ふ。様々おかしき御  
物語共あり。東の妻戸の口に。大納言殿權大納  
言殿侍らひ給ふ。やがてその東のまのすみか  
うらんに。宮内宰相殿三人侍ふ。なにどなき物  
語どもして。更行まゝに。ことに近き西の山も  
と。入かた近くかたぶきたる月の。池に移ひて  
面白きを。どころがらはげにみどころあるよ

ゝの月影。いかなる世にも忘れじやなどいひ  
あはせつゝ。廿五のぼさつらいかうの御かた  
みるより初めて。たのもしくあはれなるかた  
もそひてなごり多げに。ながらへは。又こん年  
のこよひ。思ひ出なるべしやなどいふ心のう  
ちに。

山かげに詠むる月よめぐりあはん都の空に面變りすな  
更ぬればいらせ給ひぬ。

十六日も。この御方は御舟もなし。朝餉のみす  
まきあげて。月御覽せらる。御えんに人々侍  
ひ給ふ。はくの新少將衛門の藏人めしいで、  
参らせらる。花山院大納言<sup>家教</sup>。太夫殿太鼓。さ  
らぬ殿上人ども。りちには月の光りもことな  
るに。は<sup>故頭</sup>どうの舞いでたるほどは。まことに面  
白し。なごり多くてはてぬ。宮内のお許に。お  
やのおやともいひぬべき人の許より。月のた  
よりにとたのめ侍るに。人々ぐしてまへわた



りしてみえ侍るを恨みて。

偽いつはりと思ひながらもちまわつれぬよの月に影あくるまで  
といひをこせたる返事を。餘りひたやごもり  
ならんもさすがなれば。忍びて返ご遣はし  
侍るが。さるべき使もなきを。いかし侍べき  
と。いひあはするかひなからんも思ひて。あ  
らぬさまなる姿をして。夜も半に過て。あか月  
ちかくなる程にゆきて。御まやを局にしつら  
ひたるしとみ。忍びやかにうちたしけど。み  
な人ねたる氣色にて。答ふる人もなければ。あ  
まりことごとしからんもいかしと。思ひわ  
づらひてやすらふほどに。東の妻どの方に。た  
しくくるなのうちながむる聲すれば。それ  
にやあらんと。ことほりもすぎ。やさしくも  
面白くもおほえて。聲につきて遣戸にたちそ  
ひて。月をながむる也けりときくに。誠に月を  
待にはあらで。人待程のすさみにやと思ひや

られて。うちたしけば。たそどもいひあへぬ計  
に明たれば。なにとはいはず文をさしをくに。  
袖を控て放たす。おそろしくあきれたる心地  
して淺猿けれど。さはがぬさまにもてなして。  
さりげなく。やをらすべりにぐるに。隈なき月  
にみゆらんうしろでも耻かしく。我ながら心  
淺かりける振舞も。そら恐ろしくあんぜられ  
て。くやくしく覺えて。心の内に。

水鶏みづどりか疑はれつるまきの戸をあくる迄は何たしきけん  
人にはいはぬことなれば。よろづはあいなき  
心ひとつなり。

十八日。野上の御かう行けいなる。悉ことごとくだうに  
殿上人どもわらうだをあまたして敷きたるを。  
またひろひ劣らむと走りなどするもおかし。  
のがみのけしき誠におもしろし。かけひの水  
のけしき。はかなき本草までも。みどころあ  
り。廣き野に。われもかうを。まじる物なく植

渡したるに。若きねうばうたち。山きはまで分  
入てみれど。道なくて返りぬ。くるしまで御  
遊ありて。いらせ給ぬれば。れいの御舟みふねはて  
ぬ。

十九日は。妙音堂の御幸なり。おもしろくめで  
たし。

廿日。夜はとに引繕ひたる御ふながくあり。春  
宮御みは。花山院大納言笛。とはれん中之。徳  
大寺の大納言朗詠。大夫殿は。二位入道が御も  
のやどりのどしどといふものと乗りたる舟に  
て。入江の松の下にかくろへて。びはをしらべ  
て音づれ給ふ。いづくならん。出したれば。御  
舟さしよせて参り給ふ。けいせいけいせいの舟に乗たが  
り侍つる程になど申給ふ。最おかし。廿日月は  
すこし心もとなく待るしほど。御堂の御あか  
しの光かすかに水にうつろひたるほど。面白くみ  
ゆ。月さし出ぬれば。まばゆきほどなるに。漕

まはす船の楫のをとに。たちさはぐ水鳥のけ  
しき。中島の松の木末。物毎におもしろきと限  
りなきにも。又かゝるといかなる世にかど。名  
残かなしうこそ。遊はてぬれば。また田むきの  
月御覽せらるゝに。春宮の御方は。道遠くと離  
たるやうなれば。ならず。のがみへそいらせ給  
ふ。たむきのかた。とに草ふかく分入たるに。  
名におふもげにと覺えて。はてはいづくとも  
えぬまではるくど廣きに。稻葉にをきわた  
す露の光は玉をならべたらんやうなり。とり  
くくさまくくなる所々のけしき。いひつくす  
べうもあらず。還御なりていらせ給ひぬれば。  
女房達は猶大御堂のひろひさしにいで。よこ雲  
のひまみえゆくに。すさきにたてる松の木た  
ち。釣殿近き松に舟うきたりし中島に。羽うち  
かはしたる鳥どものむれるたるまでも。方に  
見すてかたけれど。心々にさしきの野上わけ



行に。あるかなきかの月の名残なをしたひけん。さしきはにしの山もとゆかしくて行ぬ。まつ山にわけて生ひたるまきの本末露けき山田の庵までもはかなく。いなばの風にみだれたるほど。山のはちかく雲にきえゆく有明の影。どりあつめたるあさぼらけものかなしくて。心細くながめつるさへ入ぬれば。

横雲の空に消ゆく有明を心細くもながめつる哉

東雲の明行空の秋風になびく稻葉も露そこぼるゝ

かやうにつゝかぬことのみぞ心の中に多き。また野上より還御なりて。あけぼのに御舟めされて。明果ぬれば入せ給ひて。やがてそのまゝながら御會あり。數ならぬ末々までも。心々にうちぬる時もなくぞ遊あひぬる。

廿一日は還御なり。院の御方は。くるゝほどになりぬれば。御名残あかず。月まつほど御舟にめす。月出ぬれば。野上へいらせおはします。

先にはひきかへのどかにて。ふけぬれば還御なる。其後御心地れいならず。わらはやみにて渡らせおはしませば。面白く忘がたかりし名残も。此御ことのおさましさに。萬ものうくて日數積るに。八月にもなりぬ。ありし野上ふとおぼしめし出らるゝに。太夫どのゝ御歌あり。今かゝる心にも獨忘れずのがみのみちのけさの曙

御返事。

今思へば誠やけふにてありし哉のがみの松の夜のあけし色淺ましきなかにも。おほやけわたくし忘れがたく戀しきに。わかき女房たち。けふはいかになぞいふにつけても。思ひ出らるゝ事多し。更に露をきたるが。ありしながらぞかしと思ふに。我から衣の戀しさもかなしくて。忘れずよ野上に茂るわれもかうわけし袂の露もまたひすかくて日數つもらせ給ふ御こと。あさましかりしに。めでたくおちさせおはしませぬ。

晦日に里に出て。九月四五日のほどに。尼崎といふ所にゆくに。京を夜深く出て。とば殿ちかきほどにて。夜やうゝ明ゆく空に。木々の木末も色つきそむるころなれば。えんなるほどにて中々面白し。舟にのらんとするに。かざしらずさりあへぬまで舟多きに。きゝしらぬさまにおそろしげなる聲したる物どもひしめくを聞につけても。ひきかへたるしきもあはれにて。北山殿思ひ出られて。いかにとだにいひあはする人もなし。はるゝ漕行に。河霧立て

こし方ゆくさきもみえず。きん<sup>禁</sup>やかた野といふ所過ぐるに。をどにのみきゝ渡るをと思ひて。しばしみるに。遠ければさだかにはあらねど。まは野の中より鳥の立を。雉子にやあらんなどいへば。

古へもありさばかりは音にきく交野の雉子けふみつる哉  
またはしおほくすぎぬるなかに。これなん天

の川に待るといふをみれば。はしやぶれて。その形ばかりぞはづかにのこる。

これやこの七夕つめの戀渡る天の河原の鵲の橋

かくて日の入ほどに行つきぬ。日は水の下に入とのみゝえて。河より海になるけぢめ波荒くたち。はるかなる沖に漕ぐ舟はゑにかきたらんやうなり。丑寅の方をみやれば。住吉の松むらだち。たえゝにかすみてみゆ。立返る波風も。浦ならねどもいたうはげしき心地ぞす。晝きふねの浦といふ方に出てみれば。浦の松風波に通て。入海心すこく神さびていとたうとし。はまに蟹どもの貝拾ひ。また沖に釣するもあり。たくなはあみなどいふ干し置たるをみれば。ほすひまもありけるをど。

うちばへて苦しき物と思ひしに蟹の栲繩ほすひまもあり  
夕日の影おもしろきに。沖より蟹の釣舟ども多くかへるもあはれなり。暮れば。遊女が舟ど



も歌うたひ物かすへなどするもあかし。一かたならず都のみ心とまりしに。海山へだりぬる心細さを思ふに。おも影ばかりかたみどて。波ち遙に月を眺むるさへ。よそにくまなき影も。我からは猶曇らぬ夜半もなし。かくて心もどなくかずへられつる日數も。程なくてのぼるは又立歸りあかぬ心地して。さすかなれぬる浦風に。心はなびくからど。われながらあやにくにて思ひまらるゝ。越方もはるかになりぬるも心細く。梢をかへりみれども。隔たりかすむ雲井ばかりをながめて。

こし方を願れどもはるく霞隔てゝそこはかなし遅くいでも。あすも日くれぬべしといへば。夜もすがら舟をこぐに。廿日の月なれば。更るまゝにすみ増りて面白に。みな人ぬれば。ひとり起居てみるに。影も流るゝとみゆる月は。なをこそをくれざりけり。よろづを思ひつゞく

るに。はては物おそろしき心地して心細し。むしあけのせとにといひけん昔物語さへぞ哀に思ひ出らるゝ。人驚て。はるかにも來にけるかなど。路もおそろしかんなるを。いづくにかどまるべきなどいふ。橋本といふ所につきぬ。あさましおかしげなる家ども。川のつらに造り續けたる所にどまりぬ。かくする住居はいかならんなど思ふも憐なり。明ぬといへば。また舟に乗る。よもすがら獨ながめし月は。明行霧に光もさえにけり。ほのかに消残りたるけしきに。心盡しげなる秋の空なるは。物かなしき心ちするに。あまり夜深くいでも。あふ舟もなきに。霧にかすみてほのかにくるを。近くなるまゝにみれば。はかなき木を組て乗て行ものあり。なにぞととへば筏と申物に侍るといふ。あだなるさまもはかなくあはれなり。

朝霧もはれぬ川せに浮きながらすぎ行ものは筏なりけり

みなせといふ所を過るに。これなん昔御所にいみじかりしも。いまかくなりぬる。あはれに侍ると。古めかしき物語りする者あれば。

淺からぬ昔のゆへを思ふにもみなせの川に袖ぞぬれぬる

歸りてのち。あはれなりしすさひも戀しくも忘れがたく。御所より人々御文あり。取立てはなけれど。心地なやましくて日數積るに。さらでもはかなくもはかなきに。いつか浮世の風にさそはれんなど思ふも心細く覺ゆるころなめれば。めづらしさも嬉しさも一方ならず。いつしか御所さまの棧敷も床しくかなしきに。枯ゆく花も同じ別れの秋の色に。あはれも深き御文はいつより有難かりぬべしと。心一つにはかなく頼まるゝぞあはれなる。

花鳥の色にもねにも忍ぶやさありのすさみもあらまじさりどもと。同じ心のたのみにも。またるゝ人の久しく絶てかゝるを。などかと思ふもうら

めしくて。

身のうさも命も限るこの秋を哀さばかり人のさへかしかくてぼどなく年もかへりぬれば。また三月十七日もめぐりあひぬ。定めなき世にながらへにけるもうれしながら。まめの外なる伏屋に埋れ過しぬるも。同じうき世に環れども。なをかひなき身なりけりと口惜く覺ゆるに。みちのたより木すゑばかりをよそにみるもなかくなる心地して。大納言殿花につけて。

月もすむ雲井の花をよそにみてなれし昔のけふを戀しき御返ごどに。

押並へてやよひのけふを忘れぬを花故にこそ思ひ出けれ花ゆへとかや見ゆるもうらめしく。その世のことども只今の心地して。今宵は入まで月をみるもはかゆく。我ながらおかしく興さめて覺えながら。

雲の上の月に心はすむ物をしめの外にや思ぬなすらん



猶はかなく。大かたの敷にはもれぬ事もやど。覺ゆるぞおかしき。

また四月廿五日。祭なれば。御けいなどひしめく。面々に葵付などするも。年に一度もいくめぐりあひぬらんと思ふに。こそこの此頃も只今の心ちして侍るほどなさもあはれにて。そのなにつけて古を忘れず忍ぶ人もあるらん。まぢく心々にみるらんけふの挿頭をと思ふに。まよや新宰相殿の。今年は引かへてあらぬさまにや。よそにみてかひなきそのかみのともいかにど。数々おもひやられて。葵に付て。

そのかみのとやはかなき葵草何故よそにのみきくらん返りと程へて後。

さまざまに思ふ心をしめてさふにぞいと涙おちける五月六日。御かうのびて。六條殿へ十三日御幸なる。御るすもいつしか人なくさびて。雨しめやかなる夕暮に。まつむきどのゝみすまきあ

げて御覽じいたされたり。御まへに大納言殿ばかりさふらひ給ふ。簀子にたちいでゝみれば。池にはわくべきひまもなく繁りたる蘆まにみゆる舟の。ありか定めず浮きたるさまもはかなきに。さはり多くみゆれば。

はかなくて蘆まにみゆる浮舟のよるべ定めず物ぞ悲しき暮れぬればいらせ給ひぬ。今宵は御よるもとし。おそろしきまで人なくのどかなる釣殿に出てみれば。雨もすこしをやむけしきなり。雲の絶間にときくもりいでゝかすめる月の光りもめづらしき心地して。大納言殿。

天雲にしばしやすらふ夜半の月詠むる人の心をやしるとおぼえ侍て。いたく心づくしげなる影もうらめしく。なにどなく物哀之。南殿の橘も盛なるに。枯たる軒の菖蒲も一つになつかしくて。かれぐに残るあやめもなつかしく花立花も一つ薫りに七月二日。御會あり。ゆふづく夜の頃なれば。

更行まゝの空は星の光りばかりなるに。しづまりたるよの氣色。長閑におもしろし。まつむき殿にみす巻揚て。御引直衣にて出てさせ給ふ。廣廂に三條の三位頭辨。簀子に殿上人どもは侍らふ。講師ためざねなり。

新玉の年を重れば。春のみ山の木隠れより。花郭公月雪につけて。心を延る慰みもさすがに有といへども。おほやけわたくしうちまざれて。物参りなどのひまいつを限りとなければ。なら初瀬の方へ思ひ立て。いまだみぬかたの木末もゆかしくて。いとま申しれんとて。げんき門院の御所衣笠殿へ。九月十三日にまいりたれば。人く多く。せうほう院の山にてまつとらんとて行に。時雨うちそゞ風少し吹て。やうく木末も色づく頃の氣色。なにどなく物あはれにみえたるに。同じふせやのなかに。すこしよしあるさまにしなして。軒近くうへ

たる萩の檜垣のうへよりみえて。かきほに植たる夕良のつる。枯残りたる枯葉ども。月に亂れてそよぐとなる。耳もめもどまる心地して。いかなる人の住むならんといへば。昔のぬしは世をいとふ人にて。いまはなし。其の古きすみかどきくといへば。哀もまさりて。

枯残る暇かきほの夕顔に心をそめてすぎそやられぬ萩の葉も全下ふせやの垣なればたゞには過ぬ風の音哉  
同じき十三日。はりまの中將。日比の煩ひをもくなりて。今はたのみなくなんどきく。あはれに悲しきをおもひながら。いまゝで問はぬをこたりもうたてくて。

いかにして暫し此世に影とめん別れんと悲しくもある哉限りなく哀さのみは歎け共いばねば人のしらすぞ有らんあるかなきかのやうにて。うき身世に影とむべき心ちせぬ心細さは。たゞ思ひやれといへば。



いさやげにあはれ悲しき思ひける心の程も今こそはしれ  
ことほりもげにと悲しく哀なり。今宵は十三  
夜ぞかし。御會あれどもまじらねば。あはれ  
にいつしかこの世ながらあましかばの悲し  
さも。やうく人くあはれがる。暮ぬれば春  
宮は院の御所へいらせおはしまして。御舟に  
めして月御覽せらる。空は曇り村雲だちて。中  
々みどころあるさまなり。心の中に。

暗曇る月そなく、珍らしき空も心のあるよなる哉  
御舟どもはてぬ。御湯殿の上のすのこにたち  
出てみれば。月のあたりなる雲もはれて。庭の  
あさぢも露の光もみえわくに。更にける夜の  
けしき。釣殿のかたへ出てみれば。どうろのと  
もし火かすかにて。遣水のいし間にもるゝを  
どのみあはれにきこゆ。

岩まもるいしの水の音すみて秋は哀れさきそなざる  
十月十日ごろ。初瀬にまいり侍れば。河原の程

にてほのくくと明るに。川霧たちて行先もみ  
えず。横雲の空ばかりけしめみえていと面白  
し。  
川霧に道こそみえれ小車のまはりていつくわたせなるらん  
うぢなるをちといふ所をみれば。いづれ昔の  
跡ならんと。色々のもみぢどもみえたるに。し  
る人あらまほしく覺ゆ。

おぼつかない何れ昔の跡ならん遠方人にもよこはまし  
槇の鳥といふ所。すさきに驚のめたる。大きな  
水車にもみぢの色々。錦をかけ渡したらん  
やうなり。芝つむ舟どもあり。つみ果て急ぎ岸  
をはなれんとするもあり。

心細やぬにつなく芝舟の岸を離れていつちゆきなん  
平等院をみれば。極東のしやうごんゆかしく  
みるどかや聞ゆるもとはりに。もみぢの色さ  
へことなるも。時雨もこの里ばかり別きて染  
めける。都のつとにちらまほしく。かへらんた

びと思ひなして過るに。又にゑの池といふ  
池はたを過ぐれば。鳥の多く水にをりて遊  
ぶ。なにぞとへば。鷗といふ鳥なりといへば。

池水もあさけの風も寒けきををりて遊ぶ鷗さりかな  
春日にまいりつきて。宮巡りすれば。春日野は  
るくくと入て。鹿のふすはぎも霜枯れてみえ  
す。

春日野は鹿のみぞふす霜枯て萩のふるえも何れなるらん  
御前に参りたれば。かり殿の御ほどにて。やう  
く作りたて参らするいと尊とし。心の内に。  
頼もしや三笠の山を仰ぎつゝ影にかくれん身を思へば  
さて猿澤の池をみれば。濁りなくすみて。采女  
が身をなげけん昔の影も今浮びたる心ちし  
て。今はと見けん面影を。我ながらいかに鏡  
のかげのかなしとみけん。御幸ありけん帝の  
御心ちも。かたむけなく哀え。  
思ひやる今だにかなし我妹子がかぎりの影を如何みつらん

どあはれなり。初瀬にまいりたれば。朝ぼらけ  
霧たちて。かり田のおもさびしきに。鶴のむれ  
めて鳴あひたる聲いとすこし。

秋はつる山田の庵のさびしきに哀にもなく鶴の聲哉

三輪の山といふ所をみるに。音にきくばかり  
なりしを。ゆかしく心もとなけれど。返らん旅  
と思ひて過ぬ。初世にまいり着て。のぼり廊を  
入るより。尊く面白きことの世にあるべしと  
も覺えず。らんしゆのけしきもなべてならず  
尊し。かひくしく心にしむる面影しんおこ  
りて。年月のあらましかふこそと。嬉しきこと  
限りなくて。御帳もあきておがまれさせ給ふ。  
おりなん後いかいとおぼゆ。

へだらん後を思へば戀しさの今よりかれて涙はばれぬ  
かねては長閑に思ひしかども。めでたき御世  
のひしめきて京より使あれば。心も心ならず。  
曉はいそぎ下かうするに。宮こもいそぎなが



ら又これもなごり多し。此度ぞみわにまいる。音にきししよりはたうとく。杉の木にわを三付けたるも面白し。

年月は行ふもしらすぎしかどけふ尋れみるみわの山本みつなりなる杉の實の落ちたるを取拾ひて。宿願ありて又參らん折返しをかんと思ふに。しるしみんしるしの杉のかたみきて神世忘れず行先をまた又玉の井といふ所すぐる。いでやあらん水はどいへば。汲てきたり。

汲くれば戀さめにこそなかりけれ音にきし玉の井の水あくる日は京へ歸りぬ。さどにしやうぞくした。めまうけたれば。やがて御所へまいりぬ。御じやうみ廿一日。節會はてぬれば。けんじいらせあはします。たゞ行幸の儀式のやう也。えんどう敷て。御劔は左近中將むねさだ。璽をば右近中將のぶもと。先に公卿供奉。左右大將公卿のすけは。劔璽のさうの御うしろにくぶす。

左右近衛づかさ。中門のどにどいまりてれちにたちたり。劔璽ははしのまより入御なれば。左右大將さうこんの木の下にたつ。母屋のみすすべらかして。御丁の前に御引直衣にて渡らせ給ふ。こうたう左より御劔を請取る。つぎに璽を渡す。右より少將内侍璽を請取るありさまゆししくめでたし。どかく儀式久しくて。明るほどにぞ内侍所はいらせ給ふ。明果ぬれば。御せんももんじやくはなし。内じゆときを奏す。

三日は。おのこども殿上につきて大ばん行ふ。年中行事のしやうじの許に出御なりて。内々御覽せらる。やがてこん夜げぢんなり。中門に出御なる。十一月九日。播磨の中將ともあきなくなりぬ。雲の上心に心をかけて。今一たびとぐわんどもたてなにかしけれども。限りある世のならひなりければ。かなはず。まうねのみあはれに

かはゆきことも。いまはのきは思ひ定てといひしにど。悲し。

九日は。春日祭に。内侍勾當たつ。

十五日。政始。

十七日。げさいの御てうづ。

十二月五日。臨時の祭なり。使は花山院宰相中將。清涼殿に出御なる。きくぢんの御はうつしじの御したかさね。御簾に殿下御参りあり。御神馬ひきたてて。使まいりて。御へいとれば。御拜ありていらせ給ひて。御いしに御しりかけさせ給ふ。使舞人ども座につく。中門の下に公卿つきたり。げんばい三ごんはてぬ。かさしの公卿。内大臣。左大將。權大納言花山院中納言。大炊の御門の中納言。久我の中納言。皇后宮權大夫。さじきにまさいありて。殿上ばかりにて着座なし。洞院の宰相中將。左大辨宰相。みの時に催されて。舞人もとくまいりたれども。ぎ

しきとらも久しくて日もくる。勸杯はてぬれば。内大臣殿使のかざし藤をとりて冠にさしせ給ふ。つらにまがはぬかざしの色もおもしろく世の初めにて。公卿の使よるつはへしきにも。雨雪のさはりだになくて長閑にめでたし。神もめづらしとや請けみ給ふらんと覺えて。

色深き雲井の藤をかざしにて神もうけみる使なるらんかざしはてぬれば。すのこに着座。舞人どもさうにたちて。行ちがふあをずりの袖口おかし。どのもんれうのたちあかしの光りにみえたるいひつくすべうもなし。笛のをとわごんのねもおかしうきこゆ。北の陣わたさるゝに。長橋のつまに行幸なる。はてぬればやがて御拜あり。かくてふけぬるに。やがて還たちなれば。このたびは御引直衣にていでさせ給ふ。庭火のかげに舞人の櫻かざして。にんちやうがひ



やうしにあはせたる足踏。わごんのねすごく。やうく明行空の光りかきあひて。いひ盡すべうもなくおもしろし。

八日九日はぢもくなり。

十二月十二日。神としじきの使たつ。上卿權大納言。辨には右大辨宰相。もんより廷道敷て。をりて役にしたがふこといも。おさなき遊びのやうに。おかしきこといもなり。

十五日。内侍所御神樂。雪宮の中におびたし。くふりたるに。和琴にれんせいの侍従よりなり。本拍子二條中將すけかた。すゑの拍子綾小路少將のふあり。ひちりき山本の中將かね行。笛伯の新少將やすな。月はふけゆくまゝにさえたるに。日數へて降積たる雪にかつふりそふけしき。池の中島松の木末木々の梢かゝやきたるも。庭火のかけに東帯の黒きがうへにふりかゝる雪は。うちはらふもありから

ことにすみ。神さびたるけしき限なし。雪おびたしくてそさ所作の人たゆべくもなければ。はしをとりて中門の下にてあり。

廿五日は北山實業どのへ御かたがへの行幸はじめなり。又雪ふりて。月だにあらばと覺えし。劔璽の役花山院宰相中將。やくの内侍勾當内侍新内侍となり。すけに權大納言のすけあせち殿少將内侍はうき殿。設の御所へまいりてむかひて。勾當といぞき髪あげて。もやの御すのうちにて御輿まぢまいらせてさぶらふ。入御なりぬれば。御裝束御引直衣めしかへて。月もなきころなれば。殿上人どもしそくさして雪御覽せらる。いらせ給ふて御會あり。おどこには左中將ためかね兼ばかり也。警固の姿にてまいらたる。いとやさしくみゆ。權大納言のすけ殿。新しい相殿。女房三人。男三人。かすにもれぬ身我ながらうれしうこそ覺ゆれ。還御はほ

のくどあくるほどになりぬれば。雪打拂ふ警固のすがたどもやさしく面白くみえたり。

廿六日。皇后宮遊義山院の御かたへなる人なくて。御供もたひひとりまいりたれば。還御まぢまいらせ

せて。池のかたみいだしてつくくどながむるに。雁の鳴て過るが。きのふよりこそ春も立しに。いつしかこしぢにやかへるらん。今は秋こそたのみなるらめと思ふに。

春きぬ雁は越路に急ぐなり心に秋をたのめてぞ行

弘安十一年二月五日。春日祭にたつ。上卿一條大納言。辨にはかね兼なかな仲なり。雨少しふりてかすみたるに。こづ川のはたをゆけば。橋あり。柴を組て渡したる橋と申。

十日。そのからかみの祭。上卿大ゐの御門の大納言。辨には爲俊。

十二日。大原の祭なり。雨うちそしぎかすめるに。まだみぬさとしめづらしくみゆれば。か

つら川などいふところも過て。西山とこそ申といふ。

心細くつねに暮ひてながめせし。これや日の入西の山本宮にまいりつきぬれば。辨上卿つきてこといも行ふ。木丁さして御まへにまいりてみれば。四所の御戸開きて。錦の御ちやうに大刀を横ざまにすぢかへたるやうにつけて。扉のわきにほこたてたり。日暮れば。いとめづらかにたうとし。はてぬればかへるに。雨も時々なをそく物から。夕日のかげに影もすこしみえつるに。又ありつるかづら川にもなりぬ。う舟も二三あり。橋の下行くやうにて。さしとめたるに。つなでひくやうに。人ふたりばかり綱をひきてさきにあり。車のとをれば。つなを水にしづめて。

桂川下す鵜舟のつなでなほ沈むる果よいかになりなん

こよひ北山どのへ行幸に歸まいらんと急ぐ



に。亥のはしめにぞまいり着きたる。やがてかみあげてまいる。あくる日御舟にめされんとて。廷道しかせて。りやうくわんず。皇后宮太夫殿。しきじども。さらぬ殿上人六あなど御供にてあり。御堂の釣殿より御舟にめす。とぎ渡せば。中島の松のしづえに鳥のすくひたる。うきすと申侍れば。これよなどて御覽ず。かゝるすみかどて。いまよりうきたるはかなさもあはれなり。

はかなげの鳥のうき集の哀さや池のこトまの松のしづ枝にけう十三日なれば。さがどの御八講とて。御幸なれば。いそぎ還御なる。其後くるしほどに野上へ行幸なる。人々さきに参りて。ありつるやうに廷道しきて。殿上人六位しりなりつるを急ぎとりて。さきにをどらじとして。少藏人のえもんのすけ。せきみの姿ことくしきに。ときはるあを色きてまじりたり。野なかに

しりちりたる女郎花の中にくわんざうのさきたる秋のをみるにて。こたまのめもやたつらんとおもしらくぞみゆる。春宮の御時もなりたりしが思ひいでられて。松山の中なればたい昔の秋にかはらず。かけひのをとみねの松の氣色かはるけむめなし。いよ簾かけわたして涼しげなるに。月はやうくさし出て。このもとにて御酒まいる。兩貫首殿上人どもは。心どけてあそびあひたり。御せんと忘れたる氣色笑はせおはします。

思ひ出の昔の秋も程ふればこの夕暮にまさりしもせし心の中に各々よみあへる歌ども。あくる日ぞげざんに入ける。やがて北山どのへまいらせらる。

二月廿七日。官のちやうの行幸。かみあげの内侍勾當と少内侍なり。

三月八日はちもくなれば。曉ちかく。御よるな

れどそうしよをもちて。あくるまでねず。ほのくどするに。明ほのし花みんといひて。大納言。權大納言。すけどの。新少將殿。四人釣殿にいでし。池の花をみれば。さかりなるもありすこしちるもあり。ことしは風やふかぬ。花やさかりとみえて久しくなりぬといへば。

九重は風もよきてやふきする盛久しくみゆる花哉  
八日は。御馬御覽。

九日。臨時の祭。使にまいる。花もさかりなるに。風すこし吹て。ちりまがふ花の下に。舞人どもえにかきたらんやうなり。たちまふ袖の氣色神垣もちもひやられて。

待えたる御世の初に咲匂ふ花のわざしを如何みるらん  
三月廿一日。禮服御覽。日の御座に出御ならせ給ふ。御引直衣。母屋の御すをたれたるはしのみすをあげてすのこに圓座をし。關白大臣のはあつえんぞ。その外の公卿のは薄圓座なり。奉行五位の職事あきよ。六位ながかた。公卿に關

白殿。内大臣殿。こがの右大將どの。おほいの御門大納言。皇后宮權太夫殿なり。御覽はていらせ給ふ。鬼の間に御覽あり。おほるの御かど大納言皇后宮權大夫殿めしけれらる。能々御覽ありて。此度用ひられんずるはめしといめられぬ。其外はらいぐざうへかへしおさめられぬ。うちく次の日より。玉の御かうふりめして御覽あり。ながつね召て。御らんしためすへき御冠など御用意あり。御ものそんじたる所。御めのとのさたにて直さる。

三月十五日。御即位行幸の儀式。關白殿左大將以下供奉の人くめづらしく面白し。かみあげの内侍。この御所より少將内侍。せうの内侍。御所御裝束めされぬ。殿いらせふ。めし仰はてぬるよし。奉行しきじ申せば。南殿へならせ給ふ。御輿にめされぬれば。官の廳へ急ぎ勾當も参る。かみあげのどくせんまうけたれば。くるまのしりにのせて。官の廳の北むきより参り



て。かみあげしたしめて。あした所の南むきに  
勾當もさふらへば。やう／＼行幸ちかづかせ  
おはしますとて。供奉の公卿したいに列にた  
ちたり。御輿よらせ給ひぬ。關白殿御下襲引直  
衣まいらせらる。公卿のすけまいりて。劔璽ど  
りて内侍に傳へて後。御輿につきて。みつなの  
すけそうぞきぬ。奏はてし主上いらせ給へば。  
殿御れんにまいらせ給ふ。廂のみすあらはよ  
り。職事あきよたれては。御もやの御れんあげ  
られて。主上大しやうしにわたらせ給ふ。劔璽  
も大床子にをき奉りて。内侍朝所の北むきに  
いでしさふらふ。そのうち大床子のひんがし  
にひらしきの御ざに。うけん二帖のうへに御  
しどねよそひて。此上にて。わきの御膳などま  
いらす。御陪膳は女房。やくさうの女房はこ上  
らう。朝所の北むきに北にさふらふ。奉行の職  
事をめして。たかみくらの事はぐしたるかど

おほせくださるれば。職事かへり参りて。ぐし  
たるよし奏す。平敷の御ざにて。御束帯ときく  
つろげさせおはしまして。玉の御かうふりめ  
さる。らいふくめされて。大床子に主上渡らせ  
おはします。玉の御冠にあけのを／＼つく。あけ  
の御はうに。左右の御かたは。月と日とをいだ  
し。御なをしには北斗七星をあらはしたてまつ  
る。御むね御袖にはたつの／＼ぼりたるをぬひ  
たり。あられちの御上の袴のうへに。らいふく  
の御裳をめす。その上に御大袖の御はうをめ  
す。御くびかみ御まひもなり。其うへにたかく  
びの御小袖の御袍をめす。此色々の御紋は御  
小袖の御袍にあらはして上にめしたり。赤地  
の錦の御したうつ。はながたのからの御沓。赤  
地の錦に包みたり。御腰には。御じゆとて。平  
緒の白きをひかせ給たり。左右の御後の御わ  
きの通りに。たんじゆとて二筋。御よをろのほ

どにさせられたり。御まへの左右の御腋に。ぎ  
よくはいとて。玉を貫きて付けられたり。御裾  
にひうち形のからかねを付られたれば。ふげ  
んの如くにりやらめきならせ給ふ。御ちかへ  
には大むゆを結びさせられたり。太刀の平緒  
の如く結びたれたり。たかみくらの事ぐした  
るよししきむ申せは。やがて行幸あり。御劔は  
勾當給る。璽はこれの役なり。右の御わきにま  
いる。殿下の仰に。そのしるしの御宮の上に  
かけたるあみをゆびにかけつれば。どりはづ  
してあやまちはせぬぞと仰せあるに。御なさ  
けの有がたく。心もつよくしく覺えて。あや  
まちなし。高御座へことゆへなくまいりつき  
ぬ。とばりあげの役ははくの三位の女なり。み  
やうぶ藏人四人。役の内侍六人。うらこきそは  
う。こきもの／＼。行幸高御座へなれば。さき  
の命婦四人御先にたつ。其後かみあげの内侍

二人二行に並びて参る。高御座の御はしの左  
右に内侍たちとまれば。殿下御簾のやくにま  
いり給ひぬ。左の内侍まづ上りて。左の御わき  
より御劔をまいらせをく。御はしをしりぞき  
て。右のしもに内侍のざにつきぬ。女王の装  
束。二色くれなるの單。そはうのうはぎ。赤色  
のからぎぬ。  
かみあげの内侍は。勾當とこれ新内侍なり。御  
ぜんの命婦。  
みあれの。いつぬき。宮人。いしかは。  
威儀の命婦。  
はし木。さぬき。びぜん。たまがき  
これみなうらこき蘇芳柳のから衣なり。  
扈從の命婦。  
右衛門督殿。  
新左衛門督殿。  
新宰相殿。  
柳に紅の單へ。  
紅梅のうはぎ。  
崩黄に紅の單へ。  
山吹のうはぎ。  
紫のうすやうに白き單へ。  
山吹のうはぎ。崩黄の唐衣。



宮内卿殿。

新宰相におなり。

治部卿殿。

紫のうすやうに萌黄のうはき。えひそめの唐衣。

少将内侍。少輔内侍。

松重に紅の單へ。柳の唐衣おなし。

つねの衣のうへに。かいぶにからぎぬ。かうけつの衣。ひらびたいなり。

行列のあいだの事。

みさきにいぎの命婦四人。蓮道の左右に付く。

しやうちやうの左につく。

つぎに劔璽の内侍二人。左勾當。右はこれなり。

こせうの女房。御うしろに歩みつゝきてまいる。ことしづまりて。南をはるかにみれば。せちげのはたとて。風にひらめきてたちたり。おほきなる香ばんに。みやうかうや匂ふらんとみえたり。こがわのたがらすとて。あしのみつある鳥みゆ。しんこんたけうのなかには。日の中に三足の鳥あり。月の中にはろくそくの兎ありときししも。ほんせちあることなりけ

りど。しんおこりて覺えて。から人の姿どもなみたちて拜し奉るに。身のけもたち涙がましく。めでたくうれし。右大臣殿唐めかしき御すがたにて。まくのうちよりねりいで給へば。玉佩のをとかや。みちりにやらめきて久しく。御たけの高き御てんのたかさにも立ちをとり給はず。高御座にむきて拜し給ふをみるにも。めでたく侍。

例なき心社すれ君が世のかゝる御幸にけふ仕へつる

とおもひつゝけたれども。うちまぎれぬ。やう／＼たいれいのぎどもはてぬれば。殿高御座へ上り給ふ。朝所へかへりいらせおはします。御けんしるしの御宮などもとくとくつとむ。主上御装束めし改めて。還御のぎになるほどに。この御やすましくへいらせ給ひぬ。花山院さい園寺殿候はせ給ふ。還御の御儀式ぐせらるゝほど。大しやうじのひんがしひらしきに

てはくごまいる。御はいせんは女房もどのごとし。又大床子の西にからえの御屏風を立られたり。その西にて。兩大納言殿御わりごひらき給ふにや。その役送には。五位のしきむよりふち顯世などみえ侍りつ。御せんはてぬれば還御なる。公卿のれち御こしよりてめされぬれば。ずさどもよせてまたかへり参りぬ。出車には。一の車には。

左衛門督殿。新左衛門督殿。はゝき。さぬき。

二の車に。

宮内。新ぎ。びせん。たまがき。

三の車。

新兵衛。ぢぶ。みあれ。いつぬき。

四のくるま。

少将。少。宮人。いつぬき。

十六日。夜更けしづまりたるに。清涼殿へ月にさそはれて花見にいでければ。大納言殿池の

花のおも影月にさだかに覺えて戀し。九重になる花の色あかでむかしや戀しかるらんと覺ゆれど。それにつけても。ふりにし昔は思ひ出らるるを。忘れどいひしその世のともは。なきもあるにとぞひきかへたる。雲の上草のかげにや思ひやるらん。かゝるなさけの次でにはわすれぬ。多く忍ばれんとや言ひ置きつらんなどいふに。舟にのらんとて。池の汀なる花の下に月の顔のみまぼられて。暫しあるに。大納言殿。哀にこの世ならでも思ひ出づらんやとてあれば。

月にさひ花にかたりて忍ぶるをまた哀なる人もありけり

つとめて。大納言殿。

年をへてけふを必ず契こし人しもなごか留らざるらん

御かへし。

春をへて戀らぬ花の色なればさこそみし世の友さこふらめいつとても哀は絶て有ながら忘るなさいひしけふぞ悲しき



三月廿六日。雲井の花みなちりはてたるに。春日殿へ御ふみのまいりたる御返とに。花をまいらせらるゝに。少將どの少き枝を折りぐしてことづけ侍るに。世にありがたきころなれば。初花よりもめづらしと思ふに。おりぐしぬればとてやらん召されぬ。やつれぬ花の契はいみじけれど。ころはしもと覺えて。花のかへり事。

思ひきや稀なる頃の櫻花君がなまけをへてみるほどいたづらに散なん花をあはれいまい一枝さみるよしも哉又返と。

なべて咲ころにしあらば櫻花かゝると葉の色もそへトな雨風に花はあさなく散果ぬ空しき枝をかたみさほみよ

四月十九日。祭なり。使一條中將さねつぐのあそん。皇后宮の使はしるべし。

五月五日。軒のあやめもことしはめづらしきさまにふきたり。しやうぶの御輿かきたてし。

殊に面白し。もとへの女官ども。くすだまのしやうぶもちてゆきかふ。御薬玉のはなどもまいらす。

五月八日。紫野の若宮より。松の緑にしつけてまいらせたり。御拜まだしきほどなるに。御所へまいりたるに。なにとなくきくもやさしく。これを題にて歌を讀侍らばやとさたあれば。

紫に縁かへたる姫小松あだし色さや君にみすらん

九日は。小五月の御幸なり。

五月十五日。御拜の御どもに。清涼殿の簀子にさふらへば。花はあとなくて。木ぐらき青葉のこずゑも面白し。

六月二日。女御参り。

五日。ろけんなり。御使に一條中將さねつぐ。紅のうすやうの御ふみ朝餉よりまいらせて。女御の御方のだいはん所よりろく給へる。

御所の御椽を新宰相殿と通るに。むしのなきそむるをきして。新宰相殿。啼きそむる虫の聲をしきつれば。とて。下のくもなければ。すでに秋なる心地こそすれ

どつけたるを。新宰相殿の。こゝちさへするにいひたきに難せさせ給ふ。いかい。

同じき七日。人の許より。女御まいりのめでたく。仁治の例のまゝに。雨さへたがはぬもめでたくて。

古へを今に傳ふる雲の上は雨さへふるきためしをそしる返とに。

そのまゝを傳ふる雲の上なれば雨さへぞげに時を違へぬ

六月十六日。月さし出て。空はむら雲たちて。晴れ曇りするしも心ありがほなるに。花山院中納言御どもにて。清涼殿にいでさせ給ひて。月御覽せらる。皇后宮權太夫まいり給ひて。舟

に乗侍らんと申給ふほどにしも。大盤所の物どもめしいでし。舟にのせらる。どう院の宰相中將もまいりて。やがて御舟に参りて。藏人左衛門のりなをひちりき。權太夫笙のふえ。花山院横笛。いと面白し。

同じき廿七日。新王の宣旨なり。その日常盤井どのいづみどのへ御わたましに。女房たち御まいりどもあり。いと御人づくなにて長閑

やかなるに。御拜の御てうづもちてまいりて。みいだしたるに。女御のたてしとみにあをやかに藤のしげりたるを。今年花さかですぎぬると申せば。このほど咲きたるを未だみずや。うたてと仰ごどあれば。さも侍らずと申せば。さてそれはこなたよりみえざりけり。いつ

ふさばかりさきたりき。いつものころにはあらで。今年もありしりて。咲ける花の心もあり

がたし。



折知りてかく咲あへる藤の花猶なべてには思ふべきかは  
れいのまゝならば。いまはさかりもすぎまじ。  
七月七日。院の御所より。露の御さうしどて。面  
々に給へりて。歌よみ侍る。權大納言のすけ殿  
に尋まいらすれば。御しもにどあり。御局をひ  
きあけたれば。この御さうしかけば。北山どの  
。けふ戀しく思出されてとて。

たきものふけし煙の末までもよせの秋は哀れなりしを  
とやがて還らせ給へば。思ひいでの戀しきも  
かくなればいと色そひて。

けにやげにいつも星合の空なれどよせの秋は哀れなりしを  
待たるけふもけふこそ嬉しけれ七夕女やけふもけふなる  
くれぬれば。きかうでんの火の光り水にうつ  
ろひて。けしきことに面白し。ことぢたてよ。  
洞院の宰相中將なり。くわいのしるしとめづ  
らしくや。七夕づめもおもひやられて。  
手向かく玉のを琴も此秋は七夕つめのいかに聞らん

みあげて馬にのりてくだる。すかりやにまん  
を引きて。女御代の御車たてられたり。いだし  
ぐるま色々にみえて。ひんてうさうし車のま  
へにたつ。そらだきもの、匂ひ心にくくゆ  
りみちてなん。

閑院殿のあとに御さしき七けん。なかのまは  
院の御かた。左は皇后宮の御かたなり。紅葉重  
のをしだいしみゆ。御所の西に平板敷に。紫べ  
り敷て。さうじ二人ていしたり。御はしのまに  
さいをんじの大納言どのつかせ給ふ。右のか  
たのかりやに。殿上人ども着座したり。そのし  
もに北おもて御隨身あたり。きくもみぢうへ  
て。御棧敷のぎしきいひ盡すべくもなし。すぎ  
ぬれば。みちよりありて。車にてしとみやにま  
いる。石たて松植たり。主上ようよにめしては  
らへどのへなる。還御なりて後十三日。そのた  
びにそのおりつらく久しからんおりなどあ

此秋は七夕づめに手向かく玉のを琴にれもや添らん  
手向するそらだきものにいかにかり天の羽衣袖薫らん  
權大納言まいらせ給ふて。御語りあり。前大納  
言殿びは。ことは女御の御かたの權大なごん  
殿。とう院の宰相中將ふえ。花山院中納言殿。  
伯の少將やすなが。拍子あやの小路の少將。御  
かくはてぬ。心の中しづまりはて。月みんと  
いひて。女御の御方にしのびて御びは彈せ給  
ふ。

七月十九日。官の廳の行幸なり。  
廿一日。御けいの行幸。出御の内侍。少將少輔  
内侍なり。女ご所のないしむまには乗るべし  
とて。勾當とこれと命婦四人。は、木。かはち。  
備せん。ひせん。藏人にみわれのすむつる陰陽  
寮にていでたつ。うらこきそはうの三衣。青き  
單。かうけちのも。こき袴。紫の指貫のも。だち  
よりつまを出して。くはんの沓とてはきて。か

り。御わきまへはそのおりにてあり。  
十一月は。大嘗會とて。霜月八日女工所はじ  
めとて。ゆうきしゆきにてつくるが。いまだい  
でこねば。ゆうきには神祇官をもちあらると  
かや。主基には陰陽寮なり。

八日。月さし出づるほどに。勾當と一車にてゆ  
く。夕づく夜のさびしき影。うちの、はるく、  
霜枯の野べにさはる物なくみえたるも。中  
々あかしきに。  
霜枯の野べにしあればはるく、さ處えがほに月のみぞすむ  
さて月入てのちかへる。女工所にかねて十二  
日とてありしかど。をそく作りいだすに。十七  
日より入に。雪うちりて。冬ごもりたる空のけ  
しきのすぢきに。陰陽寮のなかなるに。社のみ  
ぞひとつにみ出したる。勾當は神祇官のつか  
さの東に。女工所のやたてたるに侍る。これに  
は陰陽寮のうちにいぬるのすみなり。とくせ



んを取らぬおとい。女官にはつかさどて。代々のくわんと名のりて。れいどもひき。ぎやう行じくわんにたゝみせめ出してしく。さどより屏風さほづしやうのてう調度どもめしよせてしつらひつる。さる程に日暮ぬ。里より人參て厨子たて棹つらせなぞす。思ひもよらぬほどに御幸ありとき。勾當の所よりこれへ入らせおはします。はれがましくなる女房たち。いくらもくゝをし入て。いかにくゝなど仰せらるゝ。さほなる袴ひき落してきつ。やがていらせおはしまして。衣のかけやう思ひ所あり。幸にこそかけたれと仰せごどありて。しつらひやさしなごぎよかんにあづかる。今宵おとなしき人まいらずば。いかにくゝはぢがましからましと覺ゆ。木丁などもたてめぐらしつ。よくくゝ御覽ありて。還御なりぬ。面目もはぢがましさも。をとるかたなくこそ覺え侍れ。さても

夜もあけぬれば。官より行事官とていりさふらはんことうけ給はらんと申。大嘗會のいな行のみのおきないんこや女どかや。色々のもの装束の衣。色々の染草花紅など參らせたり。かたのごとくなれば。女官この廳にては。みち行がたきしだいども。奉行の辨申なかしぬ申にふれ申せば。國々へ下地し侍れども。いまださたせず。せめふせ侍らんなど申。行事官と女官といさかふ。おそろしながらおかし。十八日には。行幸なる。十九日。權大納言御局へくるゝほどに。昨日より近き頼みは慰むに覺束なくてけふも暮ぬる申と申せば。御返事。いましかくかき通はせば情こそあひにあひぬる近き申しにいまは心づよく覺ゆるにつけて。つれづれはみる心せよこゝに今大内山の暮の景色を廿一日は。參りの夜。ちやうだいの出御に。御

妻出してなる。女房たち御しりにつきて參る。女工所はてぬほどは。夜をこさぬことにて。あからさまにまいりて。かねうたぬさきに女工所へかへる。つぎの日新宰相殿のもとより。このまぎれなるにかく。

人しれずやさしくぞみし月影も大宮人の袖のけしきもよそにみん物さばかれてしらざりき豊の明の有明の月夜もすがら大内山の月影にたちまふ袖をおもひこそやれせめてたゞもしや心の慰むさばこやの山の月をこそみれをのづから馴し名残を忘れすば見せばやさもや思ひ出らんかへし。

ありにもあらずや人の恨むらん思ひ乍らに日數へぬればよそにみてさこそ昨日は思ひけめ大宮人の袖のけしきを紛れつゝ忘るらんさや思ふらん心の中にさほぬ日はなし哀にも心よはくぞながめけるさよのあかりの有明の月さこそげに豊の明のもろ人のたち舞ふ袖も思ひやりけめさる程に。行事官色々の染草參らせたれば。女官つかさにうけとらす。しるしふみにまかせて。御ちやうのかたびら。いなのみのおきな。

いんこや女の装束の衣。うけとらするに。そめぐさどもりやうのこくしのもどへつみつかはす。また奉行の辨申ながかぬ。とさまのもよほしもしきりかけて。御けうぞつかはす。行事官ちきにうけとらせ給へとていできたれば。さぶらひもどをいだししてあひしらはするに。心えぬこといもあれば。女工所の女房をはしに出して。みすのきはへ。かの行事官をめしよせて。きぬの寸法などこまかにあひしらはせたらば。心えてよろこぶといへども。染草の色々みえずして。御所の御りきしやを申て。所々へつけて。かたのごとくせめ出しつ。ころもをとり重て。花の色々紅の色々を。ひとへによせて調せさせて。後にその色々品々にわかち縫せして。ほどなくさたし出でたれば。行事の辨申よりはじめて悦ぶ。いまだ夜の中に。行事官並に奉行の辨。面々に装束うけとらす。そのきもつき



ぬし〜女工所に出きて。装束もあり。いなのみのおきなど。びん白く髭は帯のもまで長くて。年もも〜とせにもやとみゆるに。束帯せさす。これを見て心の中に。

いなのみのおきなど。びん白く君が千年もかいてしられてかやうのともがら。しやうぞきつれだちいでぬれば。内裡より出車給はり参りぬ。局どもせばくて。どの御やすまくのにしにらうに。あつまりぞさふらふ。

廿二日。ひをの山ひく。ひしめく装束どもして渡しつれば。心やすくてくるれば。くわいりう殿の行事に。勾當はまいらせ給はず。少将内侍どのとぞまいり侍る。黒木のやにまいる。行事なりて。山陰の氏の藏人またせて。御ゆまいりて。帛の御装束にて。廷道しき神殿になる。御ぎしき申もをろかなり。殿いけしよしのをみどもきて。神殿に内侍も参るべかりしかども。

かたてがはりて。女工所のならでは参らぬことなれば。ひとりしてふたつのことをつとむべきにもあらずとて。是にとまりて還御なりて。又御ゆをめて又なる。殿は度々御参りありて。されどもまた御歸ありて。還御のほどに御迎に御まいりあり。ほの〜と明行に。みれば。こしばあちこち多く結まはして。黒木の鳥居あまたたてたるめづらかに面白きにか。公事の御けいきをみ残したらましかばと。さはりなくけふまでのことみつるも嬉しくてありがたく。ことば〜あふべきにもあらず。君に〜契り有り長くてけさの御幸に〜あふ身よ還御なれば。夜は明はて〜日さし出るほどに。風も静に。さし出る日影ものどやかなれば。御幸なるけさや峰に出る日もつれよりとに影ものどけきゆふきしゆきのせちえ。とよのあかりの節會。ことになごり多く覺えて。ろだいのらんぶ。ほ

の〜とするほどに。こゑばかりきく。悠記主基とよみしに。替る〜かみあぐ。豊明の節會はてがたに。舞姫のほか大うた所うたふを奏す。舞人樂を奏す。まひとのもとはて〜。よごとの奏とて。さいしゆたてあかしの光りにみれば。をみの装束ことらうるはしく。こは〜しげにしやうぞきて。拜したてまつるをみるにも。

すべらぎのやを萬代に祈らし天津日雲の神ぞしるらん

と思ひつゝけらる。ことば〜。高御座よりあしたところへなりぬ。せいしよ堂の御神樂は御代のはじめの御祈なれば。ことに君もしんも。御神事にてもてはやし給ふことなれば。所作の人かねてよりその人々と定められて皆参りぬ。御神樂の御装束はて〜。出御なりてはじまりぬ。もの〜ね澄み昇りて。げんじやうの御ばちをど。とにひ〜き昇て。和琴のしらべ。本

末の拍子にあはせてかきなす。おもしろうかさしきに。ふるめかしなど申すもをろか。八そぢにあまりたるさねたかの二位の聲の色。むかしゆかしくおぼゆ。時々きえ返て。年のまゐるしとかすかなるおりに。玄上の御撥をとにまぎれて。面白くやさしくきこゆ。やう〜御神樂もはつれば。空もあけぬ。神祇官もことにかかければ。なうぞうし給ふらんと覺えて。心のうちに。

君が世を千世の初に祈る哉神のつかさのちかきたよりに御神樂はてぬれば。人々祿たまはりて出ぬ。をみの姿あくる日影にか〜やかきてやさしくみゆ。

山あわの色や〜ほりにみたるらん日影移るふをみの衣手其後御せんめし。あした所の南おもての廣ひさしに殿上人まいりて。まひの〜しるもの〜まねなどするに。なにをもよく相する今参



めしいだしたれば。馬をよくさうして。この御馬はかさおどろきやま侍らんと申せば。いしく相したりとて。しう人わが身さうせよといふに。かみはなにごとめめでたく渡らせ給て。つねに御からかさ驚きや候らんとさうしたりしもおかしう。其のふもとの中將久しく内裡ざまへもまいらず。いかにとなりたるやらん。いとおし。

正月元日の御ぎしき。つねの如し。

二月五日。大原野へたつ。かつら川を渡るに。みればみの時になりぬ。今幾度かかくこれを通るらんと思ひて。

久しからん君が世なれば我もかくて今幾度かこの世渡らん西山といふ所になれば。あはれにいとおしくおぼしいづらんといひしあまのすみし所。いまはなくなりぬ。向ひの明神ちかきほどにて。常にまいるといひしが。思ひ出るよりあはれ

になつかしくて。

なつかしむ心をしらすききむ向の神の如何みるらんさて大原野に参りつきぬ。辨としみつ。上卿をそくて。かへさ暮れはてし。みちたどしきに。夕づく夜かすかなるに。暮るまゝにすこし光もさしゆけば。

夕月夜うすき光を待出てみちのしるべもながめてぞ行

二月十日。春日の臨時の祭にたつ。此ぎはじめたることなれば。面白く嬉しくて。酉の初になしはらにつきぬ。ねにもやなりぬらんの程にぞ宮にまいる。ふけたる月の木のまよりみえて。庭火のかげ神さびたる笛のね。拍子のをもすこく。舞人のたちまふけしき。光を神もいかにと面白くめでたし。

君が世にかゝる光の色そふる神の心も思ひしられて

事果ぬれば。梨原へかへりぬ。つるでにちど入たうなどして。京へ参りつきぬ。

三月九日夜。清涼殿にむしやまいりて。つねの御所へまいらんみちを。藏人やすよにとひける程に。にげてかゝること、申せば。御所は中宮の御方にぞ渡らせおはします程に。常の御所へ。中宮ぐし参らせてにげさせおはしましぬ。女つとひしめきのしりて。とく女じゆ火をけちて。けんじやうとりて。これと申せば。手さぐりにうけとりて御所に置きつ。夜のおとへ。劔璽どりにまいれば。人の取出し参らせて道にあひたり。せけんそのちひしめき。大ばんのぶしひしめく。おそろしきこといも

出きぬ。清涼殿けがれて。御所もあくれば春日どのへなる。とりあへぬことなれば。御引直衣にて。ようよにてなる。供奉の人々ちよくいなる姿にて。めづらしく事々しき。常よりも面白くて。十九日。富の小路殿へ御ぐそくとりぐして。花

山ぶきありぐしてまいりたるに。權大納言のすけ殿。

ながめ。したゞ人傳の一枝に花も哀やそへてみゆらん返しに。

おりてみるこの一枝の哀より残るみぎはの花を戀しき君しかく残る木末をへこ。そ常より花の色も深きは藤の花にさして。

入しれず心になれてみし藤の誰またれども時をしりけり皆人の折て。木末の残りなくときけば。

君まちてちらとさ花や思ふらん誰なさけなく折やすつらん大納言殿櫻木につけて。

折てみる人の心のなさけよりみぎはの花の色ぞそひぬる又中つかさ。

思ひきやまちし軒げの櫻花たゞ一枝をつてにみんさはいかに又みるに哀の色そひて咲残りける花の心よ

一枝も折てみせずは櫻花たゞいたづらに散ぞすぎまし此花を一ふさ。あづまへ行たる人の許へ。ふみの中に入れて同じくやるとて。



東路の道の奥にも花しあらば雲井の春や思ひ出らん返し。

今更に哀をまさるこの花の同ト梢をながめてしかば

三月廿日。夜雨ふる。中宮太夫殿神樂をうそぶき給ひて。せうくたるくらき雨のまどをうつこゑど。くちずさみ給ふ。を物がたりにかきたらむことをきくやうにて面白し。雨風もどもにはげしければ。

物ごに哀れすゝむるけしきにて秋を覚ゆる雨の音哉

あくる日。清涼殿のかたに。大納言殿へ御どもに三人出てみれば。雨風に花はあとかたなく散て。簀子に白く散たり。

よき共の雨と風とにしばらく軒端の櫻ちりばてにけり

大納言殿。

おりしもあれ花散比の雨風ようたても春の末にふりぬる

四月十四日。松尾へたつ。おほぬさにあふひをぐして車にいる。かもならで又葵はありけり

ど。けふ初めてめづらしう覺えて。

待わびしその神山の葵草又ゆるすよの神もありけり

大納言殿の御局へ。まつかひありて。たゞいま郭公のなき侍りつるは。もし同じ聲をやきくとて。

今なかん聲をしきかば郭公をしへやりつるはつねさほしれ御返に。

君が宿にまつかひありて時鳥うやらましくも啼てける哉

いかにあはれさきか子規いまでも同ト聲と思はば雨はるゝ空にのどけく詠めして待らん程と思ひやらるゝやまひ煩らはしくて里に侍るに。新宰相殿。

諸共に詠めばこのみ思ほえてけさの雪にも君ぞ戀しき返し。

さこそぞ思ひやらるゝ降雪に我も君をし思ひいでしは哀し思ひ出つゝながめつる時しも人にさはれぬるかな

正應五の二月まで局にさぶらへば。いよく病ひ重くて。里にいでたるに。三月つごもり散りたる花に書付て。新宰相殿。

散花のなごりのみ社歎かるれまたこん春もしらぬ我身に返し。

こころはた花吹風も厭はれず唯我身をもさそへと思ふに

右中務内侍日記以扶桑拾葉集校合

群書類従卷第三百廿四



群書類從卷第三百廿五

檢校保己一集

日記部六

堯孝法印日記〔舊本行書跡〕

文安三寅年正月一日。天氣悠然屬陽春。年々の例にまかせて。五條の社頭に詣で。講はべりし三首。

社頭春

守れ神道ある御代の身の春にあふをかしこみ猶そつひへむ

社頭松

いく春もまつのはまつの春手向かされて神をあふかん

社頭祝

こころ猶道をもたて宮柱願のまにみかきそふへし

方陽景鮮七社法樂歌。

八幡

八幡山はるをわさねる春にあひてかすそふ神の恵をそしる

玉津島

道しあるよにしらゆふのかけまくも長き神を猶そあふかむ

北野  
心さへひらくる梅の色香をそいとよきたのし神にたむげん

住吉

すみの江の松の恵のかしこきは道につかへて猶そあふかむ

祇園

猶守れ神のそのふをそのまにに残すは雲の道もたしく

稻荷

稻荷山たちそふ杉のふかみどり霞になひく春風そふく

日吉

神の名の日吉さけふをかくてても春の手向や千世も重ねん

及ニ深更ニ講頌。讀師予。講師春喜譽君。法

樂以後。古今集披覽。序春部上。於ニ神前ニ讀

之。勤行及ニ數刻。終夜不ニ一睡。

美乃國眞桑庄。爲ニ本領ニ舊冬令ニ還補。仍一

昨日御下知。御施行等拜領之時。細川右馬助

入道家へ申侍し。

仰ぐ哉みのしを山のまつかひも有ける御代の道のめぐみ

返し。其日世務繁昌怨劇無極侍るに。即返

しを殊更書狀にそへて。申たまひはべる。

立かへるみのしを山の松のたれ猶さかふべき千代の行す

只今の贈答。上世をはぢざるよしなど申侍

き。今日また管領職の佳躰にて。室町殿御女

中方々の御あひしらひ。さいはひなども限

なく侍る中に使あり。一昨日の返歌下句。さ

かふる道のすえぞはるけきと侍らんといか

い。もし此方まさり侍らばこれに治定したく

存よし示送らる。道と云文字とに金言のせ

申て。此下句に定む。今日殊吉日にて侍れば。

會始の題を出すべきよし同被ニ相示。仍庭松

契久と云題出之。三善常房飯尾彦六左衛門。來て祝詞

をのぶ。典廐音信之義など。此道繁昌時いた

り侍るよし申て。様々祝かしこまり申き。

三日。寒風吹ニ雲霞。晚頭西天にむかひて纖月

を拜す。霞いと深くて。さだかならず。

夕暮の月はそれともみえわが霞に匂ふ遠方のそら

今夜修正之儀能願。

四日。漢雲還晴。民部少輔經。下總入道欣。三善

元秀。宮道親忠以下。ひねもす人々來。

五日。天氣快晴。叙位執筆師郷。

今日も日ぐらし人々來て述レ祝。眞桑庄申沙

汰之奉行三善爲教もとより。

ふみ分し未あらはれていにしへに又立かへるみのし中山

と申侍し返事に。

古にかへるもうれしなに高きみのし中山道もたごらで

六日。寒風吹レ雪。又詣でし。

世を祈り道を學に春をへてはこふあゆみは神もうくらん

入レ夜深雪。

七日。雪のうちにて參詣して。

ふる雪は袖にさゆれど神の爲春の野に出で若な摘なり

八日。出仕以前夜ふかくまうでし。

長閑に君がみかげを祈るにも神に夜深くつかへぬる哉

方々參賀毎春のとし。晚頭三善常房來りて。

一續張行せしに。

九日。白雲散亂。つとめて又まうで侍り。

歌闕



この神に霜をいたゞき雲を分つかへまつりて年ふりにけり  
沙彌素欣許にすぐにまかりて。三十六首う  
た讀侍りしに。

春天象

のどかなる岩戸のせきの明方に霞吹こす春のはつ風

春人事

夢ならで結ぶべしやは春のよのねよげにみせる草は有さも

秋人事

月をめで露をかなしふよなもつもれば老の秋さなりぬ

冬雑物

こぎかへりよのみきはの跡さめよわかの浦半の雪の友舟

戀地儀

たのみこしいなばの山のかひ有て今かへりくる契をぞしる

今度還補眞桑庄。稻葉山程近し。仍爲逸興

如レ此詠之。但彼行平中納言の古歌は。いな

ばの國のいなば山也。同名たる計におもひ

よせ侍る。不可有混亂事也。

人数。正徹禪師。下總入道素欣。沙彌常勳。

正晃。知蘊。藏原氏世。此外一族等少

々。鶴丸。

十日。又まうで侍しに。昨日夜に入て會はて

歸りしに。夕月夜其興侍き。今朝薄雪ふりて

春の空いとえんに覺えければ。六條殿。左女  
牛。五條天神。因幡堂。三條八幡宮など巡禮。  
さえかへる夕の月の面影もわすれぬけさの春の雪かな  
十一日。七日參今日にみちぬると申上。年始  
の鏡など奉りて。

いく春も猶あきらかにてらさなん千代の鏡を神も守りて

十二日。讀經稱名如レ常。

十三日。此亭月次三首會始に。

霞知春

のどかなる春の心のしる人さ空になれきて立かずみ哉

松残雪

猶残る雪さへあかすうす緑なびきそめたる春の松がえ

守るてふ道につかへて神も猶光立そふよを祈らむ

當座五十首に。

朝霞

あまの戸を明る光は霞にてはる日のごけき御代にも有哉

稀戀

誰にかは思ふ契りをわくらばにさふこそつらき心なりけれ

浦鶴

和歌の浦にあまたむれぬる友鶴の数々契る千よの行末

人数。出題予。讀師同。講師實能。中務太

輔。春喜譽丸。民部少輔顯經。法橋長

全。法橋經長。圓雅。散位爲數。沙彌

常勳。沙彌元康。藤原重隆。源貞信。

藤原正信。沙彌智蘊。藤原經俊。

宮道親忠。宗順。念阿。以上廿二

人。

十四日。讀經稱名如レ常。自室池院法印御坊

法樂二十首題御所望。則注進了。長全法橋三十

首題所望。同染筆了。自方々和歌添削事申。

十五日。勸行如レ毎日。無他事。心靜吟和歌

唱稱名。

十六日。朝天參室町殿。御祈の義被レ申。大方

殿同卷數進入。晚頭人々來て。五十首歌よみ

侍し時。

驚出谷

たれもみな出つかふよの春さてや谷にのこらぬ驚の聲

遙尋花

みよしのもたつたの奥も猶あさし心の花の道ぞはるけき

名所編

むしろ田のつるのよばひを敷島の道に友なふ人を契らむ

題予。讀師同。讀師春喜譽公。

人数。愚詠。春喜譽公。素球。太平。知安。安

道。元康。内藤。圓雅。紀元盛。安田勳。源久

國。常繼。矢野。藤原元康。内。紀元家。安

常安。興州。堅有。在岡。三善元秀。高。藤原

元賀。源元伸。橘元家。野。興阿。以上十

八人。

十七日。勸行如レ常。每春之例にまかせて。七所

にて御百度つとめ申せし。

十八日。三善爲數もとにて。月次會始に。

都早春

雲きえぬみ山もさかくかすむより都の野へに春ぞしらるゝ

梅薫風

匂ひくる風さへうれし梅花はるにあふみの袖につまむ

寄世祝

いにしへの正しき道を其儘に今も行なふ御代のかしこさ

當座十五首に。

驚告春

のどかなるよのしるへかも驚のさへづりそむる春の初聲

岡早蕨



誰かけさ早わらびあさる春きても寒き岡への霜のふりはに

契戀

かほるなふ頼めしまゝに聞えくる入逢のかれは偽もなし

欲顯戀

いかにせん浮身さがむる大かみの床の山風たのみがたさを

海村烟

もしほやく浦はも民のかまごゝや賑はふ烟たえぬ日もなし

題予。講師同。講師貞基。

人數。愚詠。永祥。飯尾肥前時繁。左京圓

雅。貞基。布施熙基。齋藤源持子。富永修

爲數。常勳。貞秀。以下數輩。

十九日。中龍上人來て。觀經講讀。信心銘肝。終

日勤行無他事。男山へ進代官。

廿日。畠山修理太夫入道。家にて。月次會始

初春松

今日しこそ子日にかざせ春にひく心なたれの松のものは

對花

ななざりにいひ出すへき色そなき見る花の陰開鳥の聲

霧

夕つくよきたかにもなき松のはに猶霧まふ秋風そふく

攝衣

秋さむき淺茅がすゑの麻衣夕日かくれの霜にうつなり

名所關

ふはの山關の坂屋の板ひさし久しき道もあらはなるよに

旅

故郷にいふはかりの道も哉末もつゝかぬゆめの浮橋

出題飛鳥井中納言入道。講師同。講師

宗砌。

人數。飛鳥井。亭主一宮左京太夫。予。

正徹。春日三位入道。畠山次郎。圓雅。

賢盛。常勳。心惠。正晃。忍誓。常

佐。智蘊。宗砌。以下數輩。

愚詠中霧歌及披講の所に。題一首不足。俄

可詠の旨。題者密々被申候間。馳筆了。講

師宗砌。初春之松ヲヨメル和歌と讀上。心中

斷腸。賢盛神樂歌に。梅がえうたふと詠也。

催馬樂也。

廿一日。兵庫助貞親もとにて。月次會始に。

初春見鶴

春くれば花さく色をまな鶴の千代のすくくる峯の松がえ

當座三十首に。

霞春衣

いく春そ空に霞の衣手もつられ初める千代の行末

祈久戀

つれなくともこのみしめは朽に鳧更に靡けさかけや初まし

名所松

今日よりそみきさ語らふ武隈の松の本たちゆかしかりしを

兼日題他人。當座題予。此會自今日出頭之

間如レ此。臨期之義也。

廿三日。一色左京大夫教親家にて。月次會始に。

竹週年友

とのほの花にもなひく千代のかけを窓に友なふ春のくれ竹

當座五十首に。

野雲雀

夕日かけ遠方のへは長閑にてあかる雲雀の聲のひまなき

寄水戀

思ひのみこりつむ事をやくにして苦しく辛き蟹のもしほ火

名所鶴

歸りきて結ふもうれしたつのすむいつぬき川の古き流を

思往事

數島の道にいらすはさのみかく思ひもいてし代々のふるも

出題予。講師同。講師智蘊。

人數。修理大夫入道。亭主。正徹。三位

入道常圓。沙彌周道。圓雅。正晃。

常勳。範盛。貞爲。賢盛。智

近藤

京亮

三上右

入道

蘊。時阿。壽阿。常佐。

廿四日。細川右馬助入道道賢家にて。月次會始

に。

庭松契久

宿にしろ松の齡ひの思ひ出を八千よの色に契る春かな

當座五十首。

題關

をしなへて人の心のなひくよを空にもみする朝霞かな

開戀

いもせ山中なる川をいかにせん吹こす風はきく渡るらん

神祇

かしこしな神の心もすなほなる道にまかせて現るゝさは

題者予。講師同。講師三善元秀。

人數。管領。亭主。正徹。治部少輔。久。

下野入道。中務太輔。僧都長算。

遠江守賴益。天竺持字。常勳。橘元

素球。智安。元康。常勳。橘元

吉。釋庭。藥師寺元明。元盛。橘元

下廿餘人。

廿五日。三寶院門跡にて。社頭祝君と云事を。



各々よみ侍しとき。

この門は神のみ室もひさつにて老せぬ君そ千代をむかへん

當座連歌百韻あり。及曉天一退出。

廿七日。沙彌元康來。自典廩勅撰清書事談

合。爲往來云々。

廿九日。任大臣。

二月一日。勤行如每朝。太政大臣家より。正月分百首歌の内。題五首給り侍りし時。

春山

春の日の名におふ神も峯高き君かみかけに光そふらし

秋河

誰か今あその河原にふむ石の數もたさちて月をみるらん

秋社

よや寒きいろやはうすき衣手の杜の露霜置まよふ頃

冬風

ねくらさふ鳥もうかるし聲す也木からし寒き夕くれの空

禁花園の難波の梅盛に侍し時。細川右馬助

入道のもとへ。一枝をくり侍し次に。結び付侍し。

この花はなにはたかつの高きよに及ふ色香そ知人にせよ

返し。とのほの花もたかつの梅かゝにふかき心の色そしらるゝ

十七日。兵庫助貞親もとにて。月次の三首に。

夕春雨

かれの音は霞のよそにくればて、春雨近し軒の玉水

名所花

いもせ山匂へる花の瀧津せば中に落たる聲もむつまじ

祈身戀

うかりける我みの程に初瀬路の苦しけれさて祈りやはせし

當座三十首に。

春夜

心ありて花をばよきよかすむ夜の月のかつらをしほる春風

春杉

はるをへて又おひそふもふる河やいつれ昔の二本の杉

春衣

あま人もしほなれ衣ぬき置て霞やかつく春の夕なき

春霞

身にはたゝ老の浪のみ數そひてみしよの春を立もかへらぬ

題者予。讀師同。講師親忠。人數如先

月。

十八日。三善爲數もとにて。月次三首に。

河柳

青柳のはるのかけこや立田川からあぬくる水の白波

春月

のさかなる光は空に猶みちてかすむさもなき夜半の月哉

忍戀

うき身しのふのあさ衣たゝうらふれてよをや盡さん

廿三日。實相院准后住吉にまうで給て。社頭の

松の枝につけて。神前にて思ひつゞけ侍る

とて。給りし。

道に恵む神の心の知ればわきてそみする千代のためしを

御返し

あふきみる千世のためしに道を思ふ神と君との恵しるしも

廿四日。一色左京大夫教親家にて。月次三首に。

歸雁

こしちをば思ふかたさて行雁の鳴れまかはぬ春のよの空

初花

さほ姫の今や手にまくいさ櫻吹さく風も匂ひそめつゝ

契戀

草の名のさしも人やは思ふへき我はいふきのやます忘れず

當座五十首歌。

早蕨未遍

雪きゆるたるみのうへはもえ初てまだ春しらぬ谷の早蕨

夕落花

けさまては花にいさひきふげやたゝ夕への雪の庭の春風

寄枕戀

浮なのみたかせのよこにさばく也いつ薦枕かばしそめまし

雲浮野水

そこそなき野澤の末の雲水の浮てたゝふみにこそ有けれ

水江蘆

みさひさへふるきはり江の蘆のはの昔もなひく浦風を吹

題者予。讀師同。講師壽阿。人數如先

月。

石清水社に奉納のためとて。細川讚岐守す

ゝめ侍し五十首に。

梅薰袖

咲むめに神の昔を思へさや今も匂ひそみつの衣手

聞時鳥

時鳥初音かたらふ枕こそ老のれさめのうさもわするれ

早秋露

秋のくるかたのゝみのゝ白しはに馴てをきちる露や増らん

浦千鳥

和歌浦にもさより通ふ濱千鳥猶みちありてなるゝよも哉

祈身戀

長らへばうきみしめさへかくてこそ朽ぬ契の限りをもみめ

三月八日。細川右馬助入道道賢。家にて。月次三

首。去月の分なり。

浦春月

霞さへおほふ片枝にもる月もえならぬ春のおふの浦なし

山寒花遅

ささかへる袖ふる山の朝ほらけいつか櫻の雲にまかばむ



鴻始懲、いつしか板間もさむる初時雨さそなくたさんれやのさ進  
當座三十首に。假名題。

今日の子日の

みち廣き千代のためしに引初つ今日の子日の松のここのは

梅のにはひに

やされ月梅のにはひにかすみても又光そふ花の上の露

春のくれがた

をのづから長き日影にまこわして心のさけき春の暮かた

題者予。講師同。講師元秀。人數如先。

今日吉日の間。福壽典殿養子。管領弟。初めて物をなら

はしそむべきよし。申され侍し程に。詠歌大

概初つかた。仍子日の歌其意趣をあらはし

侍り。二十首の題をさぐりて。

夜思花

櫻花明行色いそくらん月さへ句ふこよひならずは

十三日。蔡花園に詣で。法事の後。御室木寺

の神殿などの花を。只獨眺望して。

たくひなき色をしるべきうき身さへ獨み山の花のかけ哉

十四日。黒谷の花のもとに。三寶院門主を待奉

る事有て。室地院法印皆門下人々。ひねもす

花にむかひ侍し時。

夕日影うつろひけりなげさの間に思ひ立にし花のしら雲  
十八日。三善爲數もとにて。月次三首に。

遠尋花

みよしのもあさき山路に分なれぬ花ゆへしげき春の人めに

花下友

なれにけりあかね一木の花の陰哀いくよの契なるらん

旅宿

宿りをもぬさなもさらぬ旅なれや手向も同く花の下ふし

橋元吉薬師寺四郎左衛門すゝめ侍て。崇徳

の法樂百首に。

子日

子の日せし春もわすれぬ松山の神やむかしに心ひくらむ

虚構

よかへてもそのものはに立花の匂ひ残れる陰はむつまし

七夕

天の河よりくる涙のたまくも逢瀬にさへや心くだくる

落葉

露霜の染めぬ涙も夕くれの落る木のはにいさなはれつゝ

佛名

さよもはやたけの燈火更にけりさなる御名や残り少なき

初戀

思ひしはつとやいてしわか鷹のなれぬ縁に遁れえぬよを

祝言

八すみしるそのかみ高き惠もてやすくや四の國守るらし

出題予。  
太政大臣家月次續百首に。

三月三日

今日さてや流れも清き水くきに取かはすらん花の盃

立秋

秋ばけさたつの市人いつしか露もうるほす袂なるらむ

爐火

徒らにわやの埋み火かたらひて窓の光をそむくへしやば

山

高きよに風の姿も立かくれふとの煙の絶えぬ道さて

親王

とのはの花そふ竹のその影や草にも木にもあらて句へる

廿八日。一色左京大夫教親家にて。月次三首に。

水邊躑躅

浪よする磯の岩ほに咲つゞしあまのたく火の影かあらぬか

山家暮春

この頃はいつち行らん山にすむ山人さへに春をしたひて

鐘聲何方

ねぬる夜も夢のたうちも鐘の音もそこはかさなき曉の空

當座五十首。

暮春天

空にたゞ霞の關しまさしかれ暮ゆく春はさめあへずとも

暮春磯

たえくゝに霞むいそへの夕附日みらく少なき春のかけかな

暮春車

小車のめくる日數に春も哉花の錦の組はたゆとも

暮春旅

我のみそなく峰こゆる行春の鳥は空路にかへるゆふへも

出題予。講師同。講師壽阿。人數如先々。

此會果て。沙彌智溘庭の藤盛に侍しを。立よ

りて見侍るとて。人々一首のこし侍し時。

かへるさそいと忘るゝ言のはに心をかくる松の藤波

廿九日。橘元吉人のすゝめ侍るよし申て。三十

首題所望せしに。同よみてつかはし侍し。

初春霞

春さいへは猶のさかにて天津空限しられす立かすみかな

契待戀

今宵たにいつしかかばる心かな更るまでさば契らざりしに

曉遠情

老の浪よるのれ覺の枕にはまづ通ひけりわか浦風

親元筆をかきならす。

同日。智溘。夜前一座難忘侍るよし申て。

松風に匂ひし花のいろくそ面影にたつ宿の藤波

返し。

いるそふる君かとはのはなくばしほれやばてん宿の藤浪

四月一日。勤行如三毎朝。



三日。石清水に詣て。六首歌讀て奉りし時。

春朝 白雲のはなに朝ある朝はらけ雪さへにほふ春の八重山

夏夕

月をそく出るかたの夕ぐれに聲も雲間の山郭公

秋夜

遠方やかはせの浪はみえわけて月をいさよふうち山里

冬曉

さえにけり明る向ひの里かくら霜をかへのさうたふ聲

戀心

限なく塵ならぬ名も立やせん空にしめゆふ心つからに

神祇

石清水あふく心のごも鏡猶もかゝみて神さまもらむ

同し時紀元盛參籠して。廿首うた法樂申は  
べりしに。

首夏朝

歌闕

祈逢戀

今そしる祈ればかなふ理になひくみしめの結ぶ契を

曉更鶴

時をしる八聲のさりも治まれる御代は今と神に告らん

題者予。讀師同。講師元盛。已刻參神前。酉

刻歸京。其間ニ於橋本坊法樂。當座遂講

頌了。

七日。三善爲秀飯尾備中守もとにて。初めて三  
十首歌よみ侍し時。庭躑躅賞翫。

首夏

夏きてもさゝれば匂ふ岩つし八千代の春を殘すこそみる

早苗

つくはれの茂き恵にあふ民やすそはの田井に早苗取らん

鶴川

月はや入ぬる西の河よさに山あひ出るうかひ火のかけ

契戀

我方にあだなる浪はこされさも涙せく袖や末の松山

久戀

契しも袖ふる山のためしにてけに瑞籬のみつからそうき

水郷

たちかくれよつ道の道もさゝ波や大津の宮の深きためしに

十七日。伊勢兵庫助貞親許にて。月次三首歌に。

賀茂祭

いつまでそいつきの宮の宮人もけふに葵をかさしけんよは

薄暮時鳥

れくらさふ習もしらて暮行は猶あかるゝ郭公哉

寄雨戀

なをざりに侘づれんにかこちしや月に慰む雨のかれこ

當座三十首に。

郭公頌

此頃はりの栗のちこちになかぬ日もなき郭公哉

名所鶴川

かゝり火のいさよふ浪にしられけり夜河更ゆく宇治の山本

述懷非一

とのはも心のたれもつくは山分る道には影茂くして

時阿去月をこたり侍しを。同しく張行せし  
に。

雲雀

朝ゆふにあかる雲雀の心さし我道芝にいかてまなはん

遅日

色にそむ心のはなの咲散るにのさけき春の影を忘るゝ

懷舊

郭公しのびれそへてもつてんみしよの人の行を知らも

廿一日。畠山右馬頭入道。仙室家にて三十首歌

讀はへりし時。

庭新樹

歌闕

盧橋薰枕

匂ひきて夢はさまらぬ枕にも過し昔を殘す立花

峰照射

さ月やみはかなき鹿のよるほこそ哀に峰のほかけいさよふ

立名戀

あふにしもかへぬ思ひの唐錦たまく惜きなのみふりつゝ

相互恨戀

覺束ないつたよりかくゆりけんつらき二見の浦の藻鹽火

雲浮野水

朝雲のまよふ野さはもよそならぬ庭の清水の面影にみゆ

出題予。讀師同。講師壽阿。

人數。正徹。亭主父子。素欣。智蘊。壽阿。

廿四日。祭の日。智蘊もとより。かつらの枝に  
付て申侍し。

ぬるうちに神のみせける花をそはけふの挿頭に思合せて

夢に。八重櫻を鉢にうつくしくそだてたる

を。よがもとへ人のたびたるを。これかれめ

またきて。みはやしめて遊び侍るよし覺ゆ

るとて。如レ此申云々。

返し。葵に給ひつけ侍き。

夢のつけあふひを結ぶ今日さへに心かけける程を嬉しき

廿五日。一色左京大夫家月次三首。

山新樹

きのふかも柳ざりしは御影山そのかけわかつ茂りあひぬる

曉時鳥

心あれや曉おきをもよほしてあかすかたらふ山郭公

立名戀

うかりけるなたかの浦に迷ふ哉扱なびきもはかくよもなく

當座五十首に。

恋早苗



はなみんと春もいそぎし櫻田に又初苗をどりやそめまし

野徑夏草

いにしへの水の心はえもしらす茂る野中に草や結ばむ

寄海人戀

心あるあまごなりてもいつまてかつれなき人を待か浦しま

湖水眺望

さゝ浪やよるこてかへる海人もなし月に漕向ふ奥津島やま

夕開法

いほしめて聞は夕の浪の聲ふかき御法に通ふなりけり

出題予。讀師同。講師壽阿。人數如例。

畠山匠作二月以來無出現。依違例也。會

の間に園の豆をおりいたし候侍しかば。人

々こぼれくふ。俳諧に紙の端に書付侍る。

敷島の道のすさひにひろひくふとはの園の豆にも有哉

廿八日。畠山修理大夫賢良。家にて月次三首に。

卯花處々

花さきぬ向の里のうつき原我住かたも同トかきほに

對月待郭公

時鳥なれもかつらへ小夜深て月待出る有明のころ

來不留戀

うつりゆくかりそめふしのさゝ枕一夜の夢も結びはてなて

當座五十首に。

子規何方

兼題松蔭新涼

杉

郭公聞そ定めぬ鳴こも一村雨の雲まよふ空

寄星戀

やどりきてながるゝ星の影もなし涙の床の曉の空

松作友

年へても直き心のしるへさや松のみさほをさして契らん

徑苔

いかなれば秋もいほも通路も深き契りの苔にあるみそ

心靜延壽

敷島の道に心のいる人を老ても和歌の浦にさもなふ

題者兼日飛鳥井中納言入道。當座予。讀師同。

講師壽阿。人數如先々。

講師壽阿。人數如先々。

玄輿日記〔舊本行書跡〕

文祿五年七月十日。薩州鹿兒島より近衛前左大臣信輔公御歸洛也。黑齋玄輿令供奉。御船海上に出れば。鹿兒島の僧俗船にのり。御名殘をしたひ送り奉りぬ。十日の曉景に。大隅濱の市に御着船。則相良善右衛門尉所御旅館になる。明る十一日。龍伯館にて御歌の會を申すめらる。

兼題松蔭新涼

杉

立かへる名殘こそあれ松蔭は涼しき秋のやどりさ思へは

龍伯

暑日の影も忘れて馴なるゝ松の下枝に秋風そふく

近衛殿 長治

問よりも替らぬ友さ松蔭にたたらふ秋の袖の涼しさ

玄輿

枝しけき松の下露落そひて衣手涼しあきの初風

當座早秋月

見る程もまた短かよや秋さいへは月にあかなき初なるらん

薄露

行袖を結びもさめよ糸薄末はの露は玉と散さも

夕鹿

狩人のゐるやもゆるを哀しらは妻こふ鹿の夕暮の聲

隣播衣

幸侃

聞馴て近き隣のきぬたさへ更ゆく空はかすかにそなる

河霧

秋風にまほひく船の行衛にやわけていらまし淀の河霧

籬菊

許されぬ籬のうちの菊の花たゝ咲こすをよそにみよさや

嶺紅葉

みる人の心は行て手折ぬもかさしになれる嶺のみちは

寄鏡神祇

神垣のうちゆたかにもうつし置心やよの鏡成らむ

此外御會の人數十五人程侍し。晝より初り。深

更になりて御成就也。十二日には御座敷能あり。十三日には秋月入道宗闇舞臺にて。能九番興行なり。十四日早天にめぐりへ御船よりうつりおはします。幸侃假屋旅所になる。十五日はめぐりへ御逗留。十六日に庄内え渡川なりぬ。龍伯庄内まで送り給ひぬ。十九日幸侃宿所にて御當座の御歌あり。折節草花座敷に侍れば。

小男鹿の音も通はなん秋草の花をかめにさせる宿には

龍伯

御家門様被遊候。

花々を分にし野への歸るさや手折もてきて瓶に挿すらん

幸侃

秋草の花もてかざる宿と見は問來る袖にしほしこいま

玄輿

玉たれのこかめの花は秋の野の露にしられす盛成哉

此外にもあまたはべりつれども書もらし侍り

ぬ。廿日幸侃所にて座敷能あり。打つゝき二十

一日に秋月入道興行なり。廿五日しふしえ御

着被成候。大慈寺といへる寺。御旅宿になる。役寺の坊主參扣。則和漢あらましある。拙者發



句仕うまつるべきよし。近衛様尊意のまゝ仕りぬ。役寺松木ふかきどころなれば。

波のこゑまつに入江の秋の海 玄 輿

蘆火招釣船 杉

又御出船を祝侍りて。 玄 輿

追風も有明の月の船出いなしふしへ御逗留の間。松良吉右衛門尉。福崎久五。兩人御旅の調仕りぬ。閏七月五日しふしを御出船。くしまのうらちの、湊といふ浦に夜更て御船を定めらる。秋月入道馳走被申候。七日ちの、湊を漕出侍れば。唐土かけて見え侍りぬ。和田の原漕出て見れば久かたの雲井にまがふ沖津白浪の歌。思ひあはせ侍りぬ。其日暮かたにとの浦へ御着船なり。彼浦に十日餘り御船をとめられ候。御つれづれの餘りに御歌有。

海邊月 杉

和田の原むかふ嵐にいかなれば月の御舟のまほに行らん

初會戀 同

つれなきに心つくしのはても今ありける物よあふの松原

畷中衣 同

峯を分麗の露にぬれ衣野路ゆく程や萩が花すり

同上題をくだされて 玄 輿

沖津風吹につけてや夜はの月くまもなききよなる白浪 同

しきかばす新手枕が別れ路のうきをもしらぬ心なりけり 同

袖の露にやされる月の光りまでやつしはてたる旅衣かな 同

又詠五首和歌。

初秋風 玄 輿

秋の來るかたさしられて西の海の波吹風も音變る也 同

松下萩 同

庭に生ふる松のれさしや通ふらん吹もたゆまぬ風の下萩

海邊曉月 同

曉の雲は消つ、磯山の嵐の上の月のさやけさ

寄露戀 同

我袖にくらへてやみん消かへりおく夕影の草の上の露

社頭祝君 同

あふきくる君か干させば住吉の松の縁にたくへてそみる

此外に近衛様二十首の御歌有。愚詠も廿首あり。かくて浪風静まり。十五日内の浦といふ

浦また御成候。道すがら面白き磯山の有様など有中に。もうどの岩やを見侍りて。

千早振神代に今も返る波の玉よるなききまへにそなる

拙子。武神阿蘇の明神は。うがやふきあはせす

御發句有。

萩のこゑ梢にもろし濱楸 杉

眞砂地をき秋のゆふなみ 玄 輿

五十韵程御沙汰被成候。拙子又發句仕ふまつ

りぬ。

夕きりに日の影つゝむみ谷哉

と申候。

京都にて。紹巴隱居三井寺へ行て。此發句にて百韻獨吟に申つづけみせ申候へば。右の發句長あはれ候。八月一日御船を出し。海上壹里計過侍るに。日向船とやらん。岩にあたり白浪に沈ぬ。乗たる人はたすかり。哀なる有様をみ侍りて。いよ／＼船路のかなしきせんかたなし。大島と申浦へ其夜明し。三日にほどいふ所へ着給ふ。雲どまりと申所。近くみえければ。影きゆる月やいづこの雲どまり

ふる寺のあるし顔にて淋しさのまち搦たる御宿也けり。俄に塵かきはらひ。疊所々敷て。二三日御逗留也。夫より廿五日御船を出し。同國よなふつとやらん。人家すくなき浦に御着船也。此浦にて



へやり侍ると見えしも。とはり思ひしられ侍りぬ。同七日にいまの海へ渡りぬ。青島こく島など、申浦くうき泊りして。讚岐へうつりぬ。此に松山のみへたるを。いかなる所ぞと浦人に問侍れば。是なんしら峯と申侍る。保元のいにしへ。崇徳院の身は松山に音をのみぞなくと遊ばされし御歌。今のやうに覺え侍りき。十日備後とも浦へ着給ふ。夫よりは順風も心のまゝにて。播磨の室の津に御着也。十五日朝天に。室の津を御出被<sub>レ</sub>成。波路はるくうつり行に。高砂の松などみえ侍りぬ。彼松。愚身先祖一見の事。高砂の謠にみえ侍れば。由緒なつかしくみ侍りぬ。最中の月を須磨明石にて詠め侍りぬ。

時しもあれ名高き空の月影を今宵明石の浦にみる哉

と申侍りぬ。近衛様御詠歌前に書付侍りぬ。夫より和田の御崎。難波の浦つたひなどして。大坂近くなれば。船子どものうたふ聲にぎはしく成りて。十八日大坂へ着船なり。地震の折節。浪たかく風はげしき海上。つゝがなく侍り

つると。佛神のまもりうたがひなく思ひ侍りぬ。近衛様の御門前市の如くにみえ。枯たりし木の春にあへるごとく也。周公旦のさすらへ立歸たるも。かくこそ思ひ侍りぬ。大閤様より。福原右馬介。長谷川右衛門。兩使御迎として。参られ。都へ御上りなされぬ。其頃愚身所勞之義有。愚宿せんば町也。近衛様拙子御覽あるべきとて。よるに成て御渡なりぬ。忝事共なり。もうしう法印に被<sub>レ</sub>仰。良藥を用侍りぬ。人心付侍りぬ。武庫様よりも伊地知與兵衛にて御たづね被<sub>レ</sub>成候。忝事とも侍りぬ。然るに幽齋老より御使下着し。九月六日一葉のふねをさし。秋風にさそはれて淀河を上り侍りぬ。江口の里など過て。三島江のあたりにて。夕月夜はどく入て。村蘆のほのかなるかげ猶あはれなり。あくれば長月七日。八幡山山崎など見侍て。伏見の入江に着侍りぬ。八日武庫様へ参上。武庫様拙子病氣草臥を御覽被<sub>レ</sub>成。忝尊意など侍りぬ。重陽幽齋老吉田より伏見を御下り也。則拜<sub>二</sub>尊顔<sub>一</sub>也。十一日。竹崎千左衛門尉幽齋老御用の

事ありて。薩摩へかへし申候。伏見にて盛方院良藥を用侍りて。病氣よく成侍りぬ。伏見より九月廿四日京え上り侍りぬ。同廿六日吉田にて。幽齋老御興行。

爪木こる宿さへ秋の山路哉

まかきを近みをしかなくくれ

見渡しの四面の原は霧ふりて

二位法印玄旨

兼如

玄與

廿七日。昌叱へ行侍りて。近衛様を参上申候也。

十一月一日。吉田より幽齋老御供申。名所々々を御おしへ候也。吉田より新黒谷を通り。東三條の森。鹿の谷杯を見侍りて。南禪寺をまゝいりぬ。南禪寺と新黒谷のあはひに法性寺有。如意かたけなど見え侍りぬ。僧正遍照の古跡。花頂山夫より。祇園の社。八坂のたかつらのほし。鷺峯りやうせん双林寺。きおんはやし。下河原六條鳥邊山。あみたか峯東岩倉。又鳥邊山の上に住心院しんけいの舊跡あり。東山の紅葉を見侍りて。

冬かけては山に見ゆる薄紅葉猶も時雨の雨や待らん

と申侍りぬ。夫より東福寺通天橋を渡り。いな

りの社。藤の森。深草を分過て。伏見へ着侍りぬ。神無月十一日だひごの隣石田と申所え。玄蕃頭どの御座候まゝ参りぬ。十三日紹巴幽齋三井寺へ行侍りぬ。だいご寺迄は。玄蕃頭殿か送りなり。笠取山。日野。山科。音羽里杯通り。相坂を越大津え出申候。志賀の山ひらの高ねのしぐれ。鏡山もかきくもり。水うみの船のゆきかひ。たぐひなき有様也。大津町にて玄蕃頭どの役人参られ。途中にての御振舞。筆に盡しかたき事どもなり。三井寺坊舎皆々くづれはて。紹巴の栖古寺の傍也。終日遂<sub>二</sub>閑談<sub>一</sub>。日くれ侍れば。歸り侍りぬ。三井寺の鐘かすかに残りて。淋しき事ども也。神無月十九日大比叡の雪を見侍りて。

東路の空に心の通ふ哉都のふしの雪をみれども

と申侍りぬ。又發句に。

出る日やおしむ初雪朝曇

雪にみるすゝきや秋を忘れ草

又よし田に泊りて。

ふかきよの夢路に通ふ松風は月みよとてや驚かすらん

十月廿三日上京。兼如宿にて興行。



さふ宿のかこさなりけり夕時雨  
庭に紅葉のちりのころかげ  
兼 如  
玄旨法印

廿四日近衛様へ祇候。廿五日伏見へ下りぬ。其折節建仁寺の雅長老へ参扣。又十月十七日紹巴より合點の連歌到來。其便宜に松前の昆布送給也。霜月より慶長元年に改。霜月三日幽齋老拙子と兩吟被遊候。四日八ッ時百句成就也。右の兩吟名譽の由。紹巴老人より褒賞の一書預り候。同四日幽齋御宿にて中國太守毛利殿參會仕候。飛鳥井殿など御座候也。毛利殿御盃御さし候。其晚景若狭少將殿御發起にて。伊勢物語幽齋御講尺也。聽聞人數。少將殿。木下宮内少輔殿。山名禪高。山中山城守殿。溝口大炊介殿。其外歴々御人數也。同日夜に成て紹巴より書狀并松前の一預り候。十五日吉田へ上り侍りて。明十六日。菊亭前右大臣殿幽齋御宿所にて御茶湯也。墨跡はきとうの筆かゝる也。御相手に拙子御座鋪へ参り侍りぬ。夫より書院にて終日亂舞。觀世大夫。其外京中の名人ども参り候。幽齋四番目の御子茶智丸。太鼓遊ば

し候。十七日近衛殿へ伺候。十八日吉田へ歸り侍りぬ。其日幽齋老碁の會御興行。京中の碁打皆々被レ参候。本因坊など也。せんやも被レ参候也。廿日吉田にて。連歌御興行也。

氷りぬて行水ふせく河邊哉  
蘆の枯葉にまじる萍  
春風に田面の柳色みえて  
昌 叱  
玄旨法印  
玄 興

日野大納言殿など御出座也。其懷紙。從禁中吉田神主殿を以被レ成。勅言。獻覽に侍り申候。拙子第三一せならぬ冥加の由。京都にて人々被レ仰候。廿一日北野社へ参詣候。社頭にて。春にみん山口しるし冬の梅  
と仕候。能禮にて一折かへる道すがら。嵯峨山のついきの雪を見侍りて。  
日のいろもこほるか今朝の峯のゆき  
夫より。日野殿飛鳥井殿三條西殿などへ参りはべりぬ。廿二日盛方院参り。南禪寺へ茶智丸様御逗留のまゝ。参りぬ。廿三日上京。幸前興行。

ちりちらす雪さへ花の都かな  
こすの外山のさむき朝風  
幸 前  
玄旨法印

廿四日近衛様祇候。鷹司殿御座候也。將基仕候。廿六日南禪寺にて。茶智丸能九番被遊候。

廿七日伏見へ下りぬ。三條河原のあたり曉通候。寒月の躰言語同斷。廿八日より伊勢物語の註寫し侍りぬ。八條宮様へ幽齋御傳受の註なり。京都へも拙子下國迄は禁中八條様。御兩所まで御寫被成候。注にて極月五日常心様にも。幽齋老能九番御興行。茶智丸三番。常真二番。老松などなり。樋口又次郎兩人にて候。重平一番はやし候。九日に幽齋老丹州へ御下向。拙子は御留守居し侍りぬ。是書寫の本多き故也。十日に近衛様より御書被下候。紹巴より一札到來候。盛方院より寒中の藥又々給候。七日薩摩より安右衛門参候。文などのほり候。十一日に紹巴老え助五郎遣候。巴より美濃紙十帖給り候。廿三日近衛様を伺候。觀修寺殿など將基仕候。笛の名人安中其外公家衆御參會の座敷也。廿五日。  
冬木にも春や立枝の梅花  
杉被遊候。

出る朝日のかけ寒き庭  
と拙子仕候。

廿六日。龍山様。光照院殿。入江殿。大炊御門殿。富田殿。昌叱など夜更まで御酒宴也。廿七日聖門様龍山様又々御參會也。廿八日に御家門様御馬に御のせなされて。伏見え歸り侍りぬ。慶長二年伏見幽齋老御屋形にて年をこえ侍りぬ。

試筆  
吳竹のふしみの里の朝露に一夜をこめて春や立ちん  
發句  
こぞたちて今朝光そふ春日哉  
玄 興

袖はへて若菜摘のゝ行手にや明る子の日の松をしめなん  
七日の日。紹巴へ右の發句にて。獨吟申候て遣候。其かへりに紹巴試筆預候。  
谷も今朝よそならぬ春の光かな  
又醉中の狂句として。  
紹 巴

皆人は世にあふ坂の春さいへこ我身は老のくたり坂也  
又紹巴七十三歳の年のくれの晦日に。  
ながらへて浮山住も七十のみ冬の暮のおしまるゝかな  
書付給候。其時筆など預り候。同十一日丹州よ



り御狀被下候。

試筆 二位法印玄旨  
ふる雪のふかき山路も春さ立としき越てかすむ色哉

丹州千とせのうらちかきゆへ

同

立かへり千とせやよばふ浦の波  
十二日近衛様より御書被下候。本壹札薩摩表町田入道存松より被頼書遣候也。十六日近衛様より被成御書。則出京申候也。同日紹巴より合點の連歌到來也。十九日上京。いまだちうちにて一折有。兼如同心也。廿日勸修寺殿へ參候。さげざや被掛御意候給也。廿一日近衛様にて一條殿御目にかゝり候也。廿二日近衛様へ留田殿伺候也。廿三日近衛様にて連歌御興行。昌叱其外廣橋殿。勸修寺殿。西洞院殿など。拙子も御連衆也。廿四日紹巴にて一折興行。廿五日小野へ參詣也。法樂に十首の歌よみ候也。近衛様も被遊候。かしら字を置く也。家門息災安堵此字也。

夜梅

玄輿

風ならておそろかれけり春夜の夢路に通ふ梅の匂ひに

花近藤

百鳥の聲さへちかしこすのこの花の盛の明ほのゝそら

見花

村々の霞も消て蘆のやの浦のみるめや花にからまし

池邊藤

袖はへて折やかさく玉敷のみきりの池に匂ふ藤浪

浦歸雁

暮渡る浦半の波のかへるさや雲井の宿の心なるらん

野旅行

さらぬたに旅の衣の露けきに小篠かた敷野路の夕くれ

夕颯

いつはあれさ淋しかりけり山里の暮る梢のむさゝひの聲

夜風雨

明やらぬよるの船人いかならん舟ふりそひてあらし浦風

海邊鶴

むは玉の夜半の月影浦風にさへまさりてやたつの鳴らん

祝言

さきはかぬ恵みの程は春日山峰の朝日の光りにもしれ

廿六日兼如にて。一折興行也。廿七日近衛様に燈下片時に十首被遊候。愚詠も十首也。廿八日幽齋老御上着。吉田にて御目にかゝる也。むすめへくし小袖被下候。廿九日伏見へ御下向。御供申也。大佛御門跡様へ參候なり。二月一日古今真名序の清傳濁受申也。同日宗技一卷寫し。新古今注の書そへ仕候也。五日京へ上

り申也。六日近衛様參樓の御所にて。御連歌興行。并御當座の歌あり。七日近衛様へ。幽齋老御案内し申參候也。十日清水觀音へ參詣申。法樂に。  
いろかへて四方の梢に咲花もあまれき春の光さそみる  
又清水寺にて。

あし引の山風吹は散花の波やゆらん谷のかけはし

十一日幽齋老より。態御飛脚給り。其故一條殿御連歌に參候得ども。ふしむへ下り申候。十二日東條殿にて。黒田如水老餞別の連歌。

枝々やあひにあは緑の糸柳

二月六日。近衛様系櫻の亭にて。かしら字を置て。御當座あり。

山櫻 龍山  
るいもなき花は櫻のよしの山ちらぬもちるも雪さみる迄  
松蔭  
見るまゝに池のさゝ波藤浪のさそはれこゆる岩れ松かれ  
春日  
おろかにも誰かおもはん春日山あまれき神の深き恵を  
早春  
千々の秋も宿にや経なん年くしまつへる春をいばふ諸人  
水鳥知主

山櫻 龍山  
るいもなき花は櫻のよしの山ちらぬもちるも雪さみる迄  
松蔭  
見るまゝに池のさゝ波藤浪のさそはれこゆる岩れ松かれ  
春日  
おろかにも誰かおもはん春日山あまれき神の深き恵を  
早春  
千々の秋も宿にや経なん年くしまつへる春をいばふ諸人  
水鳥知主

見るまゝにちかこりつゝも鶯鴨の我になれ行池のおぼしま

伊勢

守れ猶清き流れやわたらへやいすしの川の末絶ぬ世を

朝萩露

聖門様

一かたはこほれやすらん萩が枝のをもげに置る庭の朝つゆ

池柳陰

柳かけ梢をひたす池水の底のみざりや猶まさるらむ

石清水

長閑なる春まちえつゝ石清水花をかきしのけふの舞人

籬豊麥

奈貝の舞人

みだれそふ籬の露の玉敷の床なつかしき花の色かな

河時雨

聲高き河瀬の波や水上の山風さそふ時雨なるらむ

水邊月

よせ歸る波まのかけは遠近に見えてすゝしき秋の夜の月

庭霜

日ののこるみきりなからも突竹の葉分の霜やかつ結ふらん

夕納涼

二月十四日伊勢へ參宮申。富田信濃守殿馬御馳走也。相坂を越大津粟津を過て。みかみ山鏡山など見て。水口といふ所に着侍りぬ。十五日鈴鹿山を越てあのを津に着ぬ。富田甚五殿様々御馳走也。十六日伊勢の山田へまいり着ぬ。御